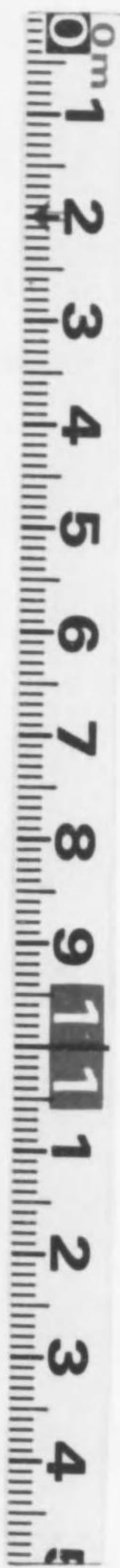


324
00

324-100
1200501379925



始



324-100

釋迦牟尼傳

明治
41 10 16
白交

自序

佛敎に南北兩傳あり、大小兩系あると同時に、佛傳にも亦自ら南北兩傳あり、大小兩系あり。是等二大流派に屬する佛傳の間には、一致の點あり、不一致の點あり。北傳佛敎の餘流を汲み、大乘系統の餘澤に浴する吾人の耳の熟する佛傳の大部分は、顧る神話的なりといへども、蓋し是等の傳説は、偶然にして起れるものにあらず。その裏面には何等かの意義なかるべからず。是等傳説の幾分に對して、その起原を尋ね、その意義を究めんと擬するは、此著の主眼なり。浩鍾の響は、撞木の大小によりて異なる。大聖釋尊の面目は、傳者の如何によりて、如何様にも活動せん。顧ふに、漢譯藏經中佛傳に關するもの、少くも十五種あり。魏近四人の筆に成れもの亦二十種を下らず。是等の著には、各々その特色あり、いづれも大聖の一面を描けるにあらざるはなし。而も猶大聖の研究は、こゝに盡きたりとしも見えず、その面目を發揮すべき餘地、猶十分に存するが如し。曩に井上博士の釋迦牟尼傳一たび出て、洛陽の紙價を高からしめしもの、これを示して餘りありといふべし。この著豈惜越にもこれを得たりといはんや。唯これによりて、若し大聖の一片影だも、捕へ得なば、予が願すなほち足れり。

明治四十一年九月

常盤大定謹識

釋迦牟尼傳目次

第一章 釋尊の生國及當時の列強

第一節 釋尊の生國

迦毘羅國の位置 廣袤及其政事……………二
 迦毘羅國に強國の間に介在せり……………四
 五強族表……………五

恆河流域に於ける四大王國の勃興……………三
 印度教學の中心……………五
 轉輪王起らんとす……………六

第二節 當時の列強

列強間の婚媾……………六
 波斯匿王の事蹟……………七
 跋蹉と阿槃提との姻親……………九
 優填王の事蹟……………二一
 跋耆、吠舍離、毘提訶、釋種、力士諸族は非印度民族なりしか……………二三
 釋種の國勢……………二三

摩伽陀と拘薩羅との姻親……………六
 阿闍世王の事蹟……………八
 波羅殊提提王の事蹟……………一〇
 跋耆族……………二二
 ………………二三

第二章 釋尊の系譜及釋種論

第一節 釋尊の系譜

釋種の起原……………一四
 四王八子の傳説……………一六

父系に關する異説紛々たり……………一六
 母系……………一七

目次

母后に關する異説……………一八

第二節 釋種論

釋種は蒙古民族の一派なるか……………一九

ビールの説……………二〇

姉崎氏の説……………二二

第三章 釋尊の降誕

過去七佛、未來佛……………二四

佛誕の奇瑞を傳ふる緣因……………二六

托胎中の狀況……………二八

相師の預言……………三〇

右脇七歩の意義……………三三

第四章 學生時期中の釋尊

文武兩道の師を驚かす……………三五

就學年齡に關する卑見……………三七

樹下の靜觀……………三九

大に武藝を現はす……………四一

納妃の年齡……………四二

第五章 在家時期中の釋尊

釋迦種族及拘利族……………一八

井上博士の説……………一九

那珂氏の疑難……………二〇

釋種は印度民族の一派なるか……………二二

南方所傳過去二十四佛……………二四

托胎下生の狀況……………二六

誕生の奇瑞……………二八

母后の上天……………三〇

誕生偈異説……………三三

其意義……………三五

如何なる教育を受けじか……………三六

太子の性格及精神……………三八

太子の納妃……………四〇

宮中の歡樂……………四二

一婦人の唱歌……………四四

父王、妃及太子の夢……………四六

城中の警戒と太子に對する諸天の加護……………四八

四種の瓦馬及三天使の譬喩……………五〇

第六章 出家時期中の釋尊

第一節 六年苦行

王舍城附近の仙人……………五二

哀別離苦……………五四

頻婆娑羅王太子を迎へて問答す……………五五

太子の歴問せる仙人……………五七

諸仙に絶望せりとの意義如何……………五九

一麻一米……………六一

五陰盛苦……………六二

第二節 菩提樹下の成道

苦行を捨つ……………六三

五比丘去る……………六四

降 覽……………六五

成道後三七日間の靜觀……………六六

佛陀の意義……………六七

四門出遊……………四二

羅睺羅の誕生……………四四

父王に訣別す……………四六

出家の決行……………四八

白馬電陟、御者車匿……………五二

五比丘太子に従ふ……………五四

太子の出家が當時の人心を動かせし理由……………五五

苦行仙人跋伽、事火外道、及阿藍伽藍、鬘頭羅仙人……………五七

太子の自覺……………五九

求不得苦……………六一

中 道……………六三

樹下石上の靜觀……………六四

二商主の供養……………六五

十二因縁の順逆兩觀……………六六

成道偈……………六七

第七章 說法時期中の釋尊

出家成道の年輪	六	姉崎博士の一年苦行説	四
之に對する卑見	六		六
第一節 四十五年總説			
成道後數年及入滅の年の事蹟の外は不明なり	七	十二遊經の所傳	七
八大靈塔經の所傳	七	僧伽羅刹經の所傳は唯一の材料なり	七
其一覽表	七	一代の說法と大藏經	六
大藏經を悉く佛説と傳へし理由	七		
第二節 最初の歸佛者			
異説多し	七	本行集經の傳	七
四分律の傳	八	五分律の傳	八
有部律の傳	八		
第三節 梵天勸請			
覺王涅槃を勸め、梵天說法を請ふ	八	佛敎の包容精神と、本地垂迹説	八
華嚴經	八		
第四節 三寶具足			
憂波迦婆羅門	八	鹿野苑に於て初めて法輪を轉す	八
五比丘に關する誤傳	八	轉法輪經	八
第五節 千二百五十人			
夏安居	八	耶舍の出家	八

優婆塞、優婆夷	八	富婁那の出家	八
六十一阿羅漢	八	弟子を遣はして四方に傳道す	八
三迦葉を度す	八	象頭山上の說法	九
竹園精舎	九	舍利弗、目連の出家	九
大迦葉出家	九	拘絺羅、迦旃延子の出家	九
王舎城民の不平	九		
第六節 諸釋出家			
佛陀の歸郷	九	迦留陀夷の出家	九
難陀、羅睺羅の出家	九	阿難、提婆、阿菟樓陀等の諸釋出家	九
優波離の出家と、四姓平等	九	諸釋出家の佛敎に對する功罪	九

第七節 祇園精舎

給孤獨長者の歸佛	九	長者の精舎建立の志願	九
祇陀太子の隨喜	九	波斯匿王歸佛	九
第八節 比丘尼			
阿難の請によりて尼僧あり	九	比丘尼の八則	九
女子の出家と佛敎	九		

第九節 上天

佛陀神通を現するを禁ず	九	外道の講説と頻王の請願	九
佛陀の現變上天	九	目連降下を請ふ	九
佛陀天上より僧徒會に下る	九	佛敎の創刻	九
上天の意義如何	九	外道の反抗	九

第十節 教團の分裂及び其回復

分裂の因縁……………108

佛陀調靜比丘を捨て去る……………110

開淨比丘の讖悔……………110

第十一節 阿難常隨の弟子となる

佛陀老年の故を以て常隨の弟子を求む……………111

阿難の三願……………113

阿難の未離欲と傳へらるゝ理由……………113

第十二節 提婆の自立

提婆の不平……………114

阿闍世太子との結託……………115

提婆自立の真相……………117

提婆の最後……………119

第十三節 王舎城の悲劇

頻婆娑羅王の家庭……………120

太子叛逆の理由……………123

父王從容として獄中に餓死す……………123

阿闍世、波斯匿兩王間の戰爭……………124

六師外道……………126

大涅槃經梵行品中の闍土……………127

第十四節 舍衛城の内亂

佛陀の教誡、長壽王の因縁……………108

三釋子の和合……………110

衆、阿難を薦む……………111

阿難常隨二十五年……………113

佛傳中最も不明なる年時……………113

自立の状況及其因縁……………115

提婆に關する佛典の貶黜……………116

貶黜傳説の意義……………118

阿闍世の命名因縁……………120

父王の宏量と太子の暴逆……………123

太子母后を幽閉す……………124

闍王讖悔して歸佛す……………125

善婆、闍王を導きて佛前に至る……………126

波斯匿王釋種に娶る……………128

王子の自立……………130

内亂の年月……………130

第十五節 迦毘羅城の滅亡

毘琉璃王釋種を討伐す……………131

釋種の武勇……………132

釋種の故地の發見……………133

第十六節 諸城變亂の結末

毘琉璃王、祇陀太子を殺す……………135

其地阿闍世王の爲に兼併せらる……………136

第十七節 法華經の説時

佛成道第四十二年説……………136

教相列釋と歴史的研究……………140

第十八節 大般涅槃

遊行經と涅槃經……………141

捺女と離軍……………143

自歸依、法師依……………144

最後の供養……………146

最後の弟子……………147

遺教……………149

末羅族の供養、茶毘……………151

釋種毘琉璃王子を辱かしむ……………128

父王客死す……………130

摩訶那摩一族に代りて死す……………131

釋種の滅亡……………132

滅亡の年月日……………133

王自立の後七日にして天死す……………135

當時の風潮……………137

佛入滅前三年なりしか、八年なりしか……………136

遊行經が長阿舎の劈頭にある理由……………141

竹林村に於ける佛陀の疾病……………143

三十七道品……………144

拘尸城外沙羅雙樹下……………146

阿難の悲歎と佛陀の慰藉……………148

佛陀の入滅……………150

大迦葉後れて至る……………151

第十九節 說法年譜

舍利八分	一五
成道より第一夏に至る	一五
第二夏後	一五七
第四夏後	一六
第六夏後	一五九
第八夏後	一六二
第十夏後	一六三
第十三夏後	一六四
第十五夏後	一六五
第十七夏後	一六六
第十九夏後	一六七
第二十一夏後	一六八
第三十八夏後	一七〇
第四十二夏後	一七〇
第四十四夏後	一七二
第一夏後	一五五
第三夏後	一五七
第五夏後	一五八
第七夏後	一六一
第九夏後	一六二
第十一夏後	一六三
第十四夏後	一六四
第十六夏後	一六五
第十八夏後	一六六
第二十夏後	一六七
第三十七夏後	一六八
第四十夏後	一七〇
第四十三夏後	一七一

第八章 佛傳餘論

一、佛傳に對する地方的影響	一七四
錫蘭島の佛牙、緬甸の佛牙、錫蘭島の佛頭骨、楞伽島遊化	一七四
二、佛傳と本生經との混同	一七六
檀特山の修行、雪山童子、割身代償	一七六

第九章 佛傳後語

三、耶蘇教會中の佛陀	一七七
セント、ヨサフアット、パライム及ヨアサフ物語、ヨサフアットは菩薩の轉化、此物語の流行、聖徒名簿	一七七
一、印度民族の理想の權化	一八二
佛陀は歴史的人格なりや、太陽神話の變形、梵文佛傳、巴利佛傳	一八二
三、菩薩と佛陀	一八六
本生譚、阿羅漢、辟支佛、佛陀、菩薩、生死涅槃の橋梁	一八六
五、菩薩と處生	一八六
華嚴經淨行品、四弘誓願	一八六
二、大般涅槃と法身常住	一八四
寂滅爲樂、生身法身、應化身	一八四
四、菩薩と大乘經典	一九三
菩薩の大願、應化、生死を樂む、菩薩の定義、釋迦牟尼の語義、佛教は教祖の精神性格の實現	一九三

釋迦牟尼傳目次終

釋迦牟尼傳

文學士 常盤大定著

第一章 釋尊の生國及當時の列強

第一節 釋尊の生國

佛教の開祖たる佛陀は、或は釋迦牟尼といはれ、或は瞿曇と呼ばれ、又悉達多の名あり。是等の三者の中、釋迦は族名なり、瞿曇は家名なり、悉達多是正しく其名なり。されば佛陀は釋迦種族の瞿曇家に生れたる悉達多てふ俗名を有せるなり。而して此瞿曇家は系圖正しき武門(刹帝利)にして、此家の屬する釋迦種族は、迦毘羅衛城に住せり。迦毘羅衛は初め城名なりしが、後に國名にも通用せられたり。此都城は、王舍城より六十由旬、吠舍離城より五十由旬、舍衛城より六七由旬なりきと記せらる。一由旬

を現時の里程に換算せんにつき、或は之を「ミマイルとする説もあり、或は之を「ミマイルとする説もあり、一定せざれども、前者に従へば、王舎城より日本里數の二百九十里餘、吠舍離城より二百四十里弱、舍衛城より三十里許の地にありしなり。」ミ骨の發見と、藍毘尼園に於ける阿育王碑文の發見とによりて、殆んど其位置を確定するを得たりといふ。西域記の記す所によれば、古代の迦毘羅衛國は、其周圍四千餘里、宮城の周圍十四五里なりきといふ。此一里は、一由旬を百里としての計算法に従へるものなれば、之を日本里數に換算する時は、僅に領域の周圍百九十里にして、王宮の廣袤二十二町餘に過ぎず、以て其國力をトすべし。斯の如き小都城、寧ろ小族が、當時各所に散在せしと覺しく、古典に其名を残す所のものにて、迦毘羅衛の外に八個あり、ミチャーツマー、ミサーマガーマ、ミクホマヅサ、ミシラーグヂー、ミメタルバ、ミウルムバ、ミサツカラ、及びミデーヴダハ是なり。是等の中最後のデーヴダハ(天臂城)は、釋迦種族と同一祖先より出てたる拘利族の都城にして、當時迦毘羅衛に従屬せり。釋迦種族は寡頭的、共和的、主義の政治に従ひ、城内に公堂を造り、老幼共にこゝに集會して、大事

を討論決定し、而して一人の長を選びて集會を督せしめ、集會なき時には、領域を治めしめたり。此長は、ミラーヂヤの稱を有し、佛陀の時代には、淨飯なるミラーヂヤと共に幾多のミラーヂヤありしは、古典の等しく明記する所なり。ミラーヂヤは常に王と譯せらるれども、釋種の場合に於ては、長者といふを尤も適當とすべし。迦毘羅衛城に公堂ありしと同時に、他の城市にも亦公堂あり、重要な都會には、皆之を有し、村落には之なかりしが、林間に集まりて議事を爲せりといふ。斯る政體は、甚だ古風なりしと見え、當時釋迦種族の外に、離車族、跋耆族の如きも、亦同様の族長政體を執れり。恒河の流域に強力なる王國の樹立ありしは、其起原頗る古く、佛陀の頃には、四大王國あり、漸次に勃興し來つて、次第に其周圍の小王國、及び共和的貴族國を合併せんとしつゝ、ありき。換言すれば、佛敎興起の頃より、印度を統一すべき王國を現出せんとするの狀勢次第に高まり來れるなり。四大王國とは、北方の拘薩羅、南方の摩伽陀、及び跋蹉、西南の阿槃提にして、是等の王國なるものは、僧侶の指導に従ひ政事を執るを、最も普通の形式とせるなり。拘薩羅國は釋種ミの西にあり、舍衛城に都し、波斯匿、毘琉璃の父子相次で之に王たり

き。摩伽陀國は釋種の南、拘薩羅の東南にあり、王舍城に都し、頻婆娑羅、阿闍世の父子相次て之に王たりき。跋蹉國は、拘薩羅の南にあり、拘蹉彌城に都し、優填之に王たりき。阿弊提は跋蹉の猶西南にあり、尉禪城に都し、波羅殊提之に王たりき。而して又拘薩羅、摩伽陀兩族の間には迦奢する地あり、屢々兩族の争ふ所となりしが、當時初は拘薩羅に屬し、後には摩伽陀に屬せり。又摩伽陀の東に鶯伽族あり、摩伽陀の勢力に對抗するを得ず、遂に和を講じて其下風に立ち、僅に命脈を保てり。迦毘羅衛は、其風俗、政躰等よりいへば、東部の強族跋耆に類せりと雖も、其領域よりいへば、西部の強國拘薩羅の版圖内に包容せられ、加之、南方に摩伽陀の強國ありしを以て、迦毘羅衛を中心として見る時は、其三方面の強族相鼎立して、互に其隙を伺ひ、直に并呑の手を延さんとせり。釋種は是等強族の間に挟まれて權力平均の上より、其獨立を保維せしも、寧ろ前述の如く、拘薩羅族の保護に依頼せりと見るを至當とす。唯其系譜の正しきを以て、自他共に貴姓を以て許せるのみ。此間の消息を解する時は、後に拘薩羅王が釋種の女を請求せる時に當り、釋種は之を厭ひつゝも、其要求を拒むを得ず、爲に詭計を用ひて、後日の憤怒を招き、遂に滅亡せるの意味を解し得べし。されば當

時の強族を舉れば、總計五個ありしも、就中、舞臺の中心として、四邊に影響すべき種々の問題を惹起せるものは、拘薩羅及び摩伽陀兩國にして、教學の中心は、是等兩國の權力の消長によりて定まりしなり。佛陀の初年は、兩者對當の地位にありしが、漸次に南方の阿闍世王は、其勢を張り來りて、佛陀の晩年より滅後二三年の間に、遂に北印を統一し、一大國王となれり。要するに佛陀の時代は、教學に於ても、政事に於ても、甚しき活潑變遷の時期たりしなり。是等五強族を表すれば、次の如し。

(國族)

都城

王

- 一、拘薩羅(十迦奢十迦毘羅衛) — 舍 衛 — 波斯匿及毘琉璃
- 二、摩伽陀(十鶯迦) — 王 舍 — 頻婆娑羅及阿闍世
- 三、跋蹉 — 拘蹉彌 — 優填
- 四、阿弊提 — 尉 禪 — 波羅殊提
- 五、跋耆(離車、毘提、訶等の十六族) — 彌締羅? — 寡頭的

當時の強族を記述するに當り、現今の風に從ひ、國名を以て之を呼ぶと雖も、是等強族の占領範圍明白なるにあらず、又一國の躰裁を爲せるにあらず、次第に今日の意

味に於ける大國大王を現出せんとするの機運に際會しつゝありしも、佛陀初年の頃は部族各地に割據せりと見るを至當とす。彼の天下統一の意味を有する轉輪王の思想は、當時に之ありしとも思はれず、獨り阿闍世王は幾分か之を實現せるの觀ありと雖も、猶未だ此思想を誘起するまでには至らざりき。佛滅百四十年頃の月護大王に至りて、稍之を實現し、其孫阿育大王に至りて、正しく轉輪聖王の實を擧げたるなり。此點より見れば、轉輪王思想も、亦是聖典成立の年代研究上の一資料たるを得べし。

第二節 當時の列強

以上は迦毘羅衛を中心として叙述せり、筆を轉じて、他の王國につき一言すべし。蓋し初紀の佛教を研究するに於て、此等列強の狀況は、深き關係を有するを以てなり。前述の四王國は、互に婚媾を以て連絡せるが如し、拘薩羅と摩伽陀との間に、及び跋蹉と阿槃提との間に、姻親ありしことは、佛典によりて之を證明するを得べし。摩伽陀國頻婆娑羅王の妃を拘薩羅夫人といふ。拘薩羅國王波斯匿の妹なりき。頻王、第二

の妃韋提希夫人の所生、阿闍世太子の爲に殺さるるや、拘薩羅夫人も亦悲哀の爲に死せり。波王大に怒り、夫人が湯沐の邑として、夫人に附して摩伽陀に屬せしめたる迦奢の地を沒收せしかば、阿闍世亦怒りて、拘薩羅に對して宣戰し、爾來連年兵を結び、初の三戰は波王の敗に歸せしが、第四戰に於て大勝を得て、闍王を捕虜と爲し、彼が其望を放棄するに至りて之を免せり。波王は曾に之を免せるのみならず、其女を以て、新に闍王に嫁せしめ、復迦奢の地を其女に附して、これを摩伽陀に屬せしめたり。波王の此大度は、佛教の感化より來れるものゝ如し。其後三年許を歴て、波王は、其子毘琉璃の自立に遇ひ、遁れて闍王に據らんとし、遂に疾を得て歿せり。王の本名は、アグニゲッタなりき。波斯匿勝軍の名は、綽號なりしと覺しく、多くの王に通用せらるゝを見る。王は大拘薩羅王の子なりき。幼にして西北の古國德叉尸羅に學び、歸國して父王の讓りを受け、心を政事に用ひ、諸教諸派に保護を與へたり。王が歸佛せるは、佛陀と一席の對話によりしとぞ。此時、王の叔母須摩那も亦佛陀に歸依し、母の死に遇ひ、出家して羅漢位を得たり。其作に係る偈頌は、長老尼偈中に現存すといふ。王が其子、毘琉璃の爲に追はれしは、迦毘羅衛城の滅亡と大なる關係あり。此事跡は、佛

陀の晩年に起れるものなれば、後に至りて詳述する所あるべし。

摩伽陀國王阿闍世に關する事跡も、亦佛典中に傳へらるゝ所甚だ多し。王は頻婆娑羅王の老後の子なり。其母が韋提希の名を有するより見れば、摩伽陀と毘提訶との間にも姻戚の關係ありしを知る。夫人は實に毘提訶族彌緇羅城の出なりき。提婆達多が、佛教々團の和合を破り、別に一派を立てたるは、佛滅以前八九年のことにして、王が猶太子たる時なりき。太子大に彼に歸依し、頗る之を保護し、其勸誘によりて父王を幽閉し、遂に之を餓死せしめたり。そのこゝに至れる因縁は明白ならず。これ或は拘薩羅及び毘提訶兩族が、摩伽陀國を舞臺として演ぜる暗闘の結果なるやも知るべからず。時に佛滅前八年のことなりき。斯くて太子は、自立して王となり。甚だ勢力を張りしも、後に至りて大に之を悔い、悔過の餘遂に歸佛せり。此事跡は後に至りて詳述する所あるべし。當時摩伽陀の對岸の跋耆族甚だ勢力あり、動もすれば、摩伽陀の隙を窺はんとする所ありき。闍王巴連弗村に城きて、之を備ふる所ありしが、次第に勢力を得て、佛滅の後遠からずして、之を討滅せり。闍王は亦西南阿槃提國王波羅殊提の襲撃を慮り、王舍城の塞壁を治めたることありしが、此兩國間の關係は詳

ならず。唯其後二百年を経て、尉禪が摩伽陀に従屬し、阿育大王が太子たりし時、こゝに治在せるを知るのみ。此間の阿槃提の國狀如何は、今日之を知るを得ず。佛滅の後、闍王は佛陀と同じく、武門に屬するの故を以て、舍利の分配を乞ひ、又第一佛典結集の時、其一切の資具を供給して之を成就せしめたり。猶又王と舍利弗及び阿難との關係に就きても、佛典中に傳ふる所少からず。或はいふ、王の佛教に與へたる保護は、凡ての印度國大王に見るが如く、歸依の念よりせるにあらずして、一切の教學に對する寛大の態度よりせるものに過ぎずと。

他の二大王國たる跋蹉及び阿槃提の兩王家も、亦婚媾によりて、互に連合せるが如し。之に關して、奇妙なる傳説あり。阿槃提王波羅殊提、一日家臣に向ひ、四海に於て己れに勝れる王者ありや否やを問へることあり。皆いふ、跋蹉國王優填、最も勝れたり。是に於てか、波羅殊提王、計を以て優填王を捕へんとし、彼が狩象を好むに乗じ、木象を造りて之を隘路に置き、其腹中に六十人の兵士を隠し、以て彼を誘ふ。優填王果して彼木象を捕へんとして、獨り之に近づき、全く其術中に陥りて生擒せられぬ。此王野象を馴致する不思議の咒文を知りしかば、波羅殊提之を知らんとするの念に禁

へず、即ちいふ、若し呪象の法を教へなば、放ち歸らしむべし。優填王いふ、汝若し師に事ふるの禮を以てせば、我能く之を教ふべし。波羅王聽かずしていふ、若し教へずんば、刑を加へん。曰く、我軀は汝の心のまゝなり。されども我心は然すべからず。波羅王謂へらく、天下此呪文を知るもの、彼王を措きて外に之あるなし。未だ容易に彼を刑すべからず。即ちいふ、若し弟子の禮を執るものあらば、之を教ふべきや、否や。曰く、可なり。波羅王即ち王女をして、帷中に於て帷を隔て、之を學ばしむ。一陣の風吹き來りて帷を披く。二人相見て忽ち相愛するに至り、相計りて、呪文を學ばんが爲の準備として、一種の藥草を得るの必要あるを以て、王に説き、其許可を得て、大象に乗じ、二人相携へて脱走せり。波羅王既にして之を覺り、大に之を悔い、軍兵をして之を追はしめ、たれども及ばず。斯くて優填王は事なくして拘睺彌城に歸り、華美なる儀式を以て、彼王女を立て、夫人とせり。其名はグリースラ、ダツターなりきと。

以上はそのまゝを歴史的事實として承認することを得ざるべし。されども兩王の同時代なること、兩王の間に姻戚の關係ありしこと、又戰爭ありしこと、は、稍明白なるが如し。波羅殊提王に關して、猶一の類似傳説あり。一時病ありて摩伽陀國王

に使を遣はし、名醫耆婆を招聘せしが、耆婆診察の後、之を治せんには、王の好まざる藥餌によらざるべからざるを知り、詐りて之を用ひ、王が覺らば怒りて刑戮を加ふべきを知り、藥草を取らんと稱して脱走せりといふものは是なり。此傳説によりて、摩伽陀と阿槃提との間に、交際ありしこと、王と耆婆と同時代なりしこと、王の勢力は摩伽陀國の大王をも憚らしめしこと、を知るを得べし。

拘睺彌の優填王に關しては、佛典中種々の事蹟を傳ふ。一日宴遊して園中に醉眠し、覺むれば宮女皆在らず、之を尋ねて、皆賓頭盧尊者の説法を聞きつゝあるを見て、大に怒り、尊者を蟻攻せしが、却りて其説法によりて歸佛し、頗る佛教信者となれりとぞ。賓頭盧突羅闍爲優陀延王説法經なるものは、此時の説法に擬せらるゝものならん。此經の初に王が六十一藝を具備せりとて、之を列する中に、咒象の法によりて山象を成く集むるを知ることとを記す。王に三夫人ありき。第一夫人は歸佛の念篤く、一日齋日に當るの故を以て、王の宴席に來らざることありき。王之を怒りて、自ら之を射殺せんとして、奇跡に遇ひ、之に驚きて歸佛せりとの傳説もあり。又佛陀が母后摩耶夫人の爲に、三月間、忉利天に昇りて説法せしとき、王は長く佛を見ざるの故を以

て、悲愁の餘病を得たりしかば群臣互に議して、佛像を刻みて王に見せしに、忽ちに回復せりとの傳説もあり、皆是王が歸佛の念の篤かりしを證明す、佛陀が屢々此國に布教せることは、幾多の經律に於て、明白に之れを知るを得、王は佛滅の後まで残り、王子の名は菩提と呼ばれたり、此王子を對機とせる經典もあり。

以上の四大王國の外に、拘薩羅よりは東方摩伽陀よりは北方に、跋耆なる強族ありき、跋耆とは毘提訶、離車等の如き十六族を總稱せるものなり、毘提訶族の都を彌締羅といひ、離車族の都を吠舍離といふ、是等の諸族は皆寡頭的族長政治に依て其統一の維持せると、宛も釋迦種族の如し、是等の諸族が他の諸國と同じき印度民族に屬せしや否やに付ては、學者の間に議論の存する所なり、若し夫れ古の毘提訶王國に至りては、勿論印度民族の正統を以て自任せる所にて、其王統の中にはウパニシヤツド哲學の創設者として、學德兼備の明君闍那迦王の如きものありしと雖も、當時は唯古の國名を保有せるのみにして、他の印度民族とは頗る政體風習を異にせる諸族の占領せる所なりき、是等諸族概ね佛陀に、歸依し、佛陀の遊化せることも一再到らざりき、殊に尤も摩伽陀に近き吠舍離城は、舍衛城、王舍城に次ぎて佛陀の

最も多く説法せる所なるのみならず、維摩居士の生地として佛典上甚だ有名なり、居士の如き大乘の在家菩薩が、果して當時世に在りしや否やは、大なる疑問の存する所なれども、此地に擬するに此居士を以てせるは、此地と佛教との關係の密接なるを反證して餘りありといふべし、佛陀の晩年、阿闍世王跋耆を討滅せんとするの意あり、之を佛陀に諮問せしに、佛陀は此族に七個の長處あり、到底滅亡せざるべきを以て諭せしかば、闍王は一旦其志を翻せしが、佛滅の後遂に其意を達せり、七個の長處とは、數々集會して政事を講論し、又は道德を尊敬し、沙門を供養せるが如き是なり、以て是等諸族が共和主義によりて政治を執るのみならず、上下心を一にして法を尊び徳を重んぜるをトすべし、釋種又は力士族の如きも、或は跋耆と同一人種に屬し、所謂印度民族にあらざるべしとの疑問起らざるにあらざり、是實に泰西の學者間に古來議論の存する所にして、井上那珂兩博士の間に論争ありし所なり、以上の叙述によりて、釋迦種族の北印度に於ける當時の位置及び國勢の一般をトすべし、要するに釋種は西の方拘薩羅、南の方摩伽陀の二大王國と、東の方跋耆の強族との間に介在せる一小部族にして、近世の所謂權力平均の關係上より其獨立を

保維せるの觀あり、一步を進めていへば、拘羅薩國內の一豪族に過ぎざりしなり。されども其血統の純潔なることと、尙武の氣風の盛なることとに於て、優に大國強族の間に伍して其名聲を維持し、之を大にしては、大國強族の敬意を博し、之を小にしては、小族小國の畏憚する所となりしが如し。さはれ、内外多端なる動搖時期に際し、王權の擴張に伴ひ、一大王國の現出を見ずんば止まざる風潮に會しては、周圍の小國小族と其運命を共にせざるを得ざりき。是佛陀の晩年、離車、毘提訶等の諸族と共に、あはれ果敢なくも滅亡して、復興るを得ざりし所以なり。

第二章 釋尊の系譜及び釋種論

第一節 釋尊の系譜

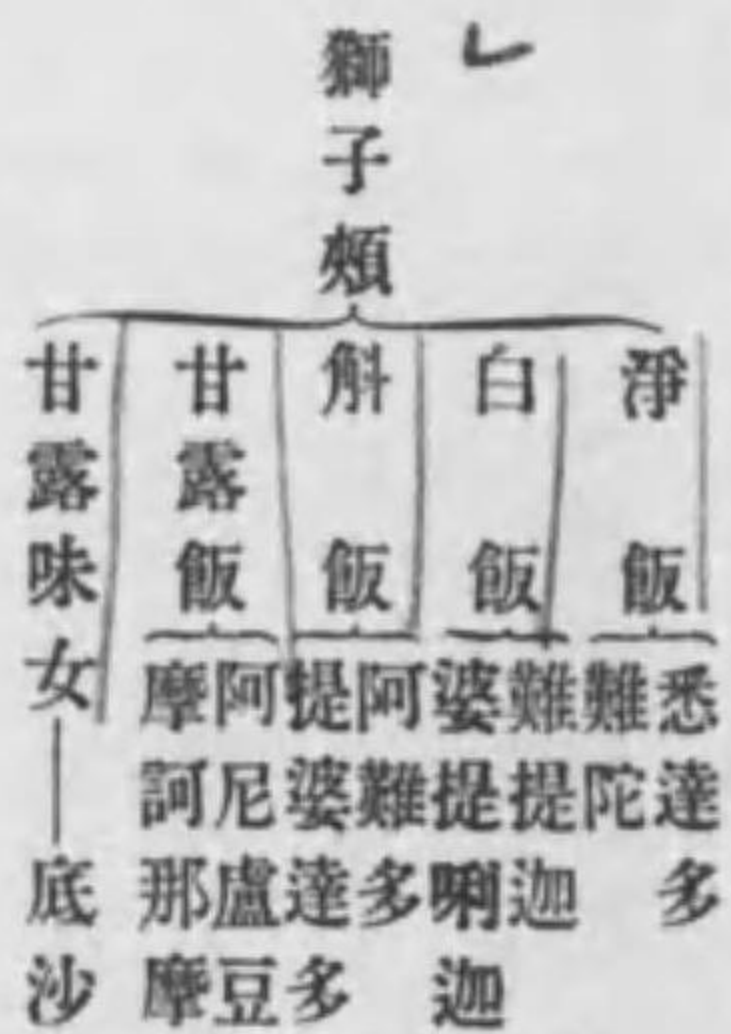
釋尊の系譜につきては、佛典に據るの外、他の史料なく、而も佛典の傳ふる所、異說紛々として、適從する所なからんとす。本行集經に據る時は、褒多那城に治在せる日種の甘蔗王に二妃あり、第一妃の所生を長壽といひ、第二妃の所生を炬面、金色、象衆、別

成といふ。王時に第一妃の要請によりて、罪なきに第二妃の、四王子を放ち、命じて他姓を娶らざらしむ。四王子北の方雪山邊に至り、國を建て、甚だ榮えたり。後日に至り、甘蔗王、國師の婆羅門を召して之に謂ふ、我四子今いづこにかある。國師答ふ、彼四王子は、各自に母姨姉妹駄乘人物を將て、遠く國外に出て、北方に向て去り、國を建て、甚だ榮え、今や端正の男女を生めり。父王之を聞き、喜んでいふ、彼諸子能く國計を立て、大に治化を好くす。この故に、彼四子は姓を立て、釋迦と稱し、又大樹の蒼蔚たる枝條の下に住するを以ての故に、耆夷耆耶と名け、又迦毘羅仙の處に住するに本づくが故に、城の名を迦毘羅婆蘇都と名けたり。云々。是或は釋迦の語の基たるシャクに能の意義を有するより起れる印度特有の文學なるべし。固有名詞の語義を分解して、通俗的、神話的説明を興へ、一種の文學を構成するは、印度に於て普通の事なりとす。されども此文學の中にも幾分の史實を含むや、疑なかるべし。即ち此種族が、褒多那城の甘蔗大王の後裔の東移せるものなること、其居城迦毘羅衛が、迦毘羅仙人に何等かの關係を有すること、是なり。

以上の如く、文學の奥底に潜める骨格を以て、史實とするも、之に附隨せる事跡に至

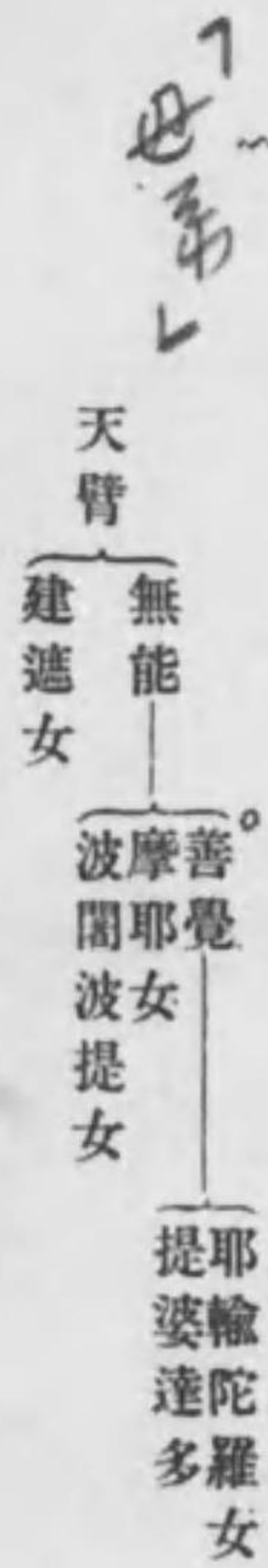
りては、異説紛々として結歸し難きものあり。五分律、起世經、本行集經、有部律には、釋種を以て第四の王子より出てたるものと爲し、四分律、長阿含經、大樓炭經、衆許摩訶帝經には、第一の王子より出てたるものと爲し、又釋尊の祖父師子頰王に至るまでの間に、大樓炭經は僅に一世を立て、起世經、本行集經、長阿含經、四分律は二世を立て、五分律、彰所知論は三世を立て、有部律に至りては、實に五萬五千餘世を立つ。若しその多きに從ふ時は、四王子の後二世を経て、師子頰王に至り、其後に淨飯王ありと爲すべし。釋尊は實に淨飯王の太子たりしなり。多數の説必ずしも價值あるにあらず。れども、今しばらく歸結を附せるのみ。

さて又師子頰王の後に四王八子の傳説あり。是亦其所傳區々として、遂に結論を得がたし。唯獨り一致するは、淨飯王の二子が悉達及び難陀たりしことのみにして、他の阿難、提婆、阿那律、摩阿男、難提、跋提の六子に至りては、起世經、五分律、有部律、本行集經、十二遊經、彰所知論、大論等の所傳殆んど一致する所なし。一々異説を並列し難きを以て、本行集經の所傳を定説と爲し、之に從ふ時は次の如し。



斯の如き異説あるに加へて、南傳にては、提婆達多を以て、拘利族善覺長者の子にして、耶輸陀羅女の兄弟と爲す。北傳と全く相容れずといふべし。いづれに從ふべきか、今日にては到底之を決すべきなし。

以上は釋尊の父王の系譜なれども、其母系は拘利族天臂城に出てたり。此系譜は北傳に見えざるを以て、南傳に從へば左の如く、摩耶夫人を以て、無能王の女にして、善覺長者の妹と爲す。



善覺長者の兩妹、摩耶及び波闍波提、共に淨飯王に嫁し、摩耶は釋尊の生母たり、波闍波提は養母たりしなり。但し、北傳にては、兩女を以て共に善覺長者の女と爲すを普通とす。本行集經、衆許摩訶帝經の如き是なり。猶又本行集經には、長者に八女あり、其最長を意といひ、最小を大慧とかふ。淨飯王八女を共に娶りて、最長最少の二女のみを取り、他は兄弟三人に分與せりと爲す。恐くは四王八子の傳説成立後に出でたる説なるべし。

以上によりて之を見るに、釋種は寡頭的族長政治に加ふるに、共和主義を以てし、一族の長者相集まりて、一族の方針を定めたるものなるべく、之をラージャ(王)と呼ぶも、今日の君主の如き觀念を以てするは當らず。先づ族長又は長者と見れば、大過なかるべし。恰も本邦の源氏の長者の如きか。當時釋迦種族は、ロヒニー河を隔てて、迦毘羅衛及び拘利の二族に分れ、迦毘羅衛の淨飯王之が族長として、釋種を統一し、拘利城は其指揮の下に立ちしなり。

第二節 釋種論

釋種は印度日耳曼人種の一支派にして、他の印度民族と同じく、甘蔗王の後裔なりとは、學者の等しく認めて疑はざる所なりしが、最近に至りて、井上哲次郎博士は、一の異説を提出せり。其要點をいへば、希臘人の漠然スキタエと呼べるものの中に屬せしサカなる種族と、釋迦人種と同一ならんといふにあり。此説に對して有力なる證據と爲るものは、漢書西域傳の記事にして、其中に曰く、大夏氏、西君、大夏、而塞王、南君、屬賓、塞種、分散、往々爲數國、自疏勒、以西北、休循、捐毒、之屬、皆故塞種也。顏師古、塞種に註して曰く、即所謂釋種者也。亦語有輕重耳。と。井上博士謂へらく、釋迦の名稱は北方蒙古人種中に用ひられ、南方にては一般に瞿曇の名稱を用ふ。釋迦の名稱が、北方にのみ廣く行はれたるは、同一人種に屬すとの根據あるが爲ならん。此種族は、西北より印度に入り來り、一時浮陀落、褒多那、城に治在して、勢力を張り、其最後の王は懿摩、毘盧、擇迦と呼ばれたり。但し、これは歴史上に見ゆる最後の移動にして、其前幾回かに侵入し來れるものなり。塞種の本居と、釋種の起れる本居とを見るに、殆んど其地を同じくするを知る。これ同名を有する異種には非るべし。希臘語のスキタエは、ゴテン語のスキアタ(射箭者)より來れるものなり。釋種が頗る射技に巧みなりしは、

其スキタエたりし證と爲すに足る。釋種果して支那人の塞種、希臘人のスキタエ種なりとせば、釋尊は實に吾人と同一人種に屬す。吾人は同一人種中に此千古の偉人ありしを誇りと爲すに足る。云云。

此説は井上博士によりて詳細に論述せられたれども、全くの新説にはあらず。泰西の東洋學者ケルン、ハンター、ピール諸氏が嘗て論ぜる所にして、キルソン、エーベル諸氏も亦之を是定するが如き傾ありき。ピールの説に曰く、印度には西北より侵入せるアリヤンの外に、他方より侵入せる他人種あり。西藏地方より雪山を越えて、北方印度に入りし釋迦、跋耆、末羅、離車等の諸族皆之に屬すと。但し、是等諸氏の説は、未だ其要を盡せるものにあらず、一個の臆説を立てたるまでに過ぎざりしが、井上博士は、之に對して、多く佛典によりて出來得る限りの根據を與へたるものなり。井上博士此説を發表するや、那珂通世氏之に對して、數個の疑義を提出し、之が解決を與へて、其喜びを分たれんことを求めたり。之に對する井上博士の答辨は、釋迦種族論として單行せらるゝもの是れなり。前掲の博士の説は此の著より拔萃せるものなり。

いづれにせよ、古き年代に關する研究なれば、井上那珂兩氏の間にも異論ありしが如く、之を肯定し、又は否定するに足るべき材料なく、結局未定の問題として、今日に残る所なり。今後有力なる證據の發見せらるゝに非んば、遂に是不明の疑問なるべし。姉崎正治氏之につきて論じて曰く、説の可否は未定として、兎も角兩種族間に存する類似の點を舉れば、實に著しきものあり。(一)四と八との數を特に重要視せること。是なり。例せば佛敎の原理を四諦、八正道に分類せるが如き、又四念處、四神足、四意斷、四向、四果等を説けるが如き、又佛典中に八解脱、舍利八分、八音等を立てたる、或は又三十二相、八十種好が、四又は八の倍數なる、皆此の特質を現はせるものなり。然るにアリヤン民族を見るに殆んど此風なきに反し、スキタエ種族には、各四個の金器を有する風あり、又其墳墓より八個の銀盃を發掘せることあり。此族が四八の數に對して何等かの意義を附せるに似たり。(二)遺物を崇拜し、墳墓を重んずるの風も、兩族の間に類似あり。釋種には、淨飯王が父王の弓を祭れりとの傳説あり。釋尊が、舍利弗、目連を初め、其他の弟子の入寂せる時に、其遺骨を祭り、塔を起さしめたる事跡あり。佛陀に關するものは、數ふるに遑あらざる程の多數ある中、殊に注目すべきは、各國

王が兵力に訴へんとするまでの熱心を以て、佛舍利を八分せしと傳へらるると是なり。然るにアリヤン民族を見るに、古代にありては祖先を祭りしと雖も、之を家庭の中に行ひしを以て、大なる墳墓を起すことなく、死者の遺物は、多くは之を焼き、又は僧侶に布施するを常とし、其葬儀には埋葬と火葬と風葬との三種ありしが、いづれにせよ、死後に於て之を貴び祭ることはなかりき。之に反して、スキタエは頗る墳墓を重んぜり。(三)射技の類似も亦注目すべし。釋種が射に長じ殊に此技を重んぜるとは、古典の等しく明記する所、釋尊が太子たりし時に、射術に於て諸釋と争へる傳説は、頗る有名なるものなり。然るにアリヤンは當時牧畜の時期を去りて農業に従事せしかば、特に射を重んずることなかりき。之に反してスキタエは必ず弓を携へ墳墓の中にも之を埋むるを常とせり。(四)金器相傳の傳説も亦類似の中に數ふるを得べし。耶輸陀羅女、曾て羅睺羅をして、佛陀に至りて遺産を相續せんを乞はしめたることありき。遺産とは、國王相傳の四個の金盃なりきといふ。スキタエにも亦四個の金寶鋤、鞭、斧、盃を傳へて、之を寶とし、毎年之を祭るの風ありきといふ。他にも猶幾多の類似あれども、重要なものにあらずと考へらるゝを以て、之を略す。

上述の類似のみにては、勿論兩者の同一を證明するに足らざられども、亦之を看過すべからず。學に忠なるものは、是等の學者の研究に對して、適當の注意を拂はざるべからず。

思ふに、印度民族が、五河地方を去りて、恒河の流域に土着するや、西に拘留、般遮羅兩族の如き月種あり、東に拘薩羅、毘提訶、迦奢、摩伽陀、耆伽諸族の如き日種あり。其他幾多の大小部族に分れて、釋尊當時に至りては、分派に分派を重ねて、いづれが果して純粹の印度民族なるべきか、いづれが果して真正の武門なるべきかを判じ難かりしものありけんかし。且つや迦毘羅衛の釋種を始めとして、離車、摩伽陀等、皆是れ婆羅門の所謂中國の範圍を脱し、時には他人種の血又は他姓の血を混ぜるものもありけん。摩菟の法典を案ずるに、毘提訶、拘薩羅、摩伽陀の如きは、諸姓の雜婚より生ぜる新姓の名稱として掲げらる。恐くは、當時の王者は、よし權勢の大ありとも、多くは純粹の武門ならざりしならん。その中に於て、獨り釋種が純粹の武門の血を保維せしことは、其傳説の上のみにあらず、實に其相好風土の上にも現はれたりしと覺し。これこの種族が、拘薩羅、摩伽陀の如き大國に比すれば、到底物の數にもあらざる程

の小族なるにも關らず、貴姓を以て自他共に許し、頗る他の畏敬を買へる所以ならん。四姓を峻別する印度民族に取りては、此一事決して輕々に看過すべからざるなり。斯く見る時は、釋種を以て印度民族の一支派と爲す方、尤も了解し易きに似たり。そが拘薩羅、摩伽陀等に反し、寡頭的、共和的政體を取りしは、是偶々純粹の古風を保守し、依然從來の習俗を失はざりしを反證するものなり。

第三章 釋尊の降誕

長阿含經の初の大本經に於て、過去七佛を説く下に、釋尊に就て概括的筆法を用ひて曰く、此賢劫中、人壽百歳の時の出世、父は淨飯利利王種、母は大清淨妙、或は大化、王の所治の城は迦毘羅衛、姓は瞿曇、鉢多樹下に最正覺を成し、一會の説法、弟子千二百五十人、諸弟子中の第一は舍利弗、目連、執事の弟子は阿難、子は羅睺羅と、而して諸佛の常法なりとて、七佛中最古の毗婆尸菩薩の降神、誕生、出家、成道の狀況を説く、移して以て釋尊のそれと爲すを得べし。元來菩薩も、佛陀は、初は獨り釋尊にのみ用ひられたるものなれども、時の進むに従ひ、佛徒の佛陀觀、著しく發展變遷し、從て菩薩の

思想も自ら進歩して、共に其語の内容にも、外延にも、變化を來し、斯くて佛陀としては、過去七佛の思想を生じ、菩薩としては彌勒の思想を生ずるに至りしなり。七佛も、彌勒も、其根原に遡れば、釋尊一佛中より流出せるものなるを以て、そが八相成道の形式は、悉く釋尊を模型として描かるるを見る。これ釋尊の傳記が一般化して、諸佛の常法となれる所以なり。

過去七佛の思想は、南北兩傳に共通なれども、二十四佛の記事は、獨り南傳にのみ存して、北傳になき所なり。彼の小阿含經中に屬せらるる、佛陀史傳なるもの、中に記さるる所の是等二十四佛は、長年月を隔て、世にあらはれ、同一の説法を爲し、其説法は、其佛入滅の後にも、一時世に存すれども、次第に衰頹して、遂に全く忘れられ、暴惡のみ獨り世を支配するに至るや、新佛出世して、更に復失はれたる法を説き、以て世間を照すものなり。釋尊以前に斯の如き佛陀の數、二十四あり。今後五千年を経過する時は、釋迦の教法世に忘れられて、彌勒の出世を見るべしといふ。

此佛陀史傳の二十四佛なる思想は、長阿含經の七佛の思想に後れて成立せるものにして、北傳佛教と何等の交渉なく、單獨の發達を爲せるものなるが如し。但し、北傳

佛典中にも類似的の思想所々に見ゆ。無量壽經中の過去五十三佛の如きは、其一例なるべし。又北傳にては、未來の佛たる彌勒の出世年代に、幾多の異説あり。通例、五十六億七千萬年の後と爲し、其最小限度と思はるゝ。般泥洹經にも、猶一億四千萬年後と爲す。之を南傳の五千年に比する時は、到底同日の談にあらず。以て思想發展の順序を知るべく、從て又經典成立の前後をトすべし。

完全なる人格を以て、上一般の歸向を集めたる釋尊の入滅するや、之を追慕愛敬するの餘、一方には本生譚の發達を見、他方には過去佛、未來佛の思想を招き起し、之と同時に一切智者と爲し、隨て無垢純淨のものとなすは、早き時代より成立せる佛陀觀なりき。既に一切智者純淨無垢のものならば、通常の人類と同一の方法によりて誕生すべきの理なし。これ佛傳が誕生の奇瑞に筆を極むる所以なり。父王は王族にして財と力とに満てり、母后は人類中の最良最淨の女人なりき。而も太子は假りに之を浮世の父母と仰げるのみ。其實をいへば、父王は單に人身を受くる方便としてのものに過ぎず。太子の前身は兜率天中の一天子なりき。下生すべき時機の至れるを見るや、自ら選んで母后に托胎せるなり。是を以て誕生後直に七歩して、其高き

性格を述べ、將來の偉大を預言し、天地萬物皆この降誕を祝し、無憂樹自ら枝を垂れて母后を蔽ひ、天使下りて母子を扶助せりと傳へらる。佛傳が斯の如き光彩を以て托胎下生の光景因縁を描けるは、出家以前の榮華に筆を極めたと、其意向を同じくするものにして、之を出家乞食時期の風丰に對照し、よりにて出世の慈悲を表はさんが爲に外ならず。教徒の佛陀に對する信念が、いつか凝りて、自らこゝに究極すべきは、蓋し至當の順序なるべし。

主として長阿含經に基つき、托胎下生の狀況を叙述せん。菩薩の兜率天より神を母胎に降すや、右脇より入りて、正念亂れず、爾時大地震動を爲し、大光明ありて普く世界を照し、幽冥の衆生皆見ることを得たりき。後の傳者は猶一步を進めて托胎の狀況を描く。神聖清淨なる摩耶夫人、七日の間斷食別居の後、一夜天上に運ばれて、白象の形を爲せるものゝ、其右脇より入胎するを夢みたり。覺めて後之を大王に語る。大王直に幾多の占夢婆羅門を集めて夢の意味を判斷せしむ。曰く、此兒在家せば、轉輪王たるべく、出家せば佛陀たるべき瑞相なり。西人之を見て謂へらく、太陽神話の變形たる轉輪王に對する幾多の信仰が、或はそのまゝにて、或は精神的の意味を取り

て、佛陀に加へられたるもの、實に佛傳の大部を形成するが如し。例せば、白象の如きは、太陽神話に關係なくんば、到底之を解釋するを得ず。之を古文學に照すに、白象は太陽の表示たり。而して太陽は虚空の轉輪王なりと。此說頗る妙なるに似たりと雖も、而も予は斯の如き迂路を歴て、此白象を太陽神話に關係せしむるを欲せず。象は印度人の尤も貴重とする動物にして、偉大なるものを表示する時に常に用ふる所のものなり。佛陀の前身を最も偉大ならしめんが爲に、之を白象と爲すは、印度人の尤も考へ易しとする所なるべし。斯くて佛陀の托胎するや、後の傳者は、八方の世界皆光明に滿ち、盲者は見、聾者は聞き、啞者は語り、僂僂は直立し、跛者は歩み、囚人は釋さるゝが如き、三十有二の瑞相あらはれ、天地の萬物皆笑み喜び、地獄の火悉く滅して、墮獄の罪人も、皆苦まざるを得たりきと爲す。

托胎後、母後の身安穩にして、衆くの惱害なく、智慧增益し、自ら胎中の菩薩の身を見るに、諸根具足して紫磨金の瑕穢なきが如く、内外清徹して些の障翳なく、而して四天子あり、戈矛を執りて之を侍護せりといふ。後の傳者は、一步を進めて、菩薩十月の間に、眼見るを得、母胎を傷つけずして、手を動かし、保護しつゝある天子に向ひ、説法

せりと爲す。母后受胎後、心清淨にして欲想なく、五戒を奉持し、梵行清淨、篤信仁愛、諸善成就、安樂無畏なりきとぞ。是の命終の後、忉利天に上生せし所以なり。

母后一日出遊して藍毘尼園に至る。南傳に従へば、親里に還りて産を爲すは印度の風習なりければ、母后此風を追ひ、故郷に歸らんとして、途に藍毘尼園に休息せるなりといふ。時宛も無憂樹の花爛熳たり。或は之を波羅叉樹と爲し、或は沙羅樹と爲す。母后手に樹枝を執り、坐せず臥さず。此時菩薩右脇より出て、專念亂れず。時に地大に震動して光明普く照せり。四天子あり、手に香水を奉じ、母後の前に於て、立て言ふ。唯然り、天母、今聖子を生む。憂感を懷くなかれ。胎を出てたる菩薩の身清淨にして、穢惡の汚染する所とならざること、其狀恰も淨明の珠を以て白繒の上に投ずるに、二俱に淨きが故に、兩ながら相汚さざるが如し。右脇より出て、地に墮つるや、行くこと七歩、人の扶持するなくして、遍く四方を觀、手を舉げて言く、天上天下、唯我尊、要度衆生、生老病死、後の傳者、或は四方に歩むと爲し、或は十方に七歩すと爲す。此時溫冷の二泉自ら湧出して、以て澡浴に供せり。これ龍王の下せるものなりき。諸天虚空、中より手に白蓋寶扇を執り、以て菩薩の爲に寒暑風雨塵土を障へたり。後の傳者に

從へば、時に天地の間に、復三十有二の瑞相あらはれたりとぞ。
父王相師及び諸の道術を召集して、太子を觀て、其吉凶を判ぜしむ。諸相師命を受け、前んで衣を披けば、三十二相の具備せるを見る。乃はち占て曰く、此相あるもの必ず二處に趣くや、疑なし。二處とは何ぞ。若し在家せば轉輪聖王と爲り、四天下に王として四兵具足し、正法を以て世を治めて、偏枉あるなく、恩天下に及び、七寶自ら至り、千子勇健能く外敵を伏し、兵杖を用ひずして、天下太平たるべし。若し又出家學道せば、正覺を成して、十號具足すべし。父上懇懃に再三重ねて之を相師に問ふ、汝等更に太子を觀よ。三十二相とは、何等に名くるぞ。諸相師即ち太子の衣を披きて、具さに三十二相を説きしかば、父王悅服せり。後の傳者に、少く趣を異にする占相を記すあり。要を舉れば、次の如し。雪山に隠れて入定せる老仙阿私陀なるものあり。是等三十二の瑞相を見て、遠く迦毘羅城に至る。父王之を拜せしめんが爲に、生兒を老仙の前に携へしめしに、何ぞ知らん。生兒は彼を拜せざるのみならず、却りて其足を仙人の螺髻の上に加へたり。之を見て大に驚ける父王に對し、彼仙人歡喜の眈を垂れて、此兒の將來必ず成佛すべきを豫言し、而して其日に遇ふを得ざるを悲みて泣けり。第五

日に於て、命名式あり。將來の希望を寓して、薩婆悉達多と名けたり。一切成就の義なり。此日、父王、三吠陀に熟達せる百八の婆羅門を召集して宮中に饗應しぬ。此中八人は特に占相に長ぜり。八人中の七人は、小兒の諸相を檢せる後、二指を舉げて、輪王か佛陀かの一となるべきを豫言し、残りの一人憍陳如なるもの、唯一指のみを舉げて、必ず人世の罪惡と愚癡とを去るべき佛陀たらんを斷言せり。後に五比丘の一人として、最初の弟子となれるは、實に此人なりき。五比丘中の他の四人は、他の占者四人の子なりきとぞ。この記事は、西藏傳に存する所、梵文傳記には、之なけれども、之に代ふるに、父王幼兒を神殿の前に携へ行きしに、殿神皆起ちて生兒を拜せりとの記事あり。

神聖なる物を藏せし寶塔は、更に第二の物を藏する器として用ふべきにあらず。天人の大導師たるべき菩薩を舉げかる母后も、亦他の兒を受胎すべからず。斯くて母后は、七日にして没し、忉利天に上昇し、永く天上の快樂榮華を得たりとぞ。佛成道の後、三月上天して母后の爲に說法せりとの傳説、又佛の入滅に際し、母后永別を悲みて、娑羅雙樹の間に降り、佛陀に對面し、最後の訣別を爲せりとの傳説は、皆母后上天

の思想に基づく、之を繪畫にあらはせるものあり。又摩耶山切利天上寺の三國に創建せられたるあり。此傳説や、頗る佛教文藝に關係ありといふべし。

以上は諸種の佛傳より綜合し來れる降誕の記事なり。誕生時の奇瑞は、皆是後世佛陀を尊崇するの餘に出てしものなるや疑なしと雖も、釋尊が貴姓として一般の承認する釋迦種族の中に、淨飯王を父とし、摩耶夫人を母として、西曆紀元前第六世紀の中葉頃、四月八日を以て、雪山南麓に近き藍毘尼園に誕生せることは、疑ふべき理由なし。此時の父王の年齢は不明なり。或はいふ、四十餘歳の時なりきと。

誕生時の奇瑞中、尤も奇にして、而も能く佛陀の性格と、一代の事蹟とを説明するに足るべきものは、母後の右脇より出て、七歩し、四方を顧みて、四句の偈を師子吼せりといふもの是なり。右脇といふは、刹帝利種たるを表するか、或は又右を貴ぶの風習に従へるものなるべく、七歩といふは、或は之を七覺支を表すと爲し、或は又六道を通過し終れるを表すと解せらるれども、左までの寓意もなかるべし。要するに、一代を始終せる高き性格と、大なる事蹟とを、佛陀自身の口によりて師子吼せしめたるを、此の傳説の主眼と爲す。右脇七歩は之に伴ふ一小事件にして、唯凡人に異なるを

示す意に外ならざるべし。其誕生偈として邦人の口に熟するものは、天上天下唯我獨尊の二句八言なりといへども、之が典據を求むるに、予が搜索せる限りに於ては、經説にあらず。今佛傳を代表すべきもの三種と、二句八言の典據とを出して、其異同を検すれば、次の如き結果を呈す。

佛所行讚、此生爲佛生、則爲後邊生、我唯此一生、當度於一切。

本行集經、世間之中、我爲最勝、我從今日生分已盡。

但し此經の三十三に、天人中唯我獨尊の句あれども、是素より誕生偈にあらず。過去現在因果經、我於一切天人之中最尊最勝、無量生死於今盡矣、此生利益一切。

人天。

大唐西域記、天上天下、唯我獨尊、今茲而往、生分已盡。

有部雜事二十、此即是我最後生身、天上天下、唯我獨尊。修行本起經、瑞應本起經、長阿含經、灌洗佛形像經、賢愚經、楞嚴經等には、天上天下唯我爲尊の二句を出せども、遂に獨尊の語を爲すものなし。人口に膾炙する誕生偈は、實に西域記を以て初とし、有部律の之を次げるを見るのみ。此傳説は釋尊と必須不離の關係ある程までには有名なるものなれば、一言之に論及せる所なり。

第四章 學生時期 of 釋尊

釋尊の一生は之を四期に判別するを得べし。學生時期、在家時期、出家時期、說法時期是なり。是蓋し婆羅門の渴仰せる理想的の一生を以て、釋尊を傳せる結果に外ならざるべし。學生時期に於ける釋尊の性質を知るべき史料に乏しきは甚だ遺憾なりと雖も、蓋し佛傳としては其必要もなかるべく、又通常の生活を送れる出家以前にありては、之を傳ふべき程の事件もなかりしならん。唯梵文の傳記に據るときは、七歳又は八歳の時、文武兩道の師に就きしに、未だ習はずして、六十四種の書を知り、二十九種の武技に達し、父王の選定せる兩道の師、毘奢蜜多及び羅提提婆を驚嘆せしめ、我等其任にあらずとて、師たるを辭せしめたることを傳ふ。是蓋し太子が當初より凡人にあらざりしこと、一步を進めていへば現世一代を以て見るべからざる菩薩たりしことを證明せんとの趣旨よりせるものに過ぎず。其故何ぞや。

毘奢蜜多是古來有名なる婆羅門學者の家なり。太子の學才が當時の婆羅門に超過せることを示さんが爲には、學者の代表として彼の名か、或は婆私吒の名を出すに

若くはなし。殊に六十四種の書目中には、西域地方の國名は勿論、支那の名をも出すを見る。明に是支那と交通ありて以後の作なるを示すにあらずや。此記事は南傳になくして、梵傳にのみ存することも注目すべし。梵傳の中にも、普曜經は文道の師を驚かせることのみを叙し、本行集經は一步を進めて武道の師をも驚かせることを叙す。此は彼よりも後の作なること明なり。

印度人の理想的の一生を完全に遂行せるものとして、出來得る限りの光彩を以て太子を描けることにつきて、尤も其痕跡と認むべきは、就學の年齢にあり。摩菴の法典によるに、八歳にして就學するは婆羅門姓のものにして、刹帝利姓のものは十一歳以後ならざるべからず。釋尊は刹帝利姓なり。而して婆羅門姓の年齢を以て就學せりと描かるゝは、偶々以て婆羅門の理想的の一生に適合せしめんとの主趣よりせるものなるを反證するにあらずや。さはあれ、予は釋尊の就學を否定せんとするにあらず。太子は父王中年後の愛兒なり。國狀よりいふも、家庭よりいふも、其の教育は尤も忽にすべからざる所なり。而も天性叡敏にして偉大なる將來を豫想せしむるものあり。かゝる太子に對して、種々の注意を以て教育を施されたりと見るは、尤も想像

し易き所なり。唯八歳にして就學し、且つ其師を驚かせりといふ傳説につきて疑を挿むのみ、他語を以て之をいへば、斯の如き幼時の事跡は、後世に傳はるべき程のものにあらず、是唯後世に於て釋尊を權現と爲すより起れる傳説なりといふのみ。然らば太子は如何なる教育を受けしか。通例に従ひ、五明を學習し、殊に吠陀を暗誦せるものならん。されども迦毘羅城は、婆羅門の所謂中國を去る甚だ遠く、且つ釋種は武門に屬せしかば、此地此種に生れたる太子は、婆羅門の影響を受けしこと、比較的に少きに似たり。成道後の説法が、婆羅門教に對する關係の殆んど之なきに徴すれば、必ずや婆羅門姓の子弟の如くに、吠陀を暗誦するを以て、能事了れりとせしはあらず、或は却りて數論の影響ありしやと考へらる。迦毘羅衛が、數論の開祖たる迦毘羅仙人に關係を有することは、其地名によりても明白なり。此地に誕生せる太子は、よし直接に數論を學習せざりしとするも、數論的空氣を呼吸し、暗々の裏に之が影響を蒙りしは、尤も想像し易き所なり。但し當時の數論は、後世に頗る整頓せるが如き、所謂二十五諦によりて説明する宇宙發展論にあらず、猶頗る粗雜なるものなりしが如し。古譯佛典に載せらるゝ阿羅々仙人の説を見るに、甚だ後世の二十五

諦説に異なるものあるは、此間の消息を解せしむるものありと云ふべし。いづれにせよ、適當の年齢に達せる後、文武兩道の教育を受けしことは、疑ふを得ず。後年競技の際に、嶄然頭角を現はせしは、偶々以て其武藝に長ぜしを證明して餘りあり。此時期中に於て、猶一個の注目すべきものは、十二歳或は十六歳の時にありきといふ樹下靜觀の事跡是なり。耕作の節、宴の折なりき。父王幼なき太子を携へて出遊し、喜びの餘、幼兒の上を忘れつゝありしが、幼兒は農民の劬勞の甚しきを見、又禽獸の互に相食むを見て、獨り閻浮樹下に退き、結跏趺坐して深き禪定に入り、人世問題を沈思冥想して甚だ憂感の情に堪へざりき。父王之を發見するや、嘗て仙人の占相豫言ありしとを追想して、幼兒の將來に關して憂悶の情に堪へず。これより、あらゆる人事を盡して太子の心を浮世の歡樂に止めしめんとするの念を起せりとぞ。此記事は南北兩傳に存し、尤も能く佛陀の性格を説明するものあり。此事跡ありて、能く四門出遊より踰城出家に至までの事跡を了納し得べし。但し有部律には此事を以て四門出遊後に起れりと爲す。時日の前後は以て問題とするに足らず、唯佛陀の性格をして紙表に躍如たらしめんとせし記事の精神を觀取すれば足れり。此時日光

西に傾き樹蔭皆移りしと雖、幼兒の坐せる樹蔭のみ、獨り移らずして能く之を蔽へり。時に空中を飛行せる五仙又は五百仙人あり。此所に至りて通力を失ひ、動く能はず。即ち容貌巍巍たる幼兒の跌坐せるを見て、梵天か帝釋か轉輪王か、是果して何物なるべきかとて、下り來りて各偈を以て太子を讚嘆して後去りしといふ。此事跡は獨り梵傳に傳へらるゝ所にして、阿私陀仙人を禮拜せしめし事蹟と、其趣旨を同じくするものなり。此時期中に關して傳はれる事蹟は、以上のものに過ぎず。或は十五歳の時に灌頂太子位に立てられたりと爲す書もあれども、此後七年間を歴て、納妃に至るまでの生活は、全く不明なり。

以上の材料によりて、太子の性格を想像するに、元來憂鬱の傾向あり、人生の浮華なるを見て、之を厭ふの精神は、少時より其胸中に來往せしならん。而して婆羅門が一定の地位を得たる當時にありては、理想的の一生を送ることを以て、人生無上の快事とせしや疑なきを以て、斯の如き生活を送ることは、太子が少時より心に希望せし所ならん。加ふるに當時上下一般の謳歌せる阿順王子の勇ましき行動、羅摩太子の淨き生活は、最も青年の心情を動かせし刺激たりしならん。一方に厭ふべき此人生

あり、他方に願はしき彼理想的生活あり。是實に太子を驅りて、後年出家踰城を爲さしめたる緣由なり。蓋し太子と同一の行路を取りしものは、敢て太子一人に限れるにあらず。古典中に於て王者の出家せる例を見ること少しとせず。文献にあらはれざるものは、猶一層多かりしならん。而も是等の中に於て、真正に理想的の行路を、當初の志願の如くに送り了れるものは、晨星よりも寥々たり。出家踰城は、他に類例なきにあらざりしも、一旦之を決行せし後に於て、其意志の堅固にして初心を遂行せること、成道後の感化力の偉大なりしこと、は、他に匹儔なき所なり。是釋尊の釋尊たりし所以にして、天上天下に獨尊の榮名を肆にせる所以なりといふべし。

太子が諸釋童子と大に伎を角し藝を競へる事蹟は、或は之を十歳の時と爲す説もあれども、多くは納妃に關係あるものとして描かる。之を婚前とし、之を婚後とするの差はあれども、いづれにせよ、武門に屬するものは、一家の長として、十分に其家族を保護する實力なかるべからず。太子は其實力を備ふると、遠く他の青年に過ぎたりとの趣旨を表はさんとするは、此事蹟の精神なり。之を古文學に徴するに、阿順王子にも、羅摩太子にも、一切を凌駕する武藝を現はし、以て絶世の美妃を得たる事蹟

あり、而して是等兩王子は、實に印度の武士の理想とせる所なりき、今太子の此事蹟を見るに、其面影あまりに古英雄に彷彿たるものあり、蓋し當時の文化は、競伎によりて女子を争ふが如き程度に止りしにはあらず、遂にその以上に進みたるに似たり、予は此事蹟を以て、古英雄に則りし文學的着色と思惟し、殊に之に附隨して、提婆の暴戾と太子の仁愛とを對立し、失敗せる提婆が、此時以後太子に對する終生の憤怨を抱けりといふが如きは、甚しき着色と思惟するなり。

太子の妃は或は一人とせられ、或は二人とせられ、或は三人とせらる。當時の社會状態より之を見るに、必ずしも一人に限れるにはあらざるべし、さはれ、一人なりしか、將た三人なりしかは、今日これを知るを得ず、其三人と爲すものは、強て三時殿に配當せんが爲の趣旨よりせるが如き形跡顯然たり、よし三人ありしとするも、佛傳中尤も深き關係を有し、必要欠くべからざるは、耶輸陀羅女一人のみ。

耶輸陀羅女は、或は善覺長者の女にして、提婆達多の兄弟とせらる、説もあり、或は釋種大臣執杖の女とせらる、説もあり、或は又婆私吒族の釋種大臣大名の女とせらる、説もあり、一々異説を并列せば、是日も足らざらんとす、いづれに従ふべきか

を知らざれども、いづれにせよ釋種の出なりしは疑なし。

納妃の年齢に關しても、或は十七とするあり、或は十九とするあり、十七とするものは、修行本起、瑞應本起、六度集等の諸經にして、十九とするものは、因果、本行集等の諸經なり、其數よりいへば、十七とするものに従ふを可とすべしに似たれども、こは十九出家を立てんが爲の趣旨よりせるものにして、而して十九出家を立てるは、羅睺羅を以て出家後の誕生とせんが爲なるに似たり、されども羅睺羅の誕生は、必ずや出家以前なるべく、從て、十九納妃の説尤も其當を得たるに似たり、本行集經に十九にして納妃し、其後十年宮中にありと爲すもの、尤も妥當なるべし、斯くて太子は納妃せり、これより後を在家時期の太子と爲す。

第五章 在家時期中の釋尊

理想的の一生よりせば、學生時期にありては、森居の仙人に服事しつゝ、學び、學び終りて後家に歸りて結婚し、初て家長の時期に入るなり、佛典中の居士なる語は、此家長をさすものにして、現時幾多の意義を有する居士の語は、其初め在家の意に過ぎず。

人民の大部は、これなり。太子の生活は正しくは之に配當するを得ず。學生時期も、家長時期も、共に宮中にありしのみならず、納妃以後といへども、家長となるにあらざりき。されども佛傳作者が、佛陀の一生を四時期に分ちて描寫せんとの意よりせることは、争ふべからざる事實にして、之が爲に太子の一生は、判然この四期に分割することを得、これ予が此區分によりて太子を叙述する所以なり。

佛傳作者は、此時期と次の時期との對比に著しき相違あらしめ、以て太子出家の面目を發揮し、一步を進めて、佛陀出世の意義を發揮せんとの趣旨より、力を極めて此時期中に於ける宮中の歡樂を描寫せり。或は三時殿といひ、或は二萬の姪女といひ、或は婆羅門の子優陀夷を太子に附して其遊樂の友と爲せりといふが如きはなり。皆是父王百官が出家厭離の志を止めんが爲よりせる心盡しのものにして、斯くて太子が殿裏の生活は、美を盡し善を盡くせるものなりき。此生活ありて始めて能く「若し在家せば輪王たるべし」との預言に應ずるを得べきなり。

此間太子は一面には尋常の人間として浮世の歡樂に日を送れるや疑なしと雖も、歡樂の中にも哀情あるは人世の常態なり、必ずや他面に於て浮世の果敢なきを觀察し、其本末始終につきて、沈痛なる悲愁を催し、いつかは幼時より心中に描ける理想的生活に入らんと希望を有せるならん。此悲愁より此希望を生じ、此希望より遂に出家を決行せる徑路を示さんとて、有名なる四門出遊の構想は生ぜるなり。此構想は極めて古傳なりしと覺しく、南北兩傳中に現存す。四門出遊とは何ぞや。父王太子に自然の美妙、人生の快樂を見聞せしめ、以て其憂鬱の情を轉じ、出家の素志を捨てしめんとて、豫じめ勸して城の内外を修治し、苟くも懸念せしむべき程のものは、悉く途上にあらしめざるべきを命じて後、勸めて出遊せしむ。太子寶車に駕して東門を出て、杖に拄りて羸歩する老人を見、御者に問うて、斯の如きは凡ての人に免れがたき運命なるを知り、樂まずして歸城し、其後南門を出て、門に倚りて喘息せる病人を見、是亦人に免るべからざる運命なるを知り、更に愁憂を増して歸城し、其後更に西門を出て、葬式の行列に遭ひ、是亦一般に普通の運命なるを知りて、更に又愁憂を増して歸城す。歸城の途次（或は他日更に北門を出て、出遊せる時）に於て、衣服の尋常にあらざる異人を見、御者に問うて、苦樂の外に超然たる沙門なるを知り、沙門の如何なるものなるかを諮問思索して、此道の真正なるを思ひ、遂に出家の素志を

決せりといふものは是なり。長阿含經に曰く、太子老病人を見て世の苦惱を知り、死者を見て世情滅し、沙門を見るに及び廓然大悟し、寶車を下りて出家の途に上れる時、歩々の中間轉た縛著に遠かれり。是眞の出家、是眞の遠離なりと、此經は此時直に出家せりと爲すなり。是實に微妙なる構想にして、無韻の詩、無色の畫によりて、太子の心中を道破せるものといふべく、他に類例少き思想富贍なる文學といふべし。若し之を見て、深宮に生長せる太子は、而立の年に近きまで、老病死を知らざるまでに人世を解せざりき。一たび老病死に接するや、忽ちにして痛ましき刺激を受けたるは、之が爲なりといふものあらば、甚しき愚評といふべし。後の佛傳作者は、是等の老病死者及び沙門を以て、皆淨居天子の化現にして、太子が十年宮中にあり、五欲の樂に耽著して、出家の素志を忘るゝを警策せるものと爲す。是百尺竿頭に一步を進めたる構想にして、印度特有のものならずんばあらず。

太子深き憂愁を抱き、唯沙門の身を三嘆しつゝ、歸城せり。時に宮内に釋種の一婦人あり、太子を見て戀著の心を生じ、歌うて曰く、かゝる子を得たる父母の身は樂しきかな、かゝる郎君にかしつかん婦女の身は樂しきかな。太子この樂しの語を以て涅

槃の義に解し、我を策勵して向上の一路に進ましむるものと思ひ、甚だ感奮する所あり、之に報いんが爲に、寶環を脱して彼女に與へたりとぞ。太子に戀著せる一婦人の歌が、却りてその出家の意を堅からしめしとは、南北兩傳に見ゆ。北傳は五分律、本行集經及び有部律是なり。兩傳に共存するより見れば、其古傳なるは明なり。時に城中の歡聲湧くが如く、上下舉りて太子の歸城を歡迎せり。是れ羅睺羅の誕生ありしが爲にして、城民はよりにて太子の出家を止め得べしと思へるなり。太子心中に謂ふ、是新一の繫縛を加へたるのみ。太子の當時の心中よりせば、是實に無上の繫縛を加へたるなり。されども子なくして出家の素志を遂げんか、其行爲は宗教的法則より是認せらるべきにあらず。羅睺羅の誕生ありてこそ、太子の出家は初めて如法なるを得べきなれ。後の佛傳作者、羅睺羅の誕生を出家後ならしめんとし、其懷胎を出家の日、その誕生を成道の日と爲し、爲に或は六年懷胎の説を生じ、又太子の出家を十九歳と爲し、爲に或は十二年苦行の説を生じ、強て不自然の道に出でたるは、這裡の消息を閑却せるものなり。何が故に羅睺羅の誕生を以て、出家後ならしめんとせるか。他にあらず。釋尊を以て權現と爲んには、凡情にかなへる納妃生子が、あま

りにその神聖を讀すと思へるが爲のみされども此繫縛をすて、此桎梏を去りて、勇往邁進其初一念を貫徹して、其後遂に退轉なかりしは、是實に佛傳中尤も學び難き所に於て、隨て尤も尊むべき所にあらずや。

梵文佛傳に據れば、此夜父王は七種の夢を、耶輸陀羅女は二十種の畏るべき夢を、太子は五種の夢を感得せりといふ。父王此等の夢を得るや、大に恐惶して、占夢者を召し以て之を解かしめんとしぬ。淨居天復化して婆羅門となり、之を占ひ、以て太子が出家學道の後、阿耨多羅三藐三菩提を得、十力四無畏の域に入り、法輪を轉じて諸天八部に法寶を雨らし、外道六師をして大に憂惱せしむべき微なれば、これ欣び慶すべきものにして、愁惱すべきにあらざる旨を以て答ふ。されども父王は太子の出家學道を恐れ、更に五欲の具を増し、よりて以て其志を防壓せんと企てたりとぞ。時に耶輸陀羅、忽然として夢覺め驚怖自失し、太子に向つて吉徵たるべきか、凶徵たるべきかを問ふ。太子自ら出家の時到れるを知りしも、妃を慰め諭すに、夢想の顛倒にして實法なきを以てし、よりて以て、憂愁を懷かず安眠するを得せしめたり。太子の五夢とは、一に身は大地を席し、頭は須彌を枕し、手に大海を擎げ、足渤海を踐むを見、二

に躋より建立草出て、其抄上りて阿迦膩吒天に至るを見、三に毛羽の斑駁なる四鳥四方より來りて太子の足下に於て化して白色となるを見、四に四白獸の黒頭なるもの來りて膝を屈して太子の身を舐むるを見、五に一糞山の狀勢高大なるあり、太子其上を周而遊踐するも、其汚す所とならざるを見たるをいふ。父王の夢も、耶輸陀羅の夢も、概ね之に類せるものあり、以て其一般を知るべし。經文には太子の五夢を解釋せざるを以て、其意味を判じ難しと雖も、後來の成道の尋常にあらず、世上の感化の比類なきを、具體的に説明せる表徵に外ならざるべし。斯の如き譬喩的言語によりてあらはすは、印度的筆法として、敢て珍とすべきにあらざるなり。梵文傳記は猶進んでいふ、此夜太子心中に謂ふ、若し父王に啓せずして私に出家せば、二種の過あり。一には法教に違ひ、二には俗理に順ぜずと。乃ち父王の宮に詣りて其志を白す。父王之を聞きて涕泣していふ、大位も國財も皆悉く捨てん、出家の事をだに除去するを得ば、世に惜むべきものなしと。太子言ふ、竊に四種の願あり、若しこれを賜はらば出家の望を斷つべし。一には衰老せず、二には恒に少壯に、三には常に無病に、四には恒に死せざると是なり。若し是等の四願にして得られずんば、唯一願にて足れり。

後身を受けざることは是なり。父王之を聞きて愛著の心稍薄らぎ、一切衆生の爲めに出家すべきを許せり。されども猶心に熱惱を懷き、明旦に至り、親族及び諸釋を召して、如何なる方便を以ても其出家を止めしめんとし、東西南北の四門に各々五百の釋種童子を置き、城外の四衢にも亦五百の壯士を置き、以て城の四面を晝夜巡警して暫くも休息なく、姨母摩訶波闍提夫人も亦宮中の諸姝女を集めて、命ずるに、其夜睡眠せずして警戒する所あらしめたりとぞ。

此傳説は、傳記中に於て自ら説明せるが如く、竊に出家することは、一は法教に違ひ、他は俗理に順はざるの虞あるが爲に、此二種の過失なからしめんとて起れるものなるや疑なし。斯くて城の内外の警戒世の尋常にあらざるを來せり。是に於てか、是等内外の警戒を釋き、太子をして無事に出家せしめんが爲には、何等か神秘的の扶助を假り來らざるを得ず。佛傳作者はこゝに四天王及び帝釋を假り來り、其力によりて外の軍士内の姝女を昏睡せしめたり。淨居天衆及び其他の諸天子の神通力によりて諸姝女の形骸姿容を悉く變壞して、美を極めたる宮殿を塚間の如くならしめたり。太子其夜竊に寢室を出て、宮内を見るに、花の如き姝女の熟睡せる狀況、恰

も死屍の如く其醜穢見るに堪へず、爲に厭離怖畏の志を深くし、遂に出家踰城を決定するに至れり。出家の決行は、或は羅睺羅誕生の即夜なりとせられ、或は踰城せんとするに臨み、熟睡せる妃と王子とを顧みつゝ、哀別の涙を濺がれたりとせられ、或は又此夜僅に羅睺羅懷胎の徵ありきとせらる。要するに、詳細の事實に至つては悉く不明なり。又太子が四門出遊を爲せし年齢も甚だ不明なり。或は之を十四歳となし、或は十九歳と爲し、又は二十九歳と爲す。蓋し二十九歳と爲すを以て正當と爲すべし。もと是憂鬱の性癖ありし太子が、幼時より其胸中に構成せる人生觀を寫せる文字なるべきを以て、此事の起れる年齢を尋ぬるが如きは無意味なれども、蓋し佛傳作者は、出家の因縁を分解剖して是等の事跡を列擧せるものなれば、其趣旨より推すに、出家の年に起れるものと爲すや勿論なり。

嗚呼四門の出遊よ、一婦人の唱歌よ、又は王子の出誕よ、姝女の醜態よ、佛傳作者は層一層に太子出家の因縁を分解叙述して、あらん限りの筆力を盡し、以て此の一大事件の意義を發揮して、甚はだ光彩あらしめたり。志あるものに取りては、げにや事々物々悉く津々たる教訓を含まざるはなし。古往今來目睹耳聞に慣れて、蚊の聲程に

も吾人を驚かさざる生老病死の事實は、釋尊を驅りて出離の道に向はしめたり。花の如き宮女も臭穢を盛る革囊と見えたり。尋常の意義を有する快樂の語も向上の妙味を以て響けり。事々物々出家を促がすの機會を與へざるはなく、見聞覺知厭離を急がしむるの事情たらざるはなかりき。此時の太子に取りては、飛花落葉悉くは無常の道理を説破するものに非ざるはなく、水聲山容悉く皆廣長舌を以て解脱涅槃の妙を歌ふにあらざるはなかりけん。後日の說法中に、四種の良馬の喩を以て、又は三天使の喩を以て、衆を戒めたるものあり。是必ずや自己の沈痛なる經驗に顧み、他のあまりに無神經なるを哀み、之に一割を與へたるものなるべし。四種の良馬の喩とは、世の老病死を聞きて驚くもの、近隣の老病死を見て驚くもの、同胞の老病死に接して驚くもの、自己の老病死に遇ひて初て驚き、正法に入る四種の善男子を喩ふるに、鞭影を見て馳するもの、鞭の少しく、毛尾に觸るゝに到りて馳するもの、其皮肉に觸るゝに到りて馳するもの、鐵錐の膚を徹するに到りて始めて馳する四種の馬を以てせるをいふ。三天使とは、衰老と病苦と死亡とを以て、人間の放逸懈怠を教示呵責して、身口意の惡業を離れしむべき天使に喩へたるをいふ。金殿玉樓の中、紅

燈綠酒の間に人となれる身にてありながら、世上一般の生老病死に驚きを立て、彼の精進を起し、此の忍辱を行ぜる釋尊よりせば、人生の無常に驚かず、朋友知己の生死に驚かず、骨肉同胞の死別に驚かず、自己の逆境病苦に遭遇して初て驚き、辛くも向上の意、内に動くに至るものゝ如きは、鈍中の鈍、驚中の驚と見えしならん。さはれ是亦驚く中にあり、遲しと雖も遂に向上の道に入れるものなり、一般の上より見れば猶利根たるを失はじ、良馬に喩へらるゝ所以ここにあり。見よ、世上の一般はかくても猶醉生夢死するものゝみにあらざるか、逆境病苦はいはずもあれ、遂に死して地に就くまで、徒らに世を憤り人を怨むもの、比々皆然らざるなきにあらざるや、佛陀が憐愍の情に堪へず、四十五年の化導を施し、最後の呼吸に至るまで、諄々として説法せる所以ここにあり。

第六章 出家時期中の釋尊

第一節 六年苦行

中夜城門を出てたる太子は、路を東南に取りて、王舍城附近の仙人住處に向へり。當

時婆羅門の善徳あるものは、森林中に退きて、冥想に耽り、觀念を凝し、時に其周圍に徒弟を集めて、之を教導するもありき。是森居時期中にあるものなるべく、其學徳の他に超えたるを仙人といひ、當時の上下皆之を尊崇し、供養を怠らざりき。蓋し之を供養する俗士は、將來幸福の身を受くべしと信ぜられたるなり。而して是等の仙人中には、苦行を以て、解脱の最良方法とするあり。事火を以て上天の唯一手段とするあり。冥想凝慮、以て煩惱妄念の滅却を目的とするあり。離欲抑情、以て大我の超脱を究竟とするあり。決して一樣にあらず。又同一途に出でしむべき證權もなかりき。婆羅門書の究竟目的とせる儀式萬能の時代既に去りて、宗教的自覺の時期に入り、是等の形式を離れ、別に自己の實驗に訴へて、人世の解決を得んとする風潮大に起り、婆羅門姓の者が傳承的空氣の中に、空生徒死せる時に當りて、刹帝利姓のもの、先づ起ちて、實驗的、自由的、向上の方途に對して、一轉機を與へたり。後世哲學の名を以て呼ばるゝウパニシャッドの深遠なる思想は、實に斯の如くにして起れるなり。眞正の意味に於ける哲學中、世界最古のものたる數論の考察も、亦斯の如くにして起れるなり。さあれ、是等の思想を喚起し、是等の考察を振興せる仙人は、決して哲學を創始

せんとて云爲せるにあらず。唯如何にせば、解脱を得べきか、涅槃に入るべきかの問題に向つて一身を擧げて之れに投ぜるのみ、一身を擧げて解脱の道を進み、涅槃の域に向へる彼等仙人の冥想凝慮の跡が、所謂哲學の名を以て呼ばれ、是等の哲學を或はウパニシャッドと呼び、或は數論といふに過ぎず。當時新興國の摩伽陀は、新進の勢甚だ盛にして、首都王舍城は漸く印度文明の中心たらんとするものやありけん。是等仙人の名あるものは、多く王舍城附近の森林中に修行せり。王舍城の周圍には頗る修行に適する山、五個の多きを數へたり。爲に王舍城或は五山城とも呼ばれたり。

太子白馬韃陟に跨り、御者車匿を督して、一向に道を急ぎ、天明の頃一深林に達し、こゝに於て鬚髮を剃除し、服飾を去り、之を持って歸城以て報告すべきを車匿に命ぜり。車匿強ひて従はんを請へども、太子は固く之を拒みて、その請を容れざりき。一生を恩顧の厚きに托して、主君の馬前に死せんを心に期せる車匿に取りては、思はざる時、思はざる境に於て、思ひもよらぬ君の姿を見、思ひもかけぬ生別の苦に接せんこと、其悲痛如何にかありけん。かねて斯くあるべしとは、心に期せし所なれども、今

ぞ最後の別離に臨んで、車匿の悲泣を目撃し、最愛の妃と、最愛の一子とを、眼前に彷彿せる太子の心中も、亦如何にかありけん。成道の後に至りて、人生の最大問題たる四苦の次に、哀別離苦を加へたるは、實に此實驗より得來れるものにあらざるなきを得んや。既に哀別離苦を擧げ來らば、之と反對の怨憎會苦は、直に推釋し來るを得べし。佛教界古今獨歩の文豪たる馬鳴菩薩は、其著佛所行讚に於て、この悲痛の光景を叙し、激越の情緒を寫さんが爲に、白馬を中心として、太子の心情と車匿の悲歎とを描き、延て以て父王の哀痛と、后妃の慟哭とを叙し、當時の光景を親たり見るの思あらしめたり。

太子一沙門の身となり、偏に仙人住處に向て去れり。太子の出家は前章に於て既に之を述べたる如く、宗教的法則よりは認せらるべき行爲なりと雖も、人情には古今東西の別なし。王宮の上下内外、誰か此英傑を出家せしめて袖手するを得べき。又父王と愛妃とは、何ぞ其掌珠所天を容易に捨つべきものならん。百方其志を阻止せんとせるは素より其所なり。時に父王よりの使者至りて、百方太子に勸告し、説諫し、哀願し、以て歸城せしめんとせしも、力及ばず、爲に五人を止めて太子と共に修行の傍

ら給事警護の任に當らしめたり。後に五比丘といふものは是なり。或はいふ、五人の中三人は迦毘羅衛城の出、二人は拘利城の出なりきと。有部律の説、太子五比丘に圍繞せられて、王舍城に至りぬ。王城の民環視して、是即ち釋迦の牟尼なりといひ、讚歎送迎して甚だ動搖を極めたり。國王頻婆娑羅出て、之を見て、甚しく其出家を惜み、再び俗生に還らしめんとて、問答往復せりといふ。此時の問答なりとて傳へらるゝ所のものは、是實に在家と出家との心事の對照なり。家に在るものゝ究竟とする所の思想と、家を出てたるものゝ究竟とする所の思想との對照なり。王曰く、財と色と力とを極めて後に出家するも遅しと爲さず、能く是等を盡くすを以て始めて大人と爲すべし。太子曰く、一たび鉤を離れたる魚は、再び之を食むべくもあらず。既に欲の糞壤を出てたるもの、何ぞ還た其中に没入すべけんや。當時兩者の間の問答は、果して如何なりしか。今日之を知るに由なしと雖も、對話の終局は必ずや之に過ぎざりしならん。王が太子に歸依し、其成道の後、殊に供養の厚かりしは、實に此時に信服以て將來の濟度を希求せる因縁に基づく。萍沙王五願經なるものあり、五願とは王の心事を開きあらはせるものなるべし。摩伽陀は大國なり、頻王は大王なりと雖も、日

本的の意味を以て之を見るべからず、當時の國王は往々にして市民に伍し、極めて自由に、極めて平民的にして、殊に沙門婆羅門に對して、歸依し供養すること、市民の後に落ちざらんと力めたりしが如し、之を證明すべき佛典の記録頗る多し、王が太子に對して初に勸告し後に信服せりといふもの、今日之を疑ふの理由なきなり、斯の如く太子の出家が、當時の印度に重要視せられ、人心を動搖せしは、何の理由に基くか、之に對しては、釋種の貴姓として比隣の王國に重きを爲せしと、太子の英資が國內國外をして多大の希望を屬せしめたりしと、二個の理由を案出するの外他の途に出る能はず、此理由を基礎として考察するに、斯る太子の思ひもよらぬ出家が、如何に比隣の耳目を聳動せしめけん、是實に市民の喧囂と、大王の會見問答あり、猶又心服信從以て後日の濟度を預願せし故ならん。

悉達太子が成道以前に於て、心中の苦悶を去らんが爲に、煩惱の繫縛を脱せんが爲に、或は問答し、或は就學せる仙人に、三種あり、(一)苦行に従へるものと、(二)事火を事とせるものと、(三)冥想を凝らせるものと、是なり、過去現在因果經、本行集經には、(一)を説き、瑞應本起經には、(二)のみを説き、修行本起經と佛所行讚とには、(三)のみを説く、太

子が出家修道時期中に於て歴訪し、就て要路を問へるもの、果して幾人なりしかを知るを得ずと雖も、是等三種の仙人を舉れば、以て他の一切を網羅せしめ得べきなり、蓋し當時の仙人なるものは、苦行に従ふにあらずんば、事火に従ふか、然らずんば、坐禪觀念を以てする外に出でず、苦行は度の多少こそあれ、印度の修行者の通則として頗る勵行せる所、其甚しきに至りては、佛傳に記載するものよりも、猶一層の甚しきあり、事火は婆羅門の最大切要の本務にして、火は即ち彼等の神とする所、否、神は光明によりて發現すと考へらるゝ所にして、火は實に光明中の尤も人間に近くして親しむべきもの、事火を舉れば、正統婆羅門の法は、悉く此中にこもるといふも不可なし、坐禪觀念も亦是印度教學の一大特色なり、當時の冥想者流の中、尤も深遠なる思想を抱くものは、實に數論的哲學者を以て劈頭と爲す、學者或は六派哲學を以て、悉く佛陀以前に存在せしと爲せども、之を熟考するに、佛陀以前に存せるものは、六派の中僅に因明と數論との二派のみなりしに似たり、其中に於て因明派は、後來こそ一派を形成するに至りたれ、當時にありては、唯是思想推移の正否を判断すべき方途を教へたる一個の術に過ぎざるなり、又優波尼沙土の思想ありしと雖も、

當時猶未だ組織たてるものにあらず、後世發達して、吠檀多の一派を成ずに至りて、初めて思想界に重きを爲せるなり。然らば當時の思想界の代表者は獨り數論ありしのみ。太子が出家時期に於て、歴訪し、就學せるもの、彼等のみに限れるや否やを知るべからずとするも、是等三種を舉れば、以て當時の教界を盡すを得べし。太子は彼等によりて果して解脱の道を得しか、太子先づ苦行を以て究竟とせる婆伽仙人に至りて、彼等終局の目的が、生天に在るを知り、而もその天界の生や、未だ生死の境を脱せざるものたるに思ひ至りて、之に絶望せり。是實に佛、教對苦行外道の消息を傳ふるものにして、中道と苦行との相對なり。成佛と生天との相對なり。太子は又當時善徳として名聲赫々たる苦行林の事、火外道に至り、その事ふる所の日月火水が、變易無常のものたるを思ひ、且つ火に事ふるもの、心中却りて欲の火に焼かれつゝあるを見て、之に絶望せり。是實に佛、教對事火外道の消息を道破するものにして、儀禮と攝心との相對なり。次に太子は當時の教學界に、深遠なる思想家として比肩すべきものなき阿藍伽藍及び髻頭羅二仙人に至りて、其究竟とする所が無所有處、或は非想非々想處たるを知り、こゝに粗ぼ解脱の光明を見得べかりしも、猶

未だ其境に我あるべきか、我なかるべきかに疑あり、之を追究して、満足なる答を得ず、遂にこれを去れり。是實に數論對佛、教なり。我と無我との相對なり。

以上の所傳は、佛、教の主義より、當時の一切の教學を破斥せんとする趣旨よりせるものなるかの觀なきにあらず、何となれば、佛、教が苦行を斥し、儀、式を排し、當時の教學に普通なる我を破して、中道、非儀、式、無我を標榜せるものを、宛も事實の上にて説明せるものなればなり。されば、太子が名ある仙人を歴問して、之に満足せざりしは、事實とせざるべからず。其歴問せるの誰々たりしかは、不明了とするも、一切のものに絶望せるは、争ふべからざる所なり。然らば、當時の教學を代表せんが爲に、是等の三種を以てするは、至當の事とせざるべからず。

斯くて太子は、當時の教界に絶望せり、而も心中無限の苦悶あり、解かんと欲して、解く能はざる問題あり、何等かの方法によりて、之を解決せざるべからず、之を解決せざれば、唯死あるのみ、遂に活くるの理なし。太子既に外に求めて、之を求め得ざりき、他に求むべきの道は、唯一あるのみ、何ぞや、内に之を求むるにあり、自己の本性に求むるにあり、本來具有の大用を顯現するにあり、こゝに、太子が覺者の域に入らんと

するの門は、初めて開けたり、門は既に開けたれども、之に進むは容易の事にあらず、進むとも、堂奥に達せんは、難中の至難なり、此後の太子は實に不容易の方向に進み、萬死を顧みざる途を取れり、否、自己の生命を顧みるの邊なく、死を慮るの餘裕なかりき、太子は此間に於て六年の長日月を擧げて、一身をこれに没入せりといふ、六年苦行の常套語は、こゝに起れるなり、六年の年月豈短少ならんや、太子は、此多大の犠牲を敢て辭せざりしなり。

尼連禪河の邊、象頭山中に於ける六年間の苦修練行は、世の尋常のものにあらずりき、傳ふる所によれば、日に一麻一米によりて僅に命脈を維ぎ、憔悴骨立するに至れりといふ、世に出山の釋迦像なるものあり、憔悴骨立の中に、安庠平慰の笑を含む、これ美術家が、憧憬渴仰の構想を馳せて、苦行成道の釋尊の相好に擬せるなり、彼五比丘も亦其修行を共にしつ、及びがたき太子の苦行を嗟嘆し、相共に其成道の期して待つべきを思ひ、奉事保監の功の空しからざるを祝し、心竊かに父王大臣の負托の責に背かざるを喜べり。

然れども、太子にありてや如何、未だ求むる所の光明に接せず、期せし所の希望を滿

たさず、拂はんとする無限の苦悶は、いつか之を拂ふの期なく、願うて止まざる解脱は、遂に之を得べきの望なし、既に父母に背き、妻子を捨て、臣従の哀願を棄て、知己の勸告を斥ぞけ、一向に求むる究竟の道果は、既に他に求めて之を得ず、内に求めて亦之を得ず、天に訴へんか、地に哭せんか、太子の衷情、この時遂に之を知るものなかりき、成道後の説法に於て、四苦の次に哀別離の苦、怨憎會の苦を加へ、その次に求めて得ざるの苦を加へたるは、必ずや此實驗よりせる血涙の文字なるべし、單に四苦八苦といふ、其意漠たり、生老病死苦云云といふ、猶適切ならざる感あり、されども、一々に分析し來れば、其一々の中に、此の如き意義を含み、皆是苦辛慘憺の實驗よりせる絶叫なるを知るべきなり、八苦の最後を五陰盛苦といふ、五陰盛苦の語頗る解するに難しと雖とも、唯是軀欲といはば事足るべし、既に肉軀あらば、之に伴ふの欲求あること、免れがたき自然の要求なり、眼にも之あるべし、耳にも之あるべし、鼻舌身悉く之に應ずる欲求なくんばあるべからず、而も是等の欲求に従ふは、解脱涅槃に向ふの途にあらず、解脱涅槃に従はんとせば、其要求に従はざるの途に出ずるを要す、こゝに何ぞ苦悶なからんや、斯くてこそ四苦八苦の教は生じたるなれ。

四苦八苦に煩惱する域を去りて、之なきの境に入る。豈容易の業ならんや。普通の躰欲に従ひ、尋常の生活を追ふものも、曷んど其目的を達し得べき所ならん。太子の出家時期中に於ける経過は、能く其方途を示せるものにして、修道者の模範這裡に伏在すべし。あはれ此方途を以て徒らに禁欲主義といふ勿れ。又徒らに隱遁主義といふ勿れ。豈獨り釋尊のみならん。ナザレのイエスも然りしにあらざや。メツカのマホメットも亦然りしにあらざや。大に得んとするものは、豫じめ先づ欲を制すること。も大に深く達せんとするものは、先づ世を退くことも深きにあらずや。徒らに其前半のみを見て其後半に目を蔽ふは、是擔板漢の亞流ならんのみ。薄志弱行の徒ならんのみ。

第二節 菩提樹下の成道

太子既に六年の長きに亘る嚴酷なる苦修練行を敢てし、一縷の命脈を辛くも維ざ留むるまでに至りしも、猶未だ解脱の域に達するを得ず、また達するの望なかりしが、此時嘗て閻浮樹下に於てせる靜觀凝慮の可なるべきに想ひ到りぬ。されども、久

しく食を廢せるを以て、躰弱くして之に堪へざりしかば、是に於てか諸味を飲食して躰力を回復せんと思惟せり。此時に於ける五比丘の驚きや、如何ばかりなりけん。長き間の積功を、一蕒にして欠くべきを以て、苦諫せるならん。効果眼前に現れつべき程の累徳を、一朝にして放擲するの不可なるを以て、力争せしならん。さはれ、一旦かくと決しては、如何なる強壓をも反撥せずんば已まざるは、實に太子の性格なり。乃はち諸味を採りて禁制する所なかりき。蓋し身樂しみ心飽くに至れば、心緒を散ぜしむるものあれども、身苦しみ心弱きに至るも、亦心緒を亂れしむるものなくんばあらず。共に靜觀に堪へず、凝慮に益なきなり。是を以て初に快樂を捨てし太子は、今また苦行を捨て、始めて不苦不樂の中道を以て、向上の一路と斷じ、之に向て專心一意たるに至れるなり。後年、精進の勇猛なるを以て弟子中第一の稱ありし二十億耳に對する彈琴の說法は、實に此實驗より現はれ出てし活説妙法ならずんばあらず。曰く、精進甚だ急なれば心調を亂れしめ、精進甚だ緩なれば以て懈怠ならしむ。まさに平等に修習すべし。之を執ること調適ならば、道得べきなり。後來、佛教々理の中心骨目たるに至れる中道實相の妙理、不苦不樂の涅槃の大樂等は、實に此間より胚

胎せるものならん。

五比丘太子の苦行を捨てたるを見て、以て墮落せりと爲し、一は共に道を行ずるに足らずと思へるが爲め、一は父王大臣の負托の任に耐へざりしを耻づるが爲に、遂に之を捨て、遠く婆羅捺城鹿野苑に到りて苦修練行を繼續せり。後に殘されたる太子は、獨り尼連禪河に浴して積年の身垢を去り、岸に上らんとせしが、憔悴せる殘軀は、身を運んで岸に上らしむる力をも餘さず、僅に樹枝に攀縁して上るを得たり。偶々村女の乳粥を捧ぐるものあり、之を受けて體力を回復し、去りて菩提樹下の金剛寶座に上り、結跏趺坐して大寂定に入らんとせしが、心海動搖して平靜なるを得ず、識浪昇沈して中正なるを得ざりき。佛傳作者が、魔軍の襲撃を構想し來り、力を極めて惡戰苦闘の跡を示さんとせるは、實に此樹下石上の靜觀凝慮の心狀に就てなりき。此詩的描寫は、古き聖典中の、比較的新たなる部分に初めて見えたるものなれども、其價值に至りては、頗る大なるものあり。此時の太子の心中に、斯の如き戰闘ありしことに關しては、一人の疑を挿むものなく、寧ろ其構想の偉妙なるを嘆嘆すべし。されども此戰闘を以て、強ちに之を樹下石上の時のみに限るを要せず、出家以來の

六年間は、常に幾多の内外魔との戰闘を繼續せるものにして、樹下石上に於ける、最後の奮闘によりて降魔の功を終りしなり。佛傳作者は、出家以來の惡魔を集め來りて、之を降魔の條下に並説し、こゝに惡戰苦闘を縮寫せしものならんのみ。

斯くて太子は、初は定意堅固ならざりしも、漸くに修習成熟して遂に一切の煩惱を斷除し、無明盡きて明生じ、闇盡きて光來り、三明六通を得て、實の如く四諦の理を知り、解脱を得、菩提を證せり。此樹下石上の靜觀は七日間なりき。此間專心凝慮に耽りて、全く飲食せざりしが、定より起つに及び、偶々二商主の妙蜜を供養するに遇ひ、之を得て、後に風疾あり、乃ち呵黎勒果を食して癒ゆるを得、成道後、三七日又は七々日の間、解脱三昧に遊んで、自ら娛樂せり。

此三昧中に於て、其心鏡に影現せる所は何ぞ、即ち十二因緣又は十二緣生、或は十二緣起と呼ぶるもの、是なり。此教理や、極めて簡單なりと雖も、實に佛教々理の大本を爲し、一切の川流は、皆この源泉より派出せるものなり。十二因緣とは何ぞ、無明、行、識、名色、乃至、生、老死、是なり。即ち生死の原因に遡りて、遂に之を無明に結歸せるものなり。既に生死の緣りて起る因果を極めたり。生死を脱却すべき因果も、亦此中に

伏在せずんばあるべからず。是に至りてや、王宮を出て、六年苦修せし宿昔の志願初めて酬ゆるを得たりと謂ふべし。

佛教の根本義を概括せるものに三種あり、十二因縁、四諦、八聖道是なり。苦集滅道の四諦の教理も、正見、正思惟等の八聖道の福音も、勿論當初より之ありしや疑なしと雖も、是の如き概括的名目の成りしは、十二因縁より後なるが如し。若しそれは等三者の關係をいへば、次の如し。

集↓十二因縁↓苦

道↓八 聖道↓滅

苦(生死)の人世に存在する所以は、十二因縁の徑路を取りし集の結果にして、滅(涅槃)の現はるゝ所以は、中道を歩みし結果なり。中道とは八聖道に外ならず。太子出家の起因は、如何にして、生死の苦を脱却すべきかにありき。之が解決たるものは實に十二因縁の哲理なり。太子は之を順逆兩様に觀じたりき。順觀とは、無明あるが故に行あり、行あるが故に識あり、乃至生あるが故に老死ありと觀じ來るをいひ、逆觀とは、老死の存するは生あるによる、生あるは有あるによる、乃至無明の存するによると

觀じ去るをいふ。斯くて生死の存在する原因を究めたり。從て生死を脱却するの法も、順序も、徑路も、皆此中に抱合せらるゝなり。乃はち生死なからしめんが爲には有なきを要す。有なからしめんが爲には取なきを要す。乃至無明なきを要す。されば生死を脱却するの途は他なし。結局無明を斷除するにあるのみ。無明とは何ぞ。この人世を實の如くに知らずして、或は我より生じ來れりと爲し、或は自性より出て來れりと爲し、或は又今生の如何によらずして死後の必ず空に歸するを信じ、或は永久の存續を信するが如き、要するに十二因縁の理を知らざるをいふ。今や此理を悟りて、三世を洞觀するに至れる太子の心境や、誠に豁然たるものあり。心眼朗々として方に覺醒の頂點に達せり。或は宿命、他心、漏盡の三明を得たりといひ、或は我生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じて更に後有を受けずといふもの。此時の自覺の尋常に非ざりしをいふなり。天上天下唯我獨尊、今茲而往、生分已盡の誕生偈は、移して以て此時の太子を説明せる者とも見るを得べし。斯くて太子は成道して、今や佛陀の位に上れり。佛陀とは、覺者の義なり。後の學者、覺の語を分析して、自覺、覺他、覺行、究滿の三義を開き來れり。悲智圓滿の佛陀の一生を説明して餘蘊なしといふべし。

今や覺者の域に上れる太子は、歡喜の情に堪へず、一聲高く獅子吼したまはく、生死無量あり、往來端緒なし、屋舎を求むるものは數々胞胎を受けん、此屋を觀たるを以て更に舎を造らず、梁椽已に壞れ臺閣摧折しぬ、心已に行を離れて、中間已に滅す。法句經、之を成道偈といふ。

最後に太子の出家及び成道の年齢につきて一言せん、二十九出家、六年苦行、三十五成道の説は、尤も信ずべしと雖も、他の多くの場合と同じく、之に關しても異説あるを免れず、二十九出家の説は、長阿含經四、中阿含經五十六、雜阿含經三十五、增一阿含經三十七、有部律雜事三十八、衆許摩訶帝經、大般涅槃經、本行集經等に出づ、過去現在因果經には十九納妃、同年出家の説を擧げながら二十九にして出家せば、一切種智を成ぜんの句あり、是亦二十九出家の説を妨げざるのみならず、却りて之を助成するの觀あり、そが十九出家の説を爲すは、畢竟これ羅睺羅の誕生を以て出家後と爲さんが爲なると、前述の如し、修行本起經、瑞應本起經、六度集經等に、十七納妃、十九出家説を出すは、前者の誤を襲へるものならん、梵網經に七歲出家、三十成道の説を爲すが如きに至りては、異論の甚しきものあり、是蓋し閻浮樹下の靜觀の時を以て、直

に精神的出家と爲せるものならん、以上に見るが如く、出家の年齢には、十九と二十九との二説あれども、經典の性質上より見るに、廿九と爲すは其當を得たるものなるべし、さて又六年苦行につきては、古來之を疑ふものなかりしが、近頃姉崎博士は、之をイエスに比するも、マホメットに比するも、斯の如き宗教的天才が、此自覺を得るまでに、六年の長年月を要せざるべく、且つ一旦排斥し去れる苦行を再び繰り返すこともなかるべしとの理由により、加之、長阿含經四に、成道今已五十年といひ、雜阿含經三十五に、成道五十餘年といひ、有部律雜事の佛陀八十歳の時の自白に、五十餘年專行戒定慧といふを典據として、一年苦行の説を提出し、猶一步を進めて、一年といふも實は長きに過ぐ、出家して諸仙を屢訪し、直に樹下石上の定に入りしものなるべく、斯く見る時は、出家以後僅々七々日と爲るとの新説を唱道せられたり、此説甚だ有力なり、されども有部律破僧事十二に、苦行六年、成道六年、歸郷の説を掲ぐるより見れば、博士の有部律の典據は、少くも其價值を半減すべく、又博士の典據とせる長阿含經、雜阿含經と、其古傳たるに於て、輕重なき中阿含經八に、魔王六年佛を逐ひ、其短を求めたれども、便を得る能はず、便はち厭ひ已りて還るの語あるより見

れば、是分明に六年苦行と爲すもの、且つ佛典中最古の一たるべき四分律にも、又増一阿含經廿三にも、六年苦行の語見ゆ。されば六年苦行説に對する反證あると同一程度に於て、之を助成する典據も亦之ありといふべし。よりにて思ふに、博士の典據とせる諸經の文言は、必ずや、漠然、出家以後當年に至るまでの年月を算せるものなるべく、之れを以て究竟の史料と爲し難き觀あり。唯初めに苦行を斥けたりし太子が、後に自ら苦行に従事し、而も六年の長きに亘れりといふは、多くの佛典の一致する所なるにも關はず、博士の疑へるが如く、甚だ其當を得ざるに似たり。當時苦行は修道者の必須條件とせる所なれば、太子も必ずや、之を敢行せるなるべく、而して之を敢行せるは、諸仙を去りての後にあらずして、是等諸仙を歴訪し、就學せる間が、六年の長きに亘り、憔悴骨立するに至れるものならん。太子が初め尋常にあらざる苦行を修し、苦行を去りて後、樹下石上に入定せりといふ徑路は、宛も是跋伽苦行仙より、阿藍伽藍、鬱頭羅二仙に至れる徑路にあらずや。蓋し佛教々義の確立せる後に至りて、從來の傳説を或は改正し、或は増減せしは、疑を容れざる所にして、是實に種々の異説を生ずる所以、太子が苦行仙を破斥して、一宿にして去れりといふが如きは、

佛教の苦行排斥主義より起れる傳説か、少くも改正を加へられたる説なるべし。

第七章 說法時期中の釋尊

第一節 四十五年總説

佛陀の說法時期は、之を四十五年と爲すものと、五十年と爲すものとの二説ありと雖も、其入滅を以て、八十歳或は八十一と爲すに於ては、概ね異論なきを以て、成道の年齢にして決定せば、容易に解決せらるべき問題なり。予は既に釋尊の成道の年を以て、三十五歳と爲せり。従て四十五年説を取ること、勿論なり。

四十五年の間に於て、最も注目すべき事蹟の相次ぎしは、成道後僅々數年間のみ。蓋し此間に於て、一代化導の基礎大略確定し、其後は極めて平穩無事の布教によりて、漸を追ひ其教線を張りしもの、如し。されば成道後十年間許の事蹟は、稍記傳軀に之を尋ね得べしと雖も、其他に於て判然其年時を知り得べきは、涅槃に近き數月間の事蹟のみ。其他に於ては、個々別々に大なる事蹟を傳ふれども、其年代に至りては、到底之を決定するを得ず。南方所傳の材料によりて、成道後約廿年間の事蹟を尋ね

得べきも、其後の二十五年間は、不明の間に葬らるゝのみならず、其尋ね得らるゝ間の事蹟とても、初の五六年間を除きて後は、左まで重要なるものにあらず。佛傳中尤も完全なる佛所行讚には、一代を悉く包含せしめたりと雖も、惜むらくは、全く年月を記さず。且つ成道後數年及び入涅槃の事蹟に詳にして、其中間の約四十年間の事蹟に至りては、僅に守財醉象調伏の一章中に合説せるに過ぎず。これによるも亦中間の事蹟、殊に阿難が常隨昵近の弟子として、終始佛陀の後に隨へる間のもは、杳として尋ねべからざるなり。蓋し佛陀の最初と最後の事蹟は、尤も著しくして、其詳細に至るまで深き感動を教徒に與へたりと雖も、其中間に於ける平穩無時の化導は、他の注意を惹くこと少く、隨て之を傳ふることなかりしが爲ならんか。

說法時期の佛陀に關する北傳の諸記録中、最も異例とすべきは、十二遊經、八大靈塔經及び僧伽羅刹經の三者なり。十二遊經には、明白の筆を以て、成道後十二年間の事蹟を傳ふ。但し此所傳は、頗る他の所傳に異なるものあり。就中、頻婆娑羅王の友にして、健駄羅國王たりし弗迦沙を以て、摩竭國王と爲すが如きは、甚しき誤謬にして、此經が果して眞の譯經なるべきや否やに關して、疑を挿ましむるものあり。よし、正確な

る譯經なりとするも、十二年以後の全く不明なるは、欠陥といふべし。八大靈塔經には、概括して四十五年間の遊化時處を擧ぐ、二十九歳王宮に處り、六年雪山に修行し、五歳王舍城に化度し、四年毘沙林にあり、二年惹里巖に安居し、廿三歳舍衛にあり、廣嚴城、鹿野苑、摩拘梨、切利天、尸輸那、憍賤彌、寶塔山頂、大野、尾拏聚落、吠蘭帝、迦毘城にある各々一年、八十年在世といふ是なり。是唯一代の說法地又は滞在地在を任意に列擧せるに過ぎず。而も此中に於て、同一なる毘沙林、廣嚴城を別々に數へ、三月を通説とする切利天を一年と爲すが如き不精密なるあり。以て紀傳體に說法時期中の佛傳を尋ねんとするものに取りて、効力少きを知るべし。獨り僧伽羅刹經の所傳に至りては、最も注目に價すべき者あり。如何なる說法ありしかの點に關して、些の記事なきは、甚だ惜むべしと雖も、年代的に記せる點に於て、南北の佛傳中、蓋し唯一の史料たるべし。之を他の所傳に比するに、頗る異説を含む所もあり。例せば切利天に昇りし年時、及び故國に還りし年時の如きは、甚しく他傳に異り、到底調和の道なき憾みありと雖も、之を外にして他に史料なきを如何せん。斯の如く信ずべきものに從ふ時は、中間に空隙あり。空隙なきものは、決定史料ならず、一步を進めていへば、比較的

明白なる成道後數年の事蹟にすら、異説あるを免れず、いづれよりするも、説法時期中の佛傳は、到底不明のものたるを免れざるなり。

斯の如く佛傳中の大部が尤も不明なるが爲に、佛教の開祖として殊に重要な説法時期中の佛傳に大なる空隙を作り、此空隙は乗すべき餘地を教界の俊傑に與へ、或は説時明白の幾多の經典を成立せしめ、或は自己の識見に従て隨意に諸經を此間に挿入し、よりにて以て諸經興起の前後に就て、幾多の論議を來し、後世に至りて、教相判釋なるものが、一宗派の重大問題たるに至りし所以なり。

第一年 波羅奈國 (Vairasi) に於て初めて法輪を轉じ、此の夏坐に於て摩竭國

(Magadha) 王に益あり。

第二、三、四年 靈鷲山頂 (Gṛdhrakūṭa)

第五年 脾舒離 (Vaisali)

第六年 母の爲の故に摩拘羅山(白善) (Makula)

第七年 三十三天

第八年 鬼神界

第九年 拘苦毘國 (Kausambi)

第十年 枝提 (Cedi?) 山中

第十一年 復た鬼神界

第十二年 摩伽陀 (Magadha) 閑居處

第十三年 復た鬼神界に還る

第十四年 本佛の所遊處、舍衛 (Śrāvastī) 給孤獨園 (Jetavana-vihāra)

第十五年 迦維羅衛國 (Kapilavastu) 釋種村中

第十六年 迦維羅衛國に還る

第十七年、第十八年 羅閱城 (Rājagṛha)

第十九年 柘梨 (Cāliya?) 山中

第二十年 夏坐して羅閱城にあり

第二十一年 柘梨山中に還り、鬼神界に於て餘處を經歷せずして四夏坐を連ね、

(第二十一、廿二、廿三、廿四年)十九年(第二十五年より四十三年に至る)餘處を經歷

せずして舍衛國に於て夏坐す。

第四十四年 最後の夏坐の時、跋祇(Vijji)境界毘將村中に於て夏坐す。

佛陀一代四十五年間に亘れる説法は、今日、大藏經又は一切經或は一代經と呼ばれるものの中に包含せらる。今大藏經の中に集大成せられつゝある諸經を比較對照するに、頗る多説多岐にして、中には彼此の間に調和の道なきまでに、其内容を異にするものあり。是の如き多説多岐の經典は、果して同一佛陀の所説なるべきか、將又後世のものをも包藏すべきかは、いづれにせよ佛教史上の大問題たらざんばならず。或は之を以て佛陀一代の説法を、そのまゝに傳へたるものと考ふるあり、或は佛説中に胚胎せられ、後に至りて自ら發展せるものをも含むと考ふるあり、或は又佛説は其一小部分にして、他の大部分は、後世に發達成立せる非佛説のものと考ふるあり。種々の異説ありと雖も、今日に於ては、是等の經典全部を以て、金口の説法そのまゝを傳へ、又は筆録せるものと考ふる人はなかるべし。唯那邊まで佛説なるか、疑問たるのみ。

古今之を金口の説法そのまゝを、傳燈寫瓶の如くに、耳より口に、口より耳に傳へて

今日に至れりと考へ來りし所以のものは、概ね左の理由によるべし。

(一) 多くの經典は、其編纂又は製作の人、時、處を知らずして、いつの間にか世に行はるゝに至り、又記憶のみによりて傳へられし印度の事として、同一の經典の間にも幾多の異傳を惹き起し、時を経るに従ひ、彼此の間に正閏新古の區別を附し難きに至り、遂に同一様に佛説と考へらるゝに至りしものならん。例せば吠陀が其製作編纂の人、時、處を没却するに至りて、天啓の書と考へられ、之が註疏たる婆羅門書も、其中の哲理思想を歌へるウパニシャッドも、同一順序を以て吠陀と同じく悉く天啓の書と考へられしが如きは、恰も佛教の經典と、同一の徑路によりて、同一の結果に達せるものといふべし。唯彼は神より聞けるものと爲し、此は佛より聞けるものと爲すの差あるのみ。

(二) 個人の發達と社會の發達とは、自ら其徑路狀況を等しくするものあり。大凡千年間に亘れる印度佛教々團に於ける宗教思想及び教理問題の進歩發展の徑路順序は、恰も個人精神中に於ける宗教及び教理の進歩發展の徑路順序と、同一途に出づるものなくんばならず。是新古正閏の思想教義を包括せる大藏經が、對機の精神の

熟否によりて、五時教又は三時教の順序を経て次第に説かれたるものと考へられし所以なり。

三説法時期の佛傳が頗る不明なる弱點あり。是偶々偉大なる頭腦を有し、護法の精神に厚き碩學鴻儒の乗ずる所となり、阿含經すらも多くは其説時の不明なるにも關らず、或は成道三七日に華嚴經あり、十六年に般若經あり、四十餘年に法華經ありといふが如き、説時明白の幾多の經典を現出せしむるに至れる所以なり。是等の因縁和合して、非歴史的の歴史を生じ、傳承を重んずる宗教のととて、從來の傳説をそのまゝ如實のものとなし、遂に一切經を佛陀の一代經と考ふるに至りしものなるべし。

第二節 最初の歸佛者

佛成道後の最初の弟子が、五比丘たりしこと、及び耶舎の家族が三寶に歸依せる最初の優婆塞、優婆夷たりしことに於ては、異論なきに似たりと雖も、詳に之を研究する時は、之に關しても亦種々の異傳あるを免れず、蓋し、これ佛教々會史上、重要な問

題なれば、本行集經四分律、五分律、有部律の四種を、之に關する代表として、引證せん。引文長くして餘りにくだしくしけれども、之を省略し難きものあれば、殆んど原文のまゝを引證すべし。

本行集經の傳。成道後、樹下に於て七日間三昧に入りて、解脱の樂を受け、八日を過ぎて後、師子座に坐して、初夜に十二因縁を順觀し、後夜に之を逆觀し、其後座より起ちて、樹を去ること遠からず、三昧に入ること七日、後起ちて、摩利支經行の處に至りて、三昧に入る七日、起ちて、迦羅龍王の請によりて、其宮に入りて七日の間、入定、彼をして三歸五戒を受けしめたり。之を畜生中に於ける最初の優婆塞と爲す。其後目真隣陀龍王の請によりて、其宮に入りて入定七日、彼をして同じく三歸五戒を受けしめたり。其後三十三天(忉利天)の一天子の請によりて、羊子樹下に於て入定七日、彼をして三歸五戒を受けしめたり。之を最初の天中の優婆塞と爲す。其後差梨尼迦樹林下に於て入定七日、斯くて七々日の間三昧の力を以て相續して住せしが、時に北天竺の二商主、商梨富婆(胡瓜)、跋梨迦(金挺)なるもの、妙蜜を供養せり。此二商主は實に人間中の三歸五戒を受けたる最初の優婆塞なりき。其後耶輸陀の父は、三白を以て三

歸依を成せる最初のものにして、是實に大長者中の最初の優婆塞なりき。又人間中の最初の優婆夷は、耶輸陀の母と婦となりきと。此傳に據れば、僧の有無に關らず、一切の歸佛者を悉く三歸を受けたるものと爲し、從て耶輸陀の父母以前に於ても、既に完全なる優婆塞ありと爲すなり。唯三白を爲せる點に於て、耶輸陀の父は、他に異なるのみ。

四分律の傳、同律三十一に、成道後七日間、解脫の樂を受け、定意より起てる時、賈客二人の瓜及び優波離と名くるもの、妙蜜を供養し、佛の教に從て、歸依佛歸依法せり。之を優婆塞中、最初の二歸依を受けたるものと爲す。其後七日の間、三昧に入り、身内の風動きし時、呵梨勒樹神その果を供養して、佛陀の病を除き、佛の教を受けて、佛法に歸依せり。之を諸神中の最初の歸依者と爲す。後其樹下に結跏する七日、起て憍鞞羅村の婆羅門の舍に行乞して、之を歸依せしめ、其後、離婆那樹下に入定、七日、又彼婆羅門の舍に行乞す。彼の婦歸依す。此憍鞞羅の婦、蘇闍羅大將の女を佛法に歸依せる最初の優婆夷と爲す。其後七日間、入定、又彼婆羅門の男女を歸依せしめ、其後文麟龍王の宮に入りて、入定、七日、彼を歸依せしめたり。之を畜生中二歸依を受けたる初と

す。其後梵天の勸請によりて、說法の途に上り、先づ五比丘を度し、次て耶輸伽を度せしかば、彼が父母及び本二出家以前の妻は、三歸五戒を受けたり。是實に最初の三自歸せる優婆塞、優婆夷たりきと。此傳にては、耶輸伽の父母を以て、三寶具足せる後に於ける最初の歸依者と爲せども、其以前に遡りて、苟くも供養し、又は守護せるものを、悉く歸依者の中に加へたるなり。歸依者中に加ふるは、可なるも、未だ說法なき時に於て、法に歸依すと爲すは、其當を得ざるべし。

五分律の傳、同律十五に、成道の初夜、順逆兩様に十二因縁を觀じ、爾の時風患ありしが、摩修羅神の供養せる、呵梨勒果によりて之を除き、七日間、三昧に入り、七日を過ぎて人間に遊行せる時、五百の賈客中の二大人、離謂及び波利なるもの、供養によりて、飢を除き、之を救へて、二歸依せしめたり。之を人中の最初の二歸依を受けたるものと爲す。其後七日間、三昧に入り、文鱗龍王所坐の樹下に至りて、七日間、三昧に入り、起て憍鞞羅村に入り、斯那婆羅門の舍に至りて、乞食せる時、彼女須闍陀なるもの、佛を供養して、二歸せり。之を女人中の最初の二歸せる優婆夷と爲す。其後順次に、斯那をも、其婦をも、彼が姉妹四人をも、二歸せしめ、又阿豫波羅尼拘類樹に向ふ途上に、

一女人を見て二歸せしめ、其後梵天の勸請を得たりと爲す。此傳概ね四分律に似たりと雖も、又異なる個所少からず。其二歸者の數の少きは、比して知るべし。有部律の傳、同律破僧事五に、成道後七日間三昧に入りて後、黃菰村落なる二商主の供養を得たり。此二人を最初の供養者と爲す。其後世尊風氣を患ひしが、帝釋天の訶梨勒果を供養せるによりて癒え、菩提樹下より起ちて牟枝隣陀龍王池邊の一樹下に入定七日、去りて菩提樹下に還りて十二緣生を循環返復して觀じ、七日間入定し、其後梵天の勸請を得たりと爲す。此傳は事理尤も明晰なり。樹下の七日、池邊の七日、復た樹下の七日、合して三七日間解脱の樂を受け、此間に最初の供養者ありしかども、說法なかりしかば、從て優婆塞夷あらざりき。此傳にては、耶輸陀の父母婦を以て、最初の歸依者と爲すこと勿論なり。以上の如く、僅に最初の歸依者につきてすらも、異説の紛々たるあり、これと連環して、成道後の入定日數にも、場所にも、供養者の前後にも、種々の點に於て頗る相違あり。日數の一點にても、短きは三七日より、長きは七々日に及び、甚しきは五十七日、或は一年と爲すもあれども、煩はしきを以て、今は論及せず。

第三節 梵天勸請

佛陀成道の後三七日間、獨り自ら解脱の樂を享受しつゝ、ありが、既にして自ら謂へらく、吾所證の法門や甚深にして解し難し、佛と佛と乃はち能くこれを知るのみ、一切衆生は薄福鈍根なり、如何んぞ吾所得の法を解せん、われ寧ろ般涅槃せんかなと、斯くて所證の法を、一般に向て說法すべきか、又せざるべきかに關して、心中に甚だしき苦悶ありしが、遂に之を一般に及ぼさんと決するに至れり。此時魔王現はれて涅槃を勧め、梵天帝釋等の諸天來りて說法を請へりと爲すは、佛陀の心狀を印度的筆法にていひあらはせるなり。梵天白す、世尊よ今始めて無上道を成じて、如何ぞ默然として說法せざる。衆生中には過去世の時に多くの徳本を植ゑて法を聞くに堪ふるものあり、願はくは、斯等の爲に、大悲力を以て妙法輪を轉ぜよ。帝釋天乃至他化自在天も、亦々是の如く、各々三たび請ふに至り、佛陀默然として之を許せり。帝釋天といふは、婆羅門の徒が吠陀以來厚く信奉し來れる因陀羅是なり。梵天といふは、未だ吠陀の古典に説かれざるものなれども、當時次第に最高の位置を取り來り、宇宙

の創造者とせらるゝまでに至りし神の名なり。今是等二神の勸請によりて説法ありと爲し、且つ又是等二神を以て長く佛法護持の善神と爲すに至りし所以のものは、偶々以て佛教が婆羅門教に對して敵意を有せざりしことを證し、又包容の精神の盛なることを説明す。本邦の本地垂迹説は、佛教と相終始して傳來せる此精神の一發現に外ならず。

斯の如く成道後三七日間は、菩提樹邊の入定を持續して、未だ言説にあらはれたる説法なかりき。かの華嚴經は、實に此時佛陀の海印三昧中に同時に炳現せる大法門にして、十方の菩薩に對して説かれたるものなりと傳へらる。此經初には七處八會、後には七處九會の説法とせらる。七處九會とは菩提道場の第一會、菩提道場普光明殿の第二、第七、第八の三會、切利天宮の第三會、夜摩天宮の第四會、兜率天宮の第五會、它化天宮の第六會、遊多林給孤獨園の第九會、是なり。此中菩提道場と遊多林祇園精舎とは、此世界にあれども、他は皆欲界天に屬せらるゝものにして、中空にあり。この天宮の説法は、諸天勸請の傳説より案出せられたるものなるべく、又入定中の佛意を付度開舒せるものなるべし。何となれば早く既に禪定の階位と、三界説と關係融

合して、一定の禪定階位に應ずる天界ありと考へられたればなり。成道三七日の間は、未だ一の聲聞もなかりしや、勿論なり。而して此經の會座に五百の聲聞あり、而も文殊普賢二菩薩の外は、悉く聲の如く啞の如くなりしと傳へらるゝ所以のものは、佛陀が初め其所證の法門を以て、甚深難解と思惟せりといふに基づくものなるべし。天宮の説法と聲聞の聲啞とは、斯くて以て緣由あるものと爲るべし。第九會の給孤獨園の説法に至りては、後の附加なること、いふまでもなし。

第四節 三寶具足

佛陀是に於てか、先づ衆生の根機と煩惱とを觀じて後、甘露の法門を開くべしと爲し、誰か先づ聞くを得べきやと思惟す。此時阿藍伽藍仙が嘗て、成道の後先づ此身を度せよと發願せるを憶ひ起すに際して、空中に聲ありていふ、かれ昨日命終す。次で鬱頭羅の利根なるを憶ふ。復空中に聲ありていふ、昨夜命終す。是に於てか、彼五比丘を想ひ、座より起ちて、婆羅捺城、グーラーナシ、現時のベナレスに赴き、憍陳如等五人の爲に、初て言説に現はれたる説法を爲したまへり。こゝに至る途上に一婆羅門

あり、憂波迦或は優波伽摩と作し、或は優婆耆婆又は優陀耶と作すと名く、世尊の諸根寂靜にして、柔和忍辱の相あるを見て、何の爲に斯の如くなるかを問ふ、その成等正覺せるを聞き、之に服せずして去る、大威德仙人問疑經なるものは、此時の説法に擬せるならんか。

斯くて婆羅捺城鹿野苑に至る、彼五比丘之を遠望して互に敬せざるべきを約せしが、親たり接するに及んで、思はず起て之を迎へ、競ひて種々奉侍する所ありき、以て佛陀の相好の如何に圓滿にして、威嚴ありしかを知るべし、其説法を聴くに及び、憍陳如先づ歸依の意を表せり、佛陀之を讚して、阿若憍陳如といふ、阿若とは已知の義なり、譯して了本際といふは是人なり、他の四人亦等しく弟子となれり、是等五人を最初の弟子と爲す、さて五比丘の名につきては、少くも三説あり、一は憍陳如、阿濕婆、特馬勝、跋提、摩訶南婆沙波とするもの、二は摩訶南に代ふるに十力迦葉を以てするもの、三は摩訶南、婆沙波に代ふるに、摩訶南拘利太子、十力迦葉とするもの、是なり、第一説は南北兩傳の多く一致する所なれば、之を以て通説と爲すべし、猶又五比丘中の跋提及び摩訶南の二人を以て、淨飯王に嗣ぎて釋種の長者たりし、跋提及び摩訶

南即ち佛陀の從弟と爲す説あれども、これは名の同じきより混同せるものなり、彼は王族なり、此は佛陀に給仕供養せんが爲め、父王より送られたる臣從なり、此間には著しき區別あるのみならず、王族の跋提には、多くの釋種と共に出家せる事跡の傳へらるゝあり、摩訶南には、弟の阿菟樓陀を出家せしめ、自ら家を整へんが爲に在家せる事跡の傳へらるゝあり、共に五比丘中のその人にあらざるなり。

此鹿野苑の説法は、四十五年化導の初を爲せるものなれば、甚だ注目に値す、題して轉法輪經といふ、南傳にチャッカ、パヅッタナ、スッタといひ、東方聖書第十一卷中に英譯せらる、中に含まるゝものは、簡單明了にして、極めて適切なる四諦八正道の福音なり、斯くて佛を並せて世に六阿羅漢あり、以て三寶具足するに至りぬ、三寶とは佛と法と僧と是なり、僧とは和合の義、三人以上の團體に名くるものなり。

第五節 千二百五十人

佛陀五比丘を度して、こゝに成道第一の雨期を過せり、これ佛教々團中に於ける夏坐(又は夏安居、或は夏臘)の初なり、夏坐とは其語の示すが如く、夏時の雨期を利用し

て靜坐修養するをいふ蓋し是印度の天候上より起れる自然の式事にして、佛教に始まれるにあらず、彼地、雨期に入るや、朝夕降雨のみ連續すること、三月の長きに及び、此間出遊に不便なるのみならず、萬物生育の時期なるを以て、出遊すれば往々虫類を殺すの虞あり、且つ人には退いて反省修養するの必要あり、況んや出家に於ては、一年の中、其四分の一を割きて之に充て、此間冥想凝慮を肆にし、又師弟研修の時期と爲す、頗る當然の事といふべし、佛陀此時期三月間に於て、彼五比丘を訓誡誘導せしや、疑なし。

雨期後、出遊化導せしと覺しく、忽ちにして新に耶舎なる弟子を得たり、彼は長者(吠舍姓)の子なりしが、人生の悲痛に打たるゝと多かりけん、佛説に遇ひて感悟し、即座に出家せり、愛重措かざりし彼が父、彼を尋ねて遂に佛所に至り、亦佛説を聞き、三寶に歸依せり、之を最初の優婆塞(清信士)と爲す、其母及び婦も亦來りて歸依の意を表せり、之を最初の優婆夷(清信女)と爲す、最初の歸依者中に女人ありしことは、注目すべしと爲す、耶舎の朋友四人も亦之を聞き、相前後して出家せり、離垢、善博、富婁那、牛主是なり、富婁那是後世に説法第一の嘉號を止めたる滿慈氏、又は滿願子、其人

なるべく、佛滅の時、南方にあり、三藏結集に後れて參加せりと傳へらる、之を聞き、他の五十人亦來りて出家す、是に於てか師弟合して六十一を數ふるに至れり、或は五十六羅漢と爲す説もあり、これ彼四人及び耶舎を以て、五十人以外と爲さざるなり、五十六人とするも、又は六十一人とするも、いづれにせよ、婆羅捺城民は、渴せるものゝ水に遇へるが如き狀況を以て、前後相率ゐて佛陀に歸依し、團衆中に加はれるものなるや疑なし。

佛陀是等多數の弟子を訓練する時ありて後、其傳道に堪ふべきを見て、獨り耶舎のみを、こゝに止めて、父母の許にあらしめ、他のものに向て、二人同行せず、別々に有縁の地に化導せしめたり、佛教が興起當時より、活潑々地の傳道を爲せしは、非傳道主義の婆羅門教に對照する時は、快心の壯舉たらずんば、あらず、佛陀も亦自ら三迦葉を度せんが爲に、摩伽陀國の苦行林に至り、滞在三月にして、優爲迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉の兄弟三人の大婆羅門を濟度せり、彼等は事火外道、即ち正統婆羅門にして、婆羅門書の儀規法式に遵ひ、火に事ふるを以て最上の服務と爲し、儀式執行の中に無上の功德ありと信じ、誠心を以て之を執行しつゝ、其周圍に多くの弟子を集めたり、

これ森居時期中の婆羅門大德にして、森書を讀誦し、吠陀の暗誦によりて、其弟子を訓練する所ありしならん、弟子といふは、多く學生時期中の婆羅門たりしなり、彼等三人既に供犠式事の徒事なるを知りて、祭器一切を河に投じ、稽首以て佛陀に歸依して、其弟子と爲れり、數多の弟子も亦同一の轍を蹈むべきは素より其所なり、乃はち、長兄の弟子五百人、二弟の弟子五百人、合して千人、悉く佛門に歸し、是に於てか、佛教々團は、俄然として千人以上を算するに至れり。

彼等三人は、王舍城附近に於ける耆德にして、上下の歸信甚だ篤かりき、而して彼等一朝にして佛弟子となれり、王城の民衆の驚き如何ばかりなりけん、或はこれを信ぜざるあり、甚しきは佛陀が却りて優爲迦葉に歸依せりと思惟するものすらありき、佛陀是等の弟子を率ゐて、先づ象頭山に上り、彼等が神事せる火を以て、譬喩と爲し、縱横に欲火の恐るべきを説破し、彼等千人の機根純熟せるを見るに及んで、王舍城に至り、優爲迦葉をして公衆の前に於て、歸佛の因縁を懺悔し、演説せしむ、頻婆娑羅王之を聽きて大に喜び、直に進んで、宿昔より懷抱せし五願、又は六願の今正に満足せられたるを述べ、衷心を披きて、歸信の情を捧げ、迦蘭陀竹園に精舎を建立して、

之を教團に布施し、佛陀及び弟子の止住處に充てたり、頻王は國王歸依者の最初、竹園精舎は伽藍の最初にして、其に佛典中甚だ有名なり。

頻王が歸佛するに至りて、佛教の勢力王舍城を席卷し、父母を去り、妻子を捨て、出家するもの、踵を接するの勢あり、滞在僅々二ヶ月にして、舍利弗、目連の二大弟子を得て、佛教の勢力一層増大せり、或は彼等二人の出家を以て成道第三年と爲し、又は第四年、第五年等と爲し、數説ありて、紛々たりと雖も、要するに成道久しからず、摩伽陀布教中たりしものにして、竹園精舎は實に第二、第三の結夏の道場たりしなり、舍利弗は名を優波底沙といひ、目連は拘律陀といふ、共に六師外道の一人、沙然に従へる出家にして、情交甚だ厚く、共に頗る教學に精通し、各々一百の徒弟を領する身たりしが、未だ中心の安きを得ず、互に相約するに、先づ解脱を得んもの、必ず之を他に告ぐべきを以てし、共に競て行道甚だ精進なりき、舍利弗、王城に行乞して、一日五比丘の一人馬勝に遇ひ、其儀容の端正なるに打たれて、其理由を問ひ、初めて佛陀の出現あるを知り、一偈の法門によりて、忽ち心眼開通し、之を介して、竹園精舎に至り、佛陀の説法を聞き、法眼淨の悟りを得、即ち之を目連に告げて、共に佛弟子となり、二

人の弟子合して二百人も、亦師の跡に倣ひて佛教々團に屬せり。是に至りて、佛弟子正に千二百五十人に達せり。佛典中に此語の多きは、之に基くものなり。大迦葉の歸佛の年時詳ならずと雖も、是亦此頃なりしが如し。彼は頗る耆徳ある婆羅門の一人なりしが、機に觸れて、佛弟子の中に加はり、教團中に於て、舍利弗、目連の二人に並んで必須缺くべからざる傑物なりき。舍利弗は法王子の嘉號あり、智慧第一と稱せられ、目連は神通第一の名を後世に轟かし、大迦葉は少欲知足頭陀第一を以て、常に佛陀の尊崇を受けたり。佛陀嘗て舍利弗が僧徒の智慧を生れしむる點に於て、之を生母に比し、又目連が其智慧を長養せしむる點に於て、之を養母に比し、以て此二人を推量せるとありき。又蓬頭垢面にして來り、他の輕賤する所となれる、大迦葉に對して、諸比丘驚愕の間に、我半座を分ち、我大衣を授けて、其徳行の儕輩に扳んづるを稱賛せるとありき。以て是等三人の教團中に於ける位置をトすべし。舍利弗の舅なる拘絺羅、及び阿私陀仙人の甥と傳へらるゝ迦旃延子の出家も、亦此時なりしが如し。拘絺羅は舍利弗の母兄にして、學力あり、辯才あり、長爪なりしかば、長爪梵志の名を以て、教學界に横行せしが、佛陀と對辯するに至りて、屈服以て弟子

となり、教團中間答第一の稱ありき。迦旃延も亦議論に長じ、推理に抜んで、是亦教團中論議第一の稱ありき。佛門中斯くの如く濟々たる多士あり、加ふるに頻王の歸依の深きあり、王舍城内に於ける佛教が、如何に順境を以て其勢力を増加せしかをトすべし。或はいふ、子を奪はれし親、夫を奪はれし妻、日に月に増加せしかば、彼等頗る之を喜ばず、非難、咒咀の聲を放つに至れりと。婆羅門教も亦人を出家せしめたれども、彼のは學生期の少年か、又は森居期の老年のみ。佛教々團のは、血氣今方に盛なる中年なりしかば、此非難、咒咀、一時に高されるなり。佛陀之に對していふ、我は唯說法によりて、他を導くのみ、彼等の來るは眞理に來るなり、世人或は之を以て滅亡と叫ぶ。あらんも、達人より之を大觀せば、毫も其不可を見るなし。或は又いふ、佛陀頗る舍利弗、目連の二大弟子を推量、信用せしかば、舊弟子の間に不平の聲あり。佛陀之に對して七佛通戒の偈を説き、以て相互の反省に訴へたりと。七佛通戒偈とは諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教といふもの是なり。

第六節 諸釋出家

佛陀の王舍城に於ける活動は、迦毘羅城の内外を震動せり。父王長く佛を見ざるを以て、且つ衰老身に迫り、且に夕を圖らざるを以て、遂に使を遣はして、一たび相見んことを請ふや、切なり。佛陀即ち衆多の弟子に圍繞せられて、故國に還り、父王の爲に說法し、大に心中の安平を得しめたり。佛陀歸郷の年時は詳ならず、或は之を成道第一年中の事と爲し、或は祇園精舍建立後、波斯匿王甚だ佛教に歸し、之を淨飯王に報じて太子の成佛を祝せしかば、父王之を聞き、大に喜び、使者を送り來れるなりと爲す。而して祇園の建立には、第三年説と第六年説との少くも二説あり。されば佛陀の歸郷には、少くも三説あるとなるなり。予は第六年は遲きに過ぎ、第三年も猶遲きに失すと思惟するを以て、之を王舍城市化導に引き續けるものと爲さんと欲するなり。或は又傳説あり、曰く、此時父王の使者、佛陀の說法に耳を傾くるや、忽ち出家して、遂に歸郷せざること再三、父王最後に迦留陀夷に、必ず歸郷すべきを命じて、之を遣はせしに、彼亦遂に出家せしかど、能く父王の使命を果すを得たり。使者の出

家せるもの、前後通計一千人の多きに達せしかば、佛陀は摩伽陀の一千と、迦毘羅の一千と、總計二千の弟子を率ゐて、歸郷。以て父子相見せるなりと。是佛陀の感化力の偉大なるを示さんとの動機より起れる傳説なるべし。さはれ、數多の弟子に圍繞せられて歸郷せることは、疑ふべくもあらず。

歸郷の第二日、恰も立太子及び結婚の二大儀式を擧げんとしつゝ、ありし異母弟難陀を出家せしめ、第七日、出家以前の子羅睺羅を剃髮せしめたり。父王佛に訴へて曰く、卿の出家せる時、猶難陀の存するありき。今や難陀も既に出家し、餘情の寄する所、獨り此孫にあるのみ。是亦出家せり。國嗣の永く絶ゆるを如何せん。佛陀爲に說法以て之を慰め、此時、父母聽かずんば、出家を許さずとの制を立てたりといふ。

佛陀の歸郷は佛教に更に新勢力を加へたり。或はいふ、此時淨飯王、國中の豪族を集め、各一子を遣はして、王孫に従て出家せしめたるもの、五十人なりきと。或はいふ、佛陀、叔父の三王を歸依せしめければ、釋種互に相約して、毎戸一人を出家せしめたりと。印度は、世界に稀なる宗教的國民なり。一族中より佛陀を出せるを以て、未曾有の光榮とせる釋種が、一たび佛陀の尊嚴に打たるゝや、相率ゐて滔々として教團中に

入りしは、數の觀易き所なり。古典の傳ふる所によれば、佛陀、摩伽陀國に還らんとし、阿菟林下に到りし時、諸釋の追ひ至りて出家するもの多かりき。就中、阿難、阿菟樓陀、難提、跋提、金毘羅、提婆等は、甚だ注目すべき釋子なり。阿難は、後世に多聞第一の稱を殘し、阿菟樓陀は、天眼第一の名を殘せり。提婆は、佛陀に背きて一派を別立せるを以て、佛敵の大なる者たりしかども、彼亦人傑なりしや、疑なし。是等諸釋に従へる剃髮師に、優波離なるものあり、賤種の出にして、釋家に奉仕せり。淨飯王諸釋剃髮の任務の爲に、彼を遣はせしが、其任務を果して後、舍利弗の導きによりて、出家の志を遂げ、後世に持律第一の名を殘せり。佛陀は、彼が賤種なるに關らず、他の王種諸釋と同じく之を度して、毫も席次を分たざりき。曰く、受戒の前後によりて、以て上下を附すべし。貴賤によりてすべからずと、されば、彼が出家は、佛門中に四姓平等の福音ありしむる機會を與へたるなり。これを以て、直に、佛陀が當時の社會組織を打破せるものと爲すべからず。四姓の平等は、佛門内即ち貴賤上下を脱却せる出家の上につきてのみ。若し夫れ社會生活の上に於てせば、宿因の厚薄によりて、現世の位置に上下あり、貴賤貧富は、悉く善惡の宿業の應報ならずんば、あらず。若し後世の果報の、他の

上に出んと欲せば、現世の行業をして、他に超えしめざるべからず。斯くて佛陀は、在俗のものに對しては、現世生活の上に於ける位置狀況に對して、大なる注意を拂ひ、以て各自の行業を勵ましめたるなり。

佛陀の歸郷は、斯の如き好果を擧げたり。多數の出家のことゝて、後年に至りて、佛教々團の累を爲せるものも、頗る此中より出てたれども、然れども亦此中より佛教千年の大計に與りて大功ありし英傑を出せるは、其失を償て餘りありといふべし。佛教千年の大計とは、何ぞや、佛滅の年に於ける結集の大事業、是なり。この時や、舍利弗、目連等を始めとして、幾多の大弟子、既に入滅せりと雖も、猶大迦葉、阿難、優波離、阿菟樓陀等の存するあり。彼等遺弟は、大迦葉を中心として、王舍城の七葉窟に會し、經律を誦合して、異同を檢し、以て教法を確定し、異論の起らざらしむべきを期せり。此時に當り、阿菟樓陀は、失明の故を以て、多く貢獻する所あらざりしに似たれども、經を誦出せるものは、阿難にして、律を誦出せるものは、優波離なりき。而して彼等は、共に釋種の出なりしなり。

第七節 祇園精舍

拘薩羅國舍衛城の城民に須達なるものありき。家に巨萬の富あり、天性慈善を好み、能く孤獨に給與せしかば、世人之を尊稱して、給孤獨長者と呼べり。思ふに、須達は善與又は好施の義なれば、是も亦綽號にあらざりしか。若し、古典の記す如く、これ果して名なりせば、名實極めて能く適合せるものといふべし。長者嘗て事ありて摩伽陀國王舍城の一長者、或は護彌大臣と爲すの家に宿れることありき。此時偶々佛陀の出現あるを聞き、宿縁や到來しけん。即夜佛陀に値遇して、深く之に歸依し、佛陀を迎へんが爲に、舍衛城に精舍を建立せんを發願し、之を佛陀に白して、其許可を得たり。長者が歸佛の行跡を案ずるに、閃光の一撃によりて、黑暗の須臾に去るが如き觀あり。蓋し慈善の性質行業は、頗る長者の宗教心を刺激助長せしめつゝありしものゝ如し。長者歸城の後、城の内外に良好の地を求むるに、祇陀太子の苑圃に勝れる所なし。城を去る近からざるを以て、開法の念篤きものにあらざれば、來至せざるべく、又城を去る遠からざるを以て、求法の志に富むものゝ、往來するに難からず。竹樹繁茂

し、泉地清淨にして、寒からず、暑からず、また得難き好地にして、之を除きて、更に精舍を建立すべき地なし。即ち太子に至りて、之を買はんとするの志を述べ、強ふること甚し。太子遂に戯れて曰く、若し能く金を以て地に布き滿たば、之を與ふべし。長者大に喜び、忽ち象馬車乘を督し、幾多の寶藏を開き、黄金を運び來りて、之を地に布かしむ。太子驚きて前言の戯なるを述べ、金を収めしむ。長者聽かず、兩人の意志反して、即ち訴訟となりしが、既にして太子は、長者が強て之を得んとするの意、佛陀を供養するにあるを知り、甚だ之を隨喜し、是に於てか之を助けて、其美を濟さしめんとし、遂に和解して、長者をして地を布施せしめ、自ら竹樹を布施し、斯くて壯麗人目を眩せしむべき祇園精舍の建立あるを見たり。祇園委しくは、祇樹給孤獨園といふ。祇の樹給孤獨の園の義なり。精舍の設計都督は、佛陀の意を受けて、凡て舍利弗の與れる所なりき。長者と舍利弗との親交は、こゝに始まり、爾者長者はその一生を通じて、佛陀及び舍利弗に對して、特に歸依供養せり。精舍は、佛の在世には、十六大院あり、院毎に六十房ありしとの事、有部律に見え、後に至りて、其繁榮なりし時は、十二の浮圖、七十二の講堂、三千六百の房舍、五百の樓閣ありしといへり。いづれにせよ、巨滿の富を擁

せる長者が、其資力を傾けて建立せる所にして、千人以上の比丘の往來止住に充てたるものなれば、今人の豫想以上に廣大壯麗なりしなるべし。後年佛陀が尤も多くこゝに住せられしは、城民の歸依の厚きによるとはいへ、一は大衆の止住に適せるが爲なるべし。精舎の建立によりて衷心の満足を感ぜしは、長者なりしや明なれども、太子も亦自己の名が、伽藍の稱號の最初に、加へられたるを見て、大に喜び、爾來死に至るまで、深く佛陀に歸依し、釋種を以て甚だ親しむべきものと爲し、往復を絶たざりき。太子の父、波斯匿王之を聞き、佛陀の稱號の理由を問ひ、其説法に遇ひ、亦甚だ歸依の誠意を表せり。王が後年阿闍世王と戰鬪を交へ、之を生擒しつゝ、之を率ゐて佛前に至り、後來を戒めて放還せるが如き、寛宏の態度は、必ずや信佛の誠意の一發現なるべし。されども、王を以て單に佛教のみに供養せるものと爲すは過てり。王は大國の主として、通例の大王に見るが如く、一面に佛教に布施しつゝ、他面には能く國民教たる婆羅門教に布施するを廢せざりき。或はいふ、佛陀の父王が、佛の歸郷を求めたるは、實に波王が歸佛の後、之を迦毘羅城に報ぜるに基すと、されども予は佛陀の歸郷を以て、祇園精舎建以前と爲し、既に前節に於て之を叙述せり。波王報告の

傳説に左袒せざるは、素より明白なり。

第八節 比丘尼

尼僧は、佛陀の姨母摩訶波闍波提の出家に起原す。其年時詳ならずと雖も、成道第五年(又は第六年)吠舍離城大林精舎(又は舍衛城祇園精舎)に於てせるものゝ如し。是より先き佛陀大林精舎に第五の雨期を送りつゝ、ありし時、父王の病篤きを聞き、之を歸省せしに、父王遂に七十九(又は九十七)歳にして崩せしかば、佛陀、同族の難陀阿難、羅睺羅と共に、厚く其葬儀を修め、遺骨を供養し終りて、跋耆のナチカ國を経て、大林精舎に還らんとするに當り、姨母及び耶輸陀羅を始め、五百の釋女出家を請ふ。佛陀之を許さざりしに、五百の釋女自ら剃頭し、袈裟を著け、佛の後を追ひて門外に在り、破脚垢髪にして流涕す。阿難之を見て、往て其理由を問ひ、厚く同情を寄せて、佛に至りて女人の出家して大戒を受くべきを請ふ。佛陀猶許さずして曰く、女人の出家を見れば、佛法久しからざるべし。長者の家に男少く女多くんば、其家衰微するが如し。阿難即ち姨母の佛陀に對して長養の大恩あるを白し、其出家受戒を請ふや切なり。是

に至りて佛陀女人の終生嚴守すべき八則を定めて、之を許し、釋女等之を嚴守すべきを誓ひ、斯くて教團中に比丘尼あるを致し、其盛時に於ては、比丘に對立すべき程の數に上れり。八則とは何ぞ。

- 一、半月毎に、比丘の教授を請ふべし。
 - 二、比丘なき所に於て、夏安居すべからず。
 - 三、安居し終る時、比丘衆に於て、見、聞、疑、三事の罪を請ふべし。
 - 四、式叉摩那として戒を學ぶ二歳の後、二部の僧中にありて、具足戒を受くべし。
 - 五、比丘を罵るを得ず。在俗の家に於て、比丘の破戒、破威儀、破見を説くべからず。
 - 六、比丘の罪を擧るを得ず。而して比丘は比丘尼を呵するを得。
 - 七、僧殘の罪を犯さば、二部の僧中にありて、半月摩那埵を行はずべし。
 - 八、受戒百歳の比丘尼も、新に受戒せる比丘に對して、禮拜起迎すべし。
- 佛陀時にいふ、若し女人の出家なからば、佛法の世に住すること千歳なるべきに、今女人の出家あるが爲に、五百歳を減じ、正法の世に住する唯五百歳なるのみ。阿難之を聞きて、甚だ樂まず、心に悔恨を懷き、流涙するに至れりとぞ。

斯の如く、佛教々團は女人の路を杜がざりしと雖も、決して之れを歡迎せざりしな

第九節 上天

成道第六年、佛陀初利天上に昇りて、夏安居すること三月、此間に於て、母后摩耶夫人の爲めに説法せりとの傳説あり。是より先、王舍城の善賢長者の子、樹提伽なるもの、栴檀の鉢を高く竿上に懸け、梯棧によらずして、神通以て之を取るものに與ふべしと聲言す。六師外道等之を得んとして種々に苦心すれども得る能はず。或は之に近づきて神通を現せんと擬するものあり。其弟子之を止めて曰く、吾師何ぞ斯る一鉢の爲の故に、輕々しく神通を現せんとする。斯の如くにして、彼鉢を布施せしめんと計りしも、長者子之を顧みず、一意其聲言を主張す。佛弟子中に通力を以て之を得たるものあり。傳によりて、或は之を十力迦葉と爲し、或は目連と爲し、或は賓頭盧と爲すの差あれども、いづれにせよ、神力を現せるの主意は、一鉢の爲の故にあらずして、よりて以て佛教の他に勝れたるを表はさんとするにありき。果して民衆之を見て、

甚だ彼神通羅漢を稱揚し、延て以て佛陀の威徳の大なるべきを想望讃嘆せり。然るに佛陀之を聞きて、大に其非法を責め、彼鉢を取りて之を粉碎し、爾後輕々しく神通を現ずるを禁止せり。

斯くて佛弟子の通力を現ぜざるを知るや、外道等之に乗じて、或は誹謗し、或は大言して曰く、我等も之を得る能はざりしにあらず、之を得んとせざりしが爲のみ。曰く「斯る物の爲の故に、通力を現ぜざる彼徒の愚や、真に惑むべし。若し我等にして之を現せば、彼等は全く顔色を失すべし。」頻婆娑羅王之を聞きて、佛に訴へ、佛の威神力を以て彼等外道の口を箝せしむべきを請ふや切なり。佛之を容れ、爾後四月の後、舍衛國の東、某々の樹下に於て、某々の日に、自ら神通を現すべきを約し、其日に至り、從容として其地に至り、六師外道の徒を破斥し終りて後、種々の神變を現じ、忽ち身を踊らし、三步にして上天せしかば、世人全く佛陀の影を見ざるに至りぬ。舍利弗も亦佛に從ひ去りぬ。祇園精舍に於ては、目連佛に代りて大衆に說法し、須達長者、精舍の前の菩提樹を以て假に佛陀に擬して禮拜し、日々大衆を供養せり。日を経るに從ひ、佛弟子及び民衆の佛陀を追想するもの甚だ多く、愛慕の情日に募りて、目連をして佛の

所在を探らしむ。目連之を求めて、天上に在るを知り、民衆の意を述べて下降を乞ふ。佛陀之を容れて、七日の後下界に下るべきを約し、何れに下るべきかを求む。舍利弗が僧法舍にありて安居するを觀、これに下らんと決す。斯くて七日を過ぎて後、天上より僧法舍に至るまで、金、銀、玻璃の三道の虹の如く懸れるあり。佛陀、梵天、帝釋を左右に從へ、其中道の寶階を踏みて、下りしかば、四方の道俗之を仰ぎ視て、成佛せんを希はざるはなかりき。舍衛城の人民、佛陀の歸國を請ふこと甚しかりしかば、即ち歩して祇園精舍に還れり。斯くて佛教の勢力一層の大なるを致し、外道等嫉妬の情に堪へざりきとぞ。或はいふ、佛陀の天上にあるや、跋蹉國拘膜彌城の優填王、長く佛を見ざるの故を以て、愛慕の情に堪へず、重患に陥りしかば、群臣之を憂へ、牛頭梅檀の佛像を刻して、之を王に見す。王大に喜び、病頓に癒ゆ。舍衛城の波斯匿王之を聞きて、紫磨黄金の佛像を作らしむ。是に於てか、世に二個の佛像成れりと。或は又いふ、佛陀の僧法舍に下るや、蓮華色比丘尼先づ之を知り、乃ち帝釋の装を爲して、第一に佛を迎へ、心中竅に矜る所あり。佛之に對していふ、先づ我を迎へたるものは汝にあらざ、某山に入定せる須菩提は、其座を去らずして、定中に於て第一に我を迎へたり。

上天の意義の如何は、之を解釋するものゝ如何によりて、一樣にあらざるべしと雖も、予は思ふ、是必ずや王舎、舍衛兩城の佛教頗る隆盛の域に臨みしかば、六師外道の徒、祇園精舎の建立を機として、幾多の妨害反抗を加へしを以て、佛陀暫く其踪跡を隠匿して、之を西の方僧法舎に避けたるものなるべしと、精舎建立の年に於てすら、早く既に一裸形外道、或は赤眼婆羅門の反抗ありしは、之を證明すべき一史料と考へらる。彼の外道、法力の優劣に従ひ、供養の大小を定むべきを以て、頻王に要求する所あり。是に於て、舍利弗之と法力を揃し、忽ち彼を屈服して出家せしめ、猶又法力を以てせず、暴力を以て殺害せんとせる者をも、悉く濟度せしかば、外道の徒手の下すべきなかりきとぞ、斯くて、第一回は失敗に歸せりと雖も、上天の傳説に附隨するが如く、事に觸れ、機に應じて、或は誹謗し、或は迫害を加へんとするは、彼等の甚だ力めたる所なりき。是を以て、佛陀一たびは西の方拘睺彌の摩拘羅山に退きて、雨期を過せしも、餘炎猶消えざりしかば、乃ち大に彼等を破斥して後、其行く所を知らず、三月の後、遂に西の方僧法舎城に現はれたるものならん。或はいふ、佛陀の威神力の偉大なるを見て、六師の隨一たる富蘭那迦葉なるもの、甚しく慚愧し、其弟子に向ひ、天

に昇ると稱し、自ら河中に投じて、遂に溺死せり。弟子等其師の還らざるを見て、天上の生活の樂みは、師をして還るを忘れしめたるものなるべしと思ひ、五百人悉く水中に投じて、師の跡を追ひ、等しく溺没せりと。此傳説は佛陀の上天と外道の反抗との間に、必然の關係ありしことを示すものならずんばあらず。外道の反抗迫害は、一たび、佛をして其踪跡を隠匿せしむるに至れりと雖も、一時の成功は却りて永久の失敗を來し、國民の佛陀に對する歸信を益々深からしめ、遂に佛教に不動の根底を築かしめたり。東方諸國の民衆、佛陀が僧法舎にあるを聞くや、滔々として相率ゐてこゝに至り、佛陀を擁して、風潮の如き狀を以て祇園精舎に還れり。是に至りて外道の妨害は、更に一層の甚しきを加へ、頗る苦肉のものとなれり。古典の等しく記す所に據れば、彼等は、彼等の信者として、痛く佛教に反情を有する姪女チンチーを煽動して、一日、孕婦の狀を爲し、祇園の法席に至り、衆中に立ちて叫ばしめて曰く、此腹中の子は誰か知らん、彼説法者のものなるを、群衆の顔面に疑惑の色浮びし時、一陣の風吹き來りて、彼女の衣を披き、忽ちその計を暴露せしめたり。又舍衛城の長者徳護なるものが、火坑と毒飯とによりて、佛陀を害せんとせるも、此

時の事にして、彼亦一たび佛陀の風采に接し、其德音に浴するや、忽ちにして懺悔の頭を垂れ、爾來大に佛教を擁護するに至れりとぞ。

意義の如何はいづれにせよ、佛陀上天の傳説は、佛教文藝上甚だ注目すべきものにして、此傳説に關係ある經典の數甚だ多し。地藏菩薩本願經は、忉利天上の説法に擬せらるゝもの、佛昇忉利天經、像造功德經、造塔功德經等は、皆前述の事跡に關係を有するものにして、等しく、皆此時の説法に擬せらる。

第十節 教團分裂及び其回復

成道第九年佛陀拘陔彌城に夏坐しつゝありし時、一比丘の戒を犯しつゝ、之を知らざるものありき。諸比丘中或は之を犯せりと爲すものあり、或は犯さずと爲すものあり、互に黨同を作して、教團二分し、紛々として是非を定め難く、和合乃ち破れたる。佛陀是に於てか一方に對して、戒を犯しつゝ犯さずといひ、懺悔を爲さざるの不可を説き、他方に對して、謙讓抑損、他の失を擧ぐるなかるべきを説き、諄々として、水と乳との如く和合せば、佛法を利益し、安樂ならしむべきを以て諭し、尋て是等を一

所に集め、長壽王の本生を説きて曰く、往古伽奢國に梵施王なるありき。故なくして隣國拘薩羅の長生王を襲撃し、其地を奪はんとせり。長生地の爲の故に徒に其民を賊ふを悲み、妃一人を伴ひ、國を出て、隱遁の世を送り、やがて王子を擧げ、長壽と名け、長ずるに及び、之を他郷に學ばしむ。偶々梵施王隠れたる長生を發見し、後難なからしめんが爲に、妃と共に之を殘殺し、王子を求むること急なれども、遂に之を得ず。王子之を聞き、竊に父母の死尸を收め、厚く之を茶毘して、後服を變じて梵施王に事へ、其親任を受けて、侍者となり、一日王に伴ひ遊獵す。王疲倦して眠る。王子宿怨を追想し、刀を以て王の首に加へんとす。時に父王臨終に際して遺訓せる、怨を以て怨に報いなば、怨遂に絶えず、唯無怨のみ、獨り怨を除くの語を思ひ起し、刀を收む。王驚き覺めて、事の尋常にあらざるを知り、之を問ひて、其故を詳にし、王子の忍辱なるに感激し、遂に父王の故地を還し、王女を娶はし、其後兩王の交情甚だ密なりき。斯の如く怨仇ある兩王の和合して父子の如くなりし所以のものは、唯長壽王の忍辱に因る。汝等出家して道を修むるもの、同一師に就き同一に學びつゝ、如何ぞ鬭諍を事とするぞ。

斯の如き慇懃の訓戒をきつゝ、彼等猶曰く、世尊よ唯自ら安住せよ。如來は是れ法主なり。斯のごとき事に關知すべからず。我等の鬪諍は我等自ら處理せん。佛陀是に於てか、彼等をして反省によりて自ら正に歸らしめんとし、去りて般那曼闍寺林に至り、村人の設けたる茅舎に就きて、第十雨期を送る。阿菟樓陀、難提、金毘羅の三釋子あり、極めて能く和合しつゝ、行道す。彼等三人の行乞するや、早く歸るものは、床を敷き、水を汲み、洗足器を出し、食に残りあれば、器に盛りて足らざるものゝ爲に之を存し、食し終れば室に入りて靜坐し、後れて歸るものは、食の足らざる時は、前の残れるを食ひ、餘りあれば淨地又は水中に瀉き、食し了りて後、床席を收め、洗足器、水瓶を擧げて、食室を掃灑し、亦室に至りて靜坐し、斯の如くにして互に精進に行道せり。佛陀甚だ之を讚嘆し、是眞に僧伽なりとて、自ら亦雨期を茲に送る。時に鬪諍比丘中に過を悔いて懺悔し來るものあり、佛陀彼等を集めて、獨行せる野象を指し、適意の朋友なくんば却りて獨處すること、彼象の如くすべしと説き、此時須達長者、阿難を介して佛の歸園を求めしかば、即ち彼等を伴ひ、祇園に還る。一旦破れたる教團の和合、今や回復して更に間隙なきに至れり。是全く佛陀の誘道其宜にかなへるが爲なり。四

分律の拘、膜彌健度、五分律の第四分第二羯磨法下、及び中阿含經七十は此時の事跡を傳へ、長壽王因縁は甚だ有名なるものにして、之を傳ふる典籍數ふるに違あらず。提婆が始めて不平を抱くに至れるは、拘、膜彌安居の時にして、彼は安居の席を立ち、衆に先ちて王舎城に歸りしといふ。思ふに彼が不平を起せる遠因は、此時なりしにあらざるか、少くも、彼は鬪諍比丘の中に加はりしものならざるか、若し然らば、彼の自立の原因頗る遠しといふべし。或はいふ、此時の鬪諍は、目連の不平に基つき、阿難之に退居自省を勸むれども聽かず、和合爲に破れたるなりと。此説の基つく所を知らず。

第十一節 阿難常隨の弟子となる

佛陀の鉢を持して、其後に隨ひ、給仕奉事するもの、常に一定せず。中には、佛意に反して其好む所に行かんとするものあり、或は鉢を覆せるものあり、往々にして佛陀の煩を爲せり。佛陀今や漸く老境に臨み、常隨昵近の弟子を要するに至しかば、此因縁を以て、大衆を會して、其任に當るべきものを求む。舍利弗、目連先づ自ら薦め、其他八

十の羅漢皆自ら其任に當らんとす。佛陀皆之を辭せり。是に至りて、大衆薦むるに阿難を以てす。佛默然として之を許しぬ。時に阿難、世人の佛陀に供養せる衣食を、よし佛陀の賜ふことありとも、之を辭するを得ん、之に反して我得たる衣食を、佛陀に捧ぐることを得ん、我不在の時の說法を、我爲にのみ再說せらるゝを得ん等の三願(又は六願或は八願)を提出し、是等にして聽かれなば、喜んで常隨の弟子たるべしとの意を述べたり。此敬虔謙讓なる願意素より拒絕せらるべくもあらず、即ち爾來呢近の弟子となりて、影の形に隨ふが如く、常に佛後に隨ふこととなりしなり。阿難が佛滅の後、頭腦中に臆藏せし經を誦出することの大任に堪へ、結集の功を全からしめたるは、全く之が爲にして、彼が聞持の力は、能く佛陀一代の說法を臆藏するを得しなり。

彼が常隨の弟子となりし年時不明なりと雖も、有部律毘婆沙に、二十年中の說法を阿難聽かずといひ、南傳本生經、長阿含經三、中阿含經八、泥洹經下等に、阿難の語として、佛に侍する廿五年の句あるより見れば、蓋し成道第廿年、佛陀五十五歳の時なりしならん。此時の阿難の年齢不明なりと雖も、或は彼を以て、羅睺羅と同じく、佛成道

の年に生れ、八歳にして出家し、出家の日に、白四羯磨具足戒を受けたりとの説あるに徴し、其他種々の狀況より推究するに、二十乃至廿五の壯年なりしが如し、彼が爾來二十五年間、常に佛邊に侍し、行道必ずや他に超えたるものありけんにも關らず、又佛の滅後、結集の際に、主要なる任務を果せしにも關らず、未離欲の非難あるのみならず、大迦葉の爲に四失七過、又は九過を數へられ、大衆の前に懺悔せりの傳説ある所以のものは、思ふに佛滅を悲みて涕泣自ら禁へざりしが、如何にも羅漢に不相應なりしより、案出せられたるものにあらざるか、最も古傳なるべしと思はるゝ南傳大般涅槃經に、未離欲のものは、大に涕泣し、已離欲のものは無常の理を知るが爲に、情を抑へたりといふもの、以て徴とすべし。

不明なる佛傳中、尤も不明にして、何等の編年の傳記を爲し得ざるは、實に阿難が常隨たりし間なりとす。蓋し此間は、佛陀の一生中、極めて無事平安の時たりしなり。此時や、説くべき法は已に盡く説き、歸依すべきものは已に悉く歸依し、布教の區域自ら一定して、この以上の變化を來すべき餘地を残さず、能動もなく、反動もなく、極めて坦々たる大道の如く、佛陀は從來の布教區域を交互巡化し、殊に祇園と竹園との

間を往復し、而して尤も多く祇園精舎に止住せるものならん。斯くて、餘生を極めて無事に過すべかりしが、第三十七年に至りて、提婆の自立は、俄然として教團中に大動搖を惹き起し、之と同時に政事社界にも幾多の大動搖あり、遂に佛陀最後の八年間に、王舎城の悲劇、舍衛城の内亂、迦毘羅城の覆滅、舍衛城の滅亡、跋耆族の驚惶等の如き大事件、走馬燈の如く現出せり、是蓋し社會組織變遷の大勢より來れる自然の風潮なりしが如し。

第十二節 提婆の自立

佛陀曾て諸弟子を率ひて、拘陔彌城に安居せることありき、來りて僧伽に供養する民衆甚だ多く、舍利弗、目連、阿難、阿菟樓陀、跋提、金毘羅等の諸大弟子、皆厚く供養せられたれども、獨り提婆のみ之に與らず、甚だ除外せられたり、提婆心中に思ふ、我身は刹帝利姓にして、佛陀の從弟たるのみならず、解も、行も、敢て他に劣らず、而して獨り輕賤を蒙る、何ぞ堪ふるを得んや、佛陀の教團を去らんとするの意あり、乃ち獨り先づ王舎城に還り、事を以て衆樂太子(阿闍世)と同じに見え、意氣投合して、篤く其歸

依を受けたり。

五分律の傳ふる所によりて、彼が自立の因縁狀況を叙せん、出家諸釋の中、六人は漏盡きて阿羅漢を得たれども、阿難は佛に侍りて諸漏を盡さず、提婆一人は何の獲る所なかりしかば、甚だ羞耻して、神通を得んとして、乃ち佛に就て受學し、安居の間に之を得て、王舎城に還り、太子を化せんが爲に、變じて小兒となり、指を嚙へて仰ぎ臥し、太子を驚喜せしめて、其師事を受け、種々の供養を得たり、是に於てか遂に自ら量らず、便はち徒衆を招引畜養せんと欲し、佛陀が王舎城に還り、耆闍崛山に住するや、自ら衆僧を領し、自己の主義に従て、之を統理せんを請ふ、佛陀之に論すらく、舍利弗、目連だも、猶徒衆を領する能はず、況んや汝愚癡の者をや、是に於て忿恨の心を生じ、惡心を以て佛に向ひ、又舍利弗、目連に向へるを以て、悉く神通を失ひ、全く佛陀に背き去りて、その所住伽耶山に還り、別に教團を組織し、遂に太子を勸誘して、父王を殺して王位に即かしめ、自ら佛陀を殺して、其位置を奪はんと計り、太子を説きて曰く、「新王、新佛、摩伽陀に於て共に道化を弘む、亦善からずや、太子孝心篤く、初は之に同ぜざりしが、遂に其巧言に惑ひ、父王に對して殺意を生じぬ、王其惡心を息めしめんと

し位を遷りて之に與へ之を拜して王と爲し阿闍世と號せり。登位の後、五欲の樂に耽りて、殺意暫く息みしも、少時の後遂に事なくして、父王の命を害しぬ。是に於てか、提婆佛陀を殺さんと計ること三たび、初は阿闍世王の大衆を放ちて、佛を踏殺せしめんとして成らず。次に佛を識らざる一人の凶人を求めて、貨を以て誘ひ、刀を以て殺さしめんとして、亦成らず。尋て二人を募り、又四人を募り、乃至三十二人に至りしが、皆成らず。最後に自躬ら之を果さんとして、嶮山に上り、佛陀が山下を經行するに乘じ、大石を下して、之を害せんとせしが、亦成らず。僅に佛の足指を傷けて、出血せしめたるのみ。斯くて三たびまで企てしも、遂に其志を遂げざりしかば、目的を變じて、和合僧を破らんとし、佛陀及び諸比丘が種々に教誡呵責せしに關らず、遂に一心一學、水と乳との合せるが如き和合僧中に鬪諍あらしめたりと。

以上専ら行はるゝ傳説なりと雖も、此中には頗る貶黜の意味あるが如し。(一)何の獲る所なく、僅に神通を得て、阿闍世太子を迷はせたりといふ點。(二)太子をして父王を殺さしめたりといふ點。(三)三たび佛陀を害せんとせりといふ點の三者は、恐くは精神的の意味を具體化せるものならん。彼亦人傑なり、資性豪邁にして、自ら守る所頗

る固く、教團中に重きを爲せるものゝ一人なりしや疑なし。彼は教團の衆僧が優柔安逸にして、自制力に乏しきを慨し、嚴規を以て之を緊束せんと欲し、佛に向て、自ら徒衆を領せんと請へるものゝ如し。其嚴規とは、南傳に據るに、比丘たるものは、(一)樹下石上を住居とすべし。(二)糞掃衣を著くべし。(三)招請に應じ、若くは精舎に供養せられたるものを飲食せずして、須らく戸々に就きて行乞すべし。(四)肉食すべからずといふもの。是なり。佛陀之に對して曰く、若し之を守らんとするものあらば、之を守るを妨げずと雖も、必ずしも悉く之を守るの要なし。幼者又は弱者の如きは、之を守り得ざるべし。樹下なると、室内なると、又糞掃衣なると、供養せられたる衣なると、又肉食なると、肉食せざると、いづれも垢濁を離るゝことに何等の關係なし。衣食住の如きに至りては、其地々々の風習に従ひ、沈溺に陥らざる限りは、凡て自由なるべし。一律を以て之を規せんことは、却りて正道涅槃に妨げあらん。佛教の目的は、正道涅槃にありと、提婆是に於てか、遂に佛陀に背き、別に新精舎に住して、新宗を説く。其威容言動、佛陀に彷彿たるものあり。加ふるに、阿闍世王の厚き供養布施あり、爲に利養に走るの徒。佛陀の許を去りて、彼の下に屬するものあり。忽ちにして、五百の多きに達

し、教團の和合忽ち攪亂して、甚だ紛糾せりといふは、其真相なるべし。彼が長く師事せる佛陀に背きて、佛陀の許容を得ざる別義を説き、教團の和合を攪亂せしは事實なり。この行爲は肉躰上に於てこそせざれ、精神上よりいへば、全く佛陀を殺さんとせるものなり。是彼が三たび佛陀を害せんとせりとの傳説ある所以にあらざや。而して又阿闍世太子が父王を殺せしは、恰も彼に歸依しつゝありし時なり。甚しく之を追悔して、佛陀に歸依せる後は、遂に比隣の諸國を一統して、頗る賢王の實を擧げたり。提婆に歸依せる時の惡逆の太子は、歸佛の後賢王たり。太子の惡逆に對して、提婆幾分の責任なくんば、あらず。此事實は、是後世をして提婆の自立と太子の自立との間に、連絡を附し、太子の惡逆は提婆の勸誘によるとせらるゝに至りし所以なるべし。斯の如く太子の惡逆を抑制感化するの力なく、而して佛意に背きて、新宗を樹つよし人傑なりしとするも、其主張に幾分の見る所ありしとするも、佛徒の目より之を見れば、また教徒として彼を論ずる時は、何の獲る所なしと見ざるべからず。而して厚く太子に歸依せられたり。是神通によりてのみ、太子を迷はせしと描かるゝ所以なるべし。予竊に思ふ、彼が不平は、或は摩伽陀系統の比丘と、迦毘

羅系統の比丘との間の衝突に基づくにあらざるか。原因の如何はいづれにあれ、彼が自立は、教團成立以來の不容易の大事件たりしや疑なし。

提婆は一時甚だ繁榮の域にありしと雖も、一方には闍王が改心して佛陀に歸依するあり。此歸依供養の檀那を失ひ、提婆派の意頗る動きつゝありし時、他方には舍利弗、目連が苦心慘憺の後、五百の弟子を論して再び歸正せしめたるあり。資性豪邁の提婆も、甚しく其意氣を失ひけん。其後久しからずして、南傳本生經によれば、九ヶ月の後、遂に正に還るに及ばずして死せり。佛典中には、彼れ最後に祇園に至りて、佛陀を刺さんとし、轡に乗じて病軀を驅り、其門前に至り、大に諸比丘を驚惶せしめしが、渴に苦しみ、精舎の池邊に下りし時、生きながら地中に陥没し去り、今や没し已らんとする時、一心懺悔せりとの傳説あり。此傳説が南北兩傳に存するより見れば、甚だ古傳なりしや疑なきも、是亦貶黜の筆ならずんば、あらず。法顯傳及び西域記に據る時は、彼の宗派が、少くも紀元後七世紀の半ばまで、繼續せるを知るよし。其最後が慙れむべきものありしにもせよ、生きながら墮獄せりといふは、頗る當を得ず。是必ずや彼の廢師自立が、宗教上到底許容し得べからざる大罪なるを示せるものなるべ

し。

第十三節 王舍城の悲劇

佛陀と同日に生れたりと傳へらるゝ頻婆娑羅(又は頻鞞娑羅或は萍沙)は、新興國摩伽陀に王として、勢威比隣を壓し、東部の耆伽國を併せて、動もすれば北方の故國拘薩羅を凌がんとする勢あり、諸種の教學此地に勃興し來りて、活潑々地の元氣は、いづれの方面にも横溢し、將來の好運手に唾して得べかりしも、獨り中年を過ぎて子なきを憾とせり、王の夫人を南傳には拘薩羅夫人と爲し、北傳には韋提希夫人と爲す。此二人は、必ず別人なりしならん。前者は大拘薩羅王の女、波斯匿王の妹にして、後者は初め畏提訶國の大臣、後に吠舍離の首長に選舉せられし沙迦羅の孫女、名は婆沙毘なるものなりき。共に其所生の地名によりて呼ばれしなり。既にして頻王、一王子を擧げ、寵愛比なし。是後に阿闍世王として甚だ有名なる英雄なり。阿闍世の母は、北傳には韋提希と爲すを普通とすれど、或は金光拘達の女賢首とする説もあり。緬甸佛傳にはシリサドラーと爲し、南傳には拘薩羅夫人と爲す。

南傳本生經、ツフサ本生序文を案ずるに、頻王の夫人の妊娠せるは、佛陀が竹園精舍にありし時なりき。夫人妊娠の後、王の右足の血を飲まんとするの病あり、占者トすらく、此子は父王を殺して國を奪ふべし。王いふ、我子我を殺すも、何の害かあらん。乃ち右足の血を扶出して、之に與ふ。夫人憂感に堪へず、竊に之を墮胎せんとす。王之を知りていふ、よし、我子に殺さるゝとも、何かあらん。老死は人に免れざる所なり。願はくは兒の顔を見るを得ん。斯くて生誕の後、命名の日に當り、胎内より父王の仇なりとの故を以て、阿闍世(未生怨)の名を與ふ。後日、佛陀が王宮に説法するや、王幼兒を抱き、愛情溢れて聽法に意なからんとせり。佛陀此時、往古に、疑はしき子を養ふに、人目に觸れしめず、死後に即位すべきを命ぜる王者ありし例を引きて、この本生譚を説けりとぞ。此傳を北傳の五分律及び大涅槃經等に對照する時は、發明する所多からしむ。

太子長ずるに及び、故なくして、父王を檻禁餓死せしめて、自立せしかば、拘薩羅夫人憂悶の餘に死し、和氣霽然たりし王家は、一朝にして悲惨極まるものとなれり。阿闍世王治世の第八年に佛陀の入滅ありといふ南傳より逆算すれば、此悲劇の起りし

は佛滅前八年、即ち佛成道第卅七年、佛陀七十二歳の時なりき。佛典の傳ふる所は、一致して太子の惡逆を以て、提婆の教唆に出でたりと爲し、其理由に至りては、或は正法によりて世を御する父王の衰喪の時を待たば、太子の即位期し難きが爲なりとし、五分律三、或は三寶に布施すると甚だ厚き父王の所爲に任さば、遠からずして國藏空竭せんが爲なりとす。未生怨經、前者或は其當を得たらんか、五分律に據れば、太子初は父母の恩の重きを思ひ、提婆の言に従はざりしも、遂に其巧言に迷没して、一時密に利劍を帯びて王門に向ふ。流石に心中の苦悶に堪へざりけん、覺えず戰慄し、地に倒れて復た起つ。門官之を見て、故あるべきを思ひ、之を探りて、其所由を知り、之を衆に議る。衆議或は一切の沙門と、太子と、悉く之を殺すべしといふあり。或は提婆と太子とのみを殺すべしといふあり。或は之を王に白して、其指揮に従ふべしといふあり。遂に之を王に白す。王衆の豫期せるが如く、上の二議を斥けて、更に之を衆議に附す。

群臣王意の存する所を知りていふ、王の太子を立つるは國嗣の爲なり、速に王たらんを欲するが故に、此逆心を懐けるのみ、位を遷りて之に與へなば、其惡必ず息まん。と、此議王の心に合せしかば、即ち位を捨て、太子を拜して王と爲し、號して阿闍世といへりとぞ。如何に王の宏量にして、太子に對する慈愛の深かりしかを知るべし。阿闍世即位の後、殺逆の心暫らく息みしと雖も、猶其位置の堅固ならざるを憂ひ、遂に父王を獄に付す。未生怨經に據れば、此時王從容として曰く、夫れ身は四大のみ、衆生の魂靈其中に寄處し、死して其本に還る。魂靈空しく去れば、之を非身といふ。身をだも尙保たざるに、何ぞ國を常に保たんや。佛の初めて我國に入るや、吾未だ子あざりき。佛吾に問ふに、當來の王を知れりやを以てし、重て曰く、一切無常なり。汝諦かに之を思へと。佛の我を誡しめしは、正に今日にありと。既にして太子獄吏に勅して、其餉食を絶ち、餓によりて死せしめんとす。されど王は此天地の惡を有する子に對して、絲髮の忿心なく、これ佛説の所謂樂なくして、苦のみある世相なりと思へり。韋提希夫人其子に謂ふ、大王の赤心は偏に情を汝に懸け、身命を以て爾の殞に代らんとせると數々なりき。快心の士は後悔せざるなし。今にして父を殺すの志を去れ。されども太子の決意の動かすべからざるを見るや、其許諾を得て、大王に見えんとし、深浴して身を淨め、蜜鈔を身に塗り、以て之を王に食せしめ、須臾の命を延ぶるの計

を爲す、既にして太子之を知りて、母后の獄中に至るを禁じ、獄吏に命じて、其窗牖を塞ぎ、其底足を削らしめ、遂に王命を絶えしめたり。王死に至るまで、念佛して忘れず、斯る運命に接するも、皆是宿殃の所爲なるを知りて、終に惡心怨恨を起さざりき。或はいふ、權禁せられたる母后、遙に彌山に向て、其身の憂愁を訴へ、切に説法を請ひしかば、佛爲に日々目連、富婁那を使はして之を慰藉し、後自ら獄中に臨みて極樂往生の道を説けりと、觀無量壽經は當時の説法と傳へらる。

王舎城の悲劇は、實に斯の如き慘憺を極めたるものなりき。此悲劇に引き續き、闍王と拘薩羅國王波斯匿との間に、激烈なる戰鬪ありしは、南北兩傳の等しく傳ふる所なり。其源因詳ならず、或は此悲劇に際して、波王の妹拘薩羅夫人憂死せしかば、波王大に怒り、夫人嫁娶の際、之に附して摩伽陀に屬せしめたる迦奢の地を沒收せるに對し、闍王亦大に怒りて、伯父王に向つて宣戰を布告せる爲なりとも傳へられ。或は闍王の斗志は、彼を徒爲にして過ぎしめず、即位するや直に拘薩羅領迦奢の地を奪掠せるが爲なりとも傳へらる。其いづれが能動的なりしかを詳にせざれど、此戰爭が迦奢の地に關せるものなることは事實なり。此戰爭や、闍王の勢甚だ猖獗にして

老練なる波王も之に抗するを得ず、三回まで波王の大敗に歸せしが、最後の第四戰に於て、闍王勝に乗じて輕進せしかば、遂に波王の術中に陥りて、生擒せられたり。而して波王は其英資を惜みて、之を殺さず、之を伴ひて祇園精舍に至り、佛陀の面前に於て、迦奢に對する野心を捨てしめて後、之を放還せるのみならず、更に其女ヅジラ川を以て之に嫁し、改めて迦奢の地を摩伽陀に屬せしめたり。或はいふ、波王、闍王の勢に抗するを得ず、其女を與へ、地を割きて以て和睦せるものなりといづれにせよ、雄心勃勃たりし闍王と、寛仁大度の波王の面目は、能く此事跡の上に踴如たるものあるを覺ゆ。

提婆の死と、闍王歸佛の前後は、所傳區々たり。南傳にいふ、王其王子の手の瘡を病めるを悲み、愛情の餘、自ら之を吸ひ、以て其毒を去らんとせるとありき。母后之を見て、過去を追想し、流涕しつゝ、王に語るに、王の幼時、父王が恰も此事を爲せるを以てす。王之を聞きて、父王懇惻の情の切なりしを想ひ、而も慘鼻すべき狀況によりて、餓死せしめたるを悲み、時に恰も提婆が慘憺たる死を遂げたるを聞き、後悔に加ふるに、恐怖を以てし、今や姪女に伍して五欲の樂に耽るの念も失せ、四兵を集めて邊國を

討伐せんとするの念も失せ、佛陀に至りて衷心を披瀝して、其教化を得んとせるなりきと。此年時は不明なれども、必ずや父王を殺せる年か、又は翌年のとなりしなるべく、恰も佛陀が王舎城の名醫耆婆の柰園に、大比丘衆千二百五十人を伴ひ、雨期を過しつゝありし時なりき。闍王既に佛陀に至らんとする志を抱きしも、獨り往くの勇なく、又其志を臣下の前に表白するを欲せず、一夜月明に乘じ、衆に對して、其心を開悟せしむべき沙門婆羅門に至らんとするの意を述べ、侍臣の中に、當時王舎城に教維を張りつゝありし六師外道に至らんを懲慝する者ありき。さはれ、善惡の所行に應ずる罪福なしと主張せる富蘭迦葉、又、未來なく、神なく、證なしと主張せる末伽梨拘舍梨、又一旦死に歸せば、四大に復歸するのみと主張せる阿夷陀翅舍欽婆羅、又、迷悟共に自然のものにして、人力の如何ともする能はざる所と主張せる波浮陀迦旃延、又、一切の問題に對して確定せる答を爲さざりし散若毗羅梨子、又一切智人を以て自任せる尼乾子は、皆闍王の意を傾けしむるに足らざりき。最後に無言の耆婆に向て、其意を述べしめ、彼が佛陀を以て王の所要に應ぜんとするを聞き、直に之を贊し、乃ち耆婆を以て中介者と爲し、即夜寶象に乗り、炬を執りて佛所に向ふ。千二

百五十の大衆を有する柰園の寂然聲なきを見て、或は王を陥れて敵手に與ふるにあらざるかを疑ひ、再三耆婆に向て詭計なきやを問ひしが、遂に鞠躬頓足して佛前に至り、默然四顧して先づ歡喜の心を生じ、其子優陀耶を出家せしめて、他の諸比丘の如く、止觀具足せしめんを希ひ、頭面に佛足を禮して言く、唯願はくば世尊、我が懺悔を容れよ、われ狂愚無識にして、法を以て治化し、偏枉あることなかりし我父を害せり。願はくば世尊よ、慈愍を垂れて我懺悔を受けよ。斯くて後、一座の説法によりて、心懷忽ち開通し、三寶に歸して優婆塞となり、終身五戒を嚴守すべきを誓ひ、明日宮中に佛及び衆僧を請じて歸城せり。此事跡は、長阿含中の沙門果經に詳述せらる。唯此經にては、佛陀に至れる動機甚だ明白ならざるを憾みとす。尤も能く這裡の消息を道破して、摩姑を以て痒處を搔くの感あらしむるは、大涅槃經の梵行品の記事なりとす。曰く、父を害し已るに因て、心に悔熱を生じ、悔熱の故に遍體に瘡を生じ、其瘡臭穢にして近づくべからず。尋て自ら念ず、我今此身已に花報を受けたり、地獄の果報も將に遠からざらんとす。時に其母韋提希、種々の藥を以て、之に傳くるも、其瘡遂に増して降損あるなし。王即ち母に白す、是の如き瘡は、心よりして生じ、四大より

起れるにあらず、如何なるものも能く之を治するを得ず。云云、斯くて暢達の筆力を以て、歸佛の因縁を叙述し、加ふるに、闍王が父を殺せるは、過去の宿報なる趣旨を説ける大文學を以てす、頗る人の心情を動かすものあり。

第十四節 舍衛城の内亂

舍衛城の内亂とは、波斯匿王の子、毘瑠璃が、佛成道第四十年に、父王の不在に乗じて、其兵を奪ひ、自立して即位し、遂に父王をして國外に走り、路上に病死せしめたるをいふ。此事件と迦毘羅城滅亡との間には、密接の關係あり、之を分ち難しと雖も、便宜上より節を分つ事とせり。初め波斯匿王、釋種の女を娶らんとして、其意を迦毘羅城の長者摩訶那摩に通ず、貴姓を以て自任し、其系譜の正しきを自負せし釋種は、心中大に此婚媾を欲せざりしも、拘薩羅國內に住する一強族に過ぎざりし彼等に取りては、公然大王の請求を拒むを得ず、甚だ進退に苦しみ、一族を會して之に應ずるの策を講じ、遂に摩訶那摩を父とし、賤種を母とせる一美女を以て、之に應ずることゝ爲し、嚴重なる儀式を整へて之を舍衛城に送る。波王大に之を喜び、直に第一夫人と

爲し、久しからずして一子を擧げたり、之を毘瑠璃と爲す。彼夫人の名は南傳に従へば、グーサブハ、クハツチャイにして、北傳に従へば末利なりき。南傳には此二人を以て王の二夫人と爲し、北傳には行雨及び末利勝鬘を以て二夫人と爲し、且つ末利を王子長じて後、外氏を省せんが爲、迦毘羅城に至り、高廣嚴淨なる講堂を見て、之に休息して、涼を納れたり。此講堂は、釋種が佛陀の爲に造立せる所にして、新築正に成り、佛を迎へて供を設けんとし、佛に先ちて堂に上るを嚴禁せるものなりき、而して賤種の出なる王子が、之に休息せるを見たり、豈驚き慍らざらんや、乃はち之を罵り、辱かしめ、其足跡を削り去り、履む所の賓階を改修せり、或は王子の去りて後、香乳を以て洗はしめつゝありしを、王子の從者の爲に發見せられたりと爲す。王子此垢辱を深く憤り、且つ自己が釋種の詭計によれる賤女の出なるを知り、他日志を得ば、釋種を滅亡して、其怨を晴らさんと期しぬ。舍衛城に還れば、父王之を聞き、我王家を辱かしむるものと爲し、夫人及び王子の位置を奪ひ、殆んど之を奴婢視し、母子共に宮城外に出るを禁ぜり。佛陀之を聞きて、父王に説くに、過去世に於て賤女を母とせる王

者あることを例證し、奴婢視するを廢して、故との位置に復せしむ。斯くて一旦王家の風波收まれりと雖も、王子の迦毘羅城に對する鬱憤は解くべくもあらず。偶々父王と末利夫人と祇園或は釋種のウルムバと爲し或はメツルヂと爲すに至りて、説法の座に連れる事ありき。王子機乗ずべしと爲し、非望を抱ける惡臣の言に聽き、父王の兵を奪ひ、直に歸城して、自立して王となる。父王夫人と共に園を出れば、人影を見ず、之を問ひて、事變を知り、乃ち走りて其甥に據らんとし、王舍城の門外に至り、俄に迫り、蘿蔔を食し、水を飲み、遂に病死せしかば、阿闍世王厚く之を葬むれりといふ。こゝにも亦異説あり。琉璃王經には、波王の走れるは末利夫人の親里迦毘羅衛にして、其門外に病死せりと爲し、西藏傳には、波王徒步にて釋種の村を出て來りて、末利、行雨の二夫人に遇ひ、末利をして其子毘琉璃の所に至らしめ、行雨夫人と共に王舍城に走れりと爲す。

舍衛城の内亂の年時明ならず、緬甸佛傳には、闍王自立の後三年、即ち佛成道第四十年と爲せども、北傳には、佛滅の年なりしが如き證據あり。中阿含經五十九、及び有部律雜事八に、波王の佛陀に對する言として、我も亦國王、世尊も亦法王、我も亦刹帝利、世尊も亦刹帝利、我も亦拘薩羅、世尊も亦拘薩羅、我年八十、世尊も亦八十の語あり。若し後者に從はく、舍衛城の内亂も、迦毘羅城の滅亡も、舍衛城の覆滅も、悉く同年に起れりとせざる可らず。勿論之を否定すべき理由なしと雖も、如何に變亂の時運なりといへ、斯る大事件が、僅々一年内に起れりと思はれず、是予が南方所傳に從て、成道第四十年と爲す所以なり。

第十五節 迦毘羅城の滅亡

前述の如く、舍衛城の内亂の動機は、大半迦毘羅城討伐の爲なりしを以て内亂跡を收めて毘琉璃王の位置確定するや、王は直に迦毘羅城討伐の軍を催せり。琉璃王經及び四分律四十一、五分律二十一等に據りて、此の戰役の一般を叙述すれば、次の如し。王惡臣の言によりて、嘗て諸釋より蒙れる鬱憤を想ひ、即ち四種の兵を嚴にして、迦毘羅城に向ふ。佛陀之を聞き、路傍の蔭なき舍夷樹下に立ちて之を迎ふ。王佛に向て其理由を問ふ。佛曰く、樂しきは親族の蔭なり。王、佛意が釋種を愍念するにあるを知り、即ち軍を廻す。是の如くすると再三なり。最後に佛陀は、釋種の宿殃の到底滅亡

を免るべからざるを知りて、王軍を止めざりしかば、王軍進んで迦城を討つ。釋種亦四兵を嚴にして、之を逆撃し、箭を以て之を射る。釋種の射に巧なるは、甚しく他族の恐るゝ所なりき。此時一由旬を隔てし遠距離よりの飛箭雨の如くにして、到底進むを得ず。琉璃王の軍甚だ難色あり、時に王をして此軍を催ほさしめし。彼惡臣曰く、釋種皆五戒を持ち、身命を失ふとも、終に物を傷はず。唯進軍せば、能く彼等を滅するを得ん。乃ち進んで城を圍む。釋種勢窮まりて門を閉ぢて籠城す。琉璃王使者を送りて曰く、若し門を開かば免るゝものあるべきも、門を開かずば、遂に一人を赦さず。諸釋之を議す。開かんとするもの多し。即ち多數の意に決し、門を開く。琉璃王、殘忍にも、一切の釋種を殺すべしと令す。摩訶那摩、其義孫琉璃王の前に至り、最後の一願を述べて曰く、願はくは我が水に没して、浮び出るまで、釋種の門を出るを許し、門を出たるものを復害せざれ。琉璃王思ふ、水中にあるは須臾の間のみ、何の不可あらん、之を許せしかば、那摩水中に没し、髪を以て水中の樹根に繋ぎて、遂に復出せず。王其久しきを怪しみ、之を探れば、既に死せるなり。王是に於て自己の所爲に鑑み、喟然として嘆じ、復三軍に令して釋種を殺さざらしめたり。

此戰爭に於て、非常の勇氣をあらはせし釋種は、閃婆なる者なりき。彼奮戰敵を殺す無數、遂に如何ともしがたきに至りて、佛陀に至り最後の訣別を爲し、佛陀の髮爪を得て、婆具茶國に至り、國主となり、閃婆國と名けたりとは、有部律の傳ふる所なり。西域記、西北印度の山國なる烏杖那の條下に、此時通れたる四人の釋種、此地に來りて、四方を討伐して、建國し、其系譜連續して當時に及べるを記すより見れば、此事ありしは、疑なき所ならん。唯此戰役に於て、釋種の放てる飛箭が、一も敵を傷けず殺さず、滿城を屠らるゝに至るまで、之に抗抵せるものなく、手を拱して琉璃王の暴虐に任せ、僅に一人乃至四人の釋種が、同族の規約を知らずして、敵を殺せるが爲に、同族の追ふ所となりて、邊地に走れりといふは、諸佛典の一致して明記する所なるにも關らず、頗る疑ふべしと爲す。是必ずや佛教を信奉せる釋種に破戒の行爲なからしめんとの企圖よりせるものなるべしと雖も、釋種が悉く五戒を持せりとは思はれず、よし悉く佛教を信奉せりとするも、一旦兵馬の間に相見え、既に飛箭を放ちて敵を戰慄せしめたる以上は、一敵をも殺傷せずとのとはあり得べしとも思はれず。奮戰力闘、刀折れ矢盡きて後滅亡せりと見るを穩當とすべし。迦毘羅城は、此時滅亡して

後、遂に今日に至るまで再び國を建てしとなく、古代の一強族の名を佛教の典籍上に止むるに過ぎざれども、釋種全部が、此戰後に滅盡せるに非ず、佛典には、此時滅盡せるが如き意味を以て記述すと雖も、又他には、存續して適當の勢力を保持せるを示す者あり、南北兩傳に現存する佛舍利八分の記傳中に、釋種もあり、拘利種もありしことは是なり、舍利八分の事實なりしことを證すべき屈強の史料は、十年前、尼波羅境內ビブラーワに於て、ベツベによりて、發見せられたる佛骨是なり、此發見は、釋種の故地を知らしむる點に於て、當時既に文字を使用しつゝありしことを知らしむる點に於て、印度研究者の看過すべからざるものあり、殊に佛教研究者は、種々の點に於て、注意を欠くべからざる大發見なりとす。

迦毘羅城滅亡の年代は、他の場合と同じく、是亦不明なり、蓋し琉璃王が自立し、其位置を確立せる後なるべければ、縱令引き續ける事件なりとするも、少くも自立の翌年以後なりしや、疑なし、況んや、再三出軍して其意を達せず、第四回到に辛くも之を討滅せりとの傳説あるより考察すれば、存外に長日月を費やせし者の如し、リス、ダガヅ氏が、何に基けるにか、之を以て佛滅前三年、即ち成道第四十二年と爲すは、稍其當

を得たるものならん、これ舍衛城の内亂に於て、自立して王となりし後二年と爲すものなり、小族なりと雖も、武勇の名高き釋種を討滅せんが爲に、二年の準備を爲せりと推定するは、不當にあらず、予も亦之を第四十二年以後に置くとも、其以前に置かんと欲せざるなり。

第十六節 諸城變亂の結末

琉璃王既に釋種を滅亡して歸朝するや、高樓の上に妙音樂の響を聞き、何人の所爲なるかを問へば、祇陀太子なりき、王大に怒りて之を責罵して曰く、われ怨家を討ち、苦勞萬端なるに、恬然として五欲の樂を爲すとは何ぞ、太子いふ、怨家とは誰ぞ、曰く「迦毘羅衛城の釋子、太子更にいふ、釋子若し敵たらば、我友たるものは誰ぞ、王之を聞きて大に怒り、太子を以て釋種の黨と爲し、これを誅戮せり、祇陀と毘琉璃との關係は、予が調査の限りに於ては、之を詳にするを得ざれども、佛成道の初、須達長者と共に祇園精舍を建立し、爾來信佛の念甚だ厚かりし其人なるべければ、必ずや琉璃王の太子にあらずして、先王波斯匿の嫡子、琉璃王の兄、恐くは末利夫人の所生、北傳が

末利を琉璃の母と爲すに従はずなりしならん。壯年血氣の猛者として、野心勃勃たりし琉璃王は、斯くて父王を追ひ、釋種を滅し、兄を殺して、大國拘薩羅に君臨せり。彼が短き一生は、極めて能く當時の風潮を代表せるが如し。

釋種は、既に琉璃王の爲に、暴虐なる大殺戮を受けて滅亡せり。諸比丘佛に至りて之を白す。佛預言すらく、彼王や、愚癡なり。七日の後、必ずや學人を殺すの罪を受けて、其眷屬大小と共に命を失ふべし。太史の讖も、亦佛言に異らず。王大に畏怖し、餘の苦は猶忍ぶべし。唯火のみは極めて恐るべしとて、船に乗じて、眷屬と共に阿夷河に浮ぶ。七日の期至るや、水忽ち暴漲して船を覆没し、大小老幼悉く溺死せしめぬ。或はいふ、佛の豫言が地獄の火に焼かるべしといふにありしを以て、水上に浮びて之を避けんとせしが、水中より出てし自然の火の爲に、船と人と一時に灰滅せるなりといづれにせよ、王は迦毘羅城を覆滅して後、多くの日を經ずして、水難に遭遇し、夭折せるものならん。老練なる波斯匿、温厚なる祇陀、勇敢なる琉璃の不自然なる最後を遂げたる後の拘薩羅は、久しからずして南方の強たる阿闍世王の併呑する所となれり。釋種の故地も亦同時に同一の運命に遭遇せり。諸城變亂の結末は、斯の如き運命に

終れり。群雄割據漸く終りて、一大王國の現出を見しなり。

以上王舍迦毘羅、舍衛三城の悲劇は、他に文献の徵すべきなく、獨り佛典に於て之を知るを得るのみ。其所傳中には、修飾又は附加あるは疑なきも、佛典の記事は、比較的に正直質樸なるを以て、其骨子の史實たるは、疑ふに及ばざるべし。是等の事跡を綜合して考察する時は、佛教國は悉く不幸なる運命を伴ひ、信佛者は常に悲惨なる最後を遂げしが如く見ゆるも、是唯之を傳ふるものは佛典にして、而して佛典の傳ふる所は、信佛者又は佛教國たるが爲のみ、要するに、自己の手腕を思ふまゝに振はんとするは、當時一般の風潮にして、此目的の爲には、時に父母を殺すをも辭せざりしなり。且つ此頃は精神界の方面に於て甚だ活潑なる變動ありしと同時に、政事上の方面に於ても、萬事悉く改まり、大國大王を現出せんとする風潮天下を動かし、此風潮の爲に無常變遷一層の甚しきを加へ、前述の如く、あらゆる部族あらゆる國民の上に非常の異動ありしなり。斯る殺伐の時期なればこそ、佛陀四十五年間の慈悲忍辱の説法の必要ありしなれ。此風潮を達觀し、變遷の起因顛末を洞察するの明ありし佛陀は、決して是等の動搖の爲に顛倒せず、例せば釋種の滅亡せし時と雖も、之を

悲みて淫せず、却りて之に關して諄々として訓戒の說法を諸比丘に加へたりしなり。

第十七節 法華經の說時

說法の前後によりて教義の淺深を分つの説は、蓋し法華經に始まるを以て、成道四十餘年の說法と傳へらるゝ此經の說時に關して、一言の要あるを信ず、此經は、初は靈山にあり、次に虚空に昇り、後復た靈山に還りての二處二會の說法と傳へられ、無量義經を以て序と爲し、觀普賢行法經を以て結と爲すとせらる。而して無量義經は、遠からず涅槃に入るべき時の說法にして中に四十餘年未顯眞實の語あり、法華經には最後の賜與の語あり、且つ、其會座に阿闍世王の在るより見れば、少くも王舍城の悲劇を歴て、闍王が歸佛せる後ならざるべからず、斯くて、菩提流支の法界緣性論には、之を第四十二年の說法と傳ふ。是や、其當を得たるものなるべし、但し第四十二年といふにつきて、注意を要するものあり、何ぞや、若し佛陀の說法を以て、五十年に亘れりとせば、四十二年は即ち佛滅前八年となり、若し又四十五年なりしとせ

ば、佛滅前僅に三年となり、其間に大なる徑庭を生じ來る。自ら此二説を生ずとせば、佛滅前八年説を取るべきか、三年説を取るべきかの問題隨て起らざるを得ず、之に對して、天台大師に靈山八歲說法華經の説あり、又佛陀七十二歳の說法なりとの説あり、傳教大師にも亦如來生年七十一歲說無量義經の説ありと雖も、予は斷然之を斥して、佛滅前三年説を取らんとす。其故何ぞ、法華を以て八年の說法と爲すは、單に說法五十年を確定説と爲して、第四十二年より算出し來れるものなるべく、又七十一歳の說法といふは、更に八年より算出し來れるものに過ぎざるべし、故に若し說法五十年説にして成立せずんば、是等の諸説は、立ろに消失すべきものたらざんば、あらず、且つ無量義經の遠からず涅槃に入るの語が、八年以後を指す者としては、頗る不適當ならざんば、あらず、之に反して、佛滅前三年説を取る時は、是等經典の語句悉く意味を生ずるを見る、何となれば、遠からず涅槃に入る時に臨みて、四十餘年の間未だあらはさざりし眞門を開きて最後の賜與を爲し、二乗を開會し、説くべきものを説き終り、爲すべきとを爲し終りて後、却後三月涅槃に入るべき時の說法たる觀普賢行法經に於て之を結せりと見るは、極めて肯綮に當ればなり。

以上は單に第四十二年の説法と傳へらるゝ點に就て之をいふのみ。果して此説ありしや否やは別問題なり。若し夫れ淨土の觀無量壽經と法華經との前後を争ふが如きは、固と信仰上の問題にして、自家信仰の上より大藏經の教相を判釋する方法に關する疑難なり。之を歴史の立脚地より見るべきにあらず。思ふに、法華經の序説たる無量義經が、四十餘年未顯眞實を標榜し來れるは、偶々此の經が、尤も他經に後れて成立せるを示す唯一の證據に供せらるべきものたり。然るに、之を根據として、立教開宗、教相判釋の用具と爲し、廢立を肆にするに至りて、滔々として説時前後の争論を惹き起し、天台大師が明晰なる頭腦を以て、椽大の筆を振ひ、五時間の教判を爲して以來、一層の大問題となり、爾來教界の龍象を此渦中に投じて、脱するを得ざらしめたる觀あり。予が見解是の如し、敢て古來の名論卓説を是非せんとするにあらず。今日の史的眼光よりせば、勢ひ斯く見ざるを得ずといふのみ。

第十八節 大般涅槃

佛陀入滅前後の事跡を、尤も簡明に傳へたるものは、長阿含の臂頭に位する遊行經にして、これを敷衍して、尤大なるものと爲し、其中に、如來常住無有變易及び一切衆生悉有佛性の二大思想を鼓吹せるものを、大涅槃經及び後分と爲す。又佛の涅槃に關聯して成立せるものゝ中に、道教、赴佛涅槃、摩訶摩耶、中陰等の諸經あれど、史的研究の基礎と爲すべきは、遊行經なり。根本聖典中に於ても、最も古しと思はるゝ長阿含經の臂頭第一が、涅槃後に至り、其前に佛生を加ふに關するものなるに就て、予は嘗て思へり、先づ佛の誕生にてもあるべし、直に涅槃を以てするは、如何にも非歴史的の甚しきにあらずやと、今にして思ふ、是實に自然の順序に従へるものにして、以て此經成立の尤も古かるべきを示して餘りありと、其故何ぞや、佛滅の後、教徒に取リて、思想の中樞となり、忘れんとして忘る能はざりしは、佛滅の記憶なり。最後の呼吸までも、諄々として慈悲の説法を絶たざりし佛陀の音容彷彿として眼前にあり、是教徒の追想し、愛慕し、渴仰して已まざる所なれば、聖典結集に際して、先づ教徒の口に上るものは、此光景ならざる可らず。是最初に此記事あり、此記事に伴ひて、佛生の記事たる大本經を、後に其前に加へたる所以なり。長々しき此一節は、遊行經を

中軸とし、南傳大般涅槃經、北傳般泥洹經等を參酌して、叙述せるものなり。佛入滅の前年、摩伽陀國より恒河を渡りて、跋耆を經由し、吠舍離城に至り、一樹の下に坐す。城中才色の雙美を以て、其名を遠近に馳せし娼婦捺女なるものあり。衣車を莊嚴し來りて佛を拜せんとす。佛諸比丘に告ぐ、比丘たる者は力を見るべし。力を見るときは、寧ろ自ら骨を破り、心を破るとも、終に心に隨て惡を作さざるをいふ。唯力士をのみ多力と爲さず、自ら心を端しくするは、力士に勝ること遠し。われ心と争ふ事多年、心に隨はずして、勤力精進、以て作佛を致せりと、以て形色の美なるが爲に、心を迷はさざるべきを論し、斯くて捺女の至りて佛を禮するや、爲に種々に說法して、三寶に歸依して、優婆夷となり、終身五戒を持するの誓を爲さしめたり。捺女、三歸五戒を受けて後、明日を以て、佛及び僧を供養せんが爲、其園に招請し、許諾を得たり。時に五百の離車等、佛が捺女園に止住するを聴き、即ち相率ゐて、五色の寶車に駕して至る。或は青車、青馬に乗り、衣蓋、幢幡、官屬、皆青きあり。五色の車馬亦皆是の如し。路に捺女が佛を辭して還るに逢ふ。捺女道を避けず、離車等之を責む。彼女曰く、我已に佛を請じ、歸りて供を辦ぜんが爲に、急行し、避るの暇なきのみ。離車等之を聞きて驚き、彼

女をして先請を捨てしめんが爲に、百千兩の金を提供す。女聽かず。之を十六倍す。女猶聽かずして曰く、たとひ舉國の財寶を以てすとも、我は先請を捨てず。離車等各手を振りて、此女の爲に、初福を闕けるを歎陀し、進んで彼園に至らんとす。佛遙に之を見て、諸弟子に對し、自ら心を攝し、諸の威儀を具ふべきを訓誡す。離車等至りて、寶衣を脱して、布施す。佛之に對して種々に說法す。彼等明日を以て招請供養せんを請ふ。佛之を告ぐるに、捺女が先きに請へるを以てせしかば、彼等手を振りて歎じ、塵より起ち、頭面に佛を禮し、佛を逃ると三匝して還れり。明日時到りて、捺女上僮を設けて、佛及び僧に供へ、食訖りて後、手に金瓶を執り、澡水を行ひて後、其園を以て佛を首とせる衆僧に布施せり。金瓶を執りて、澡水を行ふは、當時沙門婆羅門に對して、布施獻納する際に行ふものにして、極めて敬虔なる儀式なりき。或はいふ、佛此時離車等の奢侈に對して、其榮華の久しからざるべきを豫言して、憂色ありきと。

佛陀捺女園より竹林村に至りて、最後の雨期を送る。寶壽正に八十に達し、激しき病を得て、入滅の遠からざるべきを宣言す。此時竹林の地饑饉にして、食を得ると難かりしかば、諸弟子を分ちて、跋耆及び吠舍離の諸地に遣はし、知る所の家に就きて、安

居せしめ、佛陀は阿難と共に此地に安居す。此時佛身の疾甚だ篤く、舉躄皆痛めり。佛自ら念ふ、諸弟子今や皆なし。未だ涅槃に入るべからず。精勤以て壽命を留むるを要す。自ら力むる所甚だ大なり。阿難見て、頗る惶懼し、衆弟子を集めて教令せられんを請ふ。佛告く、衆僧我に於て須つ所あるか。阿難よ、我所説の法は内外已に訖り、遂に未説のものを覆藏せず。若し又自ら我れ衆僧を持す、我れ衆僧を攝すと言ふものあらば、此人は衆に於て教令あるべし。如來は我れ衆を持す、我れ衆を攝すと言はず。豈衆に於て教令あるべけんや。我已に老いたり、年且に八十ならんとす。譬へば故車の方便修治して、動くを得る如く、吾身も亦方便力を以て、少しく壽を留むるを得るのみ。自ら力めて精進して、此苦痛を忍び、一切想を念はず、無想定に入る時、我身安穩にして、惱患あるなし。是故に阿難よ、自ら歸依し、法に歸依すべし。他に歸依するなかれ。自らを光明とし、法を光明とすべし。他を光明とするなかれ。自ら歸依し、自らを光明とすべしとは、何ぞ。阿難よ、内身を觀じて精勤懈るなく、憶念忘れず、世の貪憂を除き、外身を觀じ、内外身を觀じて精勤懈らず、憶念忘れず、世の貪憂を除き、受意法觀も、また是の如くなるを、自歸依、法歸依等といふ。吾滅後の後、能く此法を修行するものあら

ば、之を眞の我弟子、第一の學者と爲す。

佛陀阿難を率ゐて、遮婆羅塔に至りて、背痛を患ひ、阿難をして座を設けしめ、自ら却後三月、拘尸那竭羅に於て滅度すべきを念ふ。此時地大に震動す。尋て香塔に至り、或は大林精舍、一樹下に座を敷き、阿難をして、諸比丘を集めしめて、之に告ぐ。汝等當に知るべし。我れ此法を以て自ら證を作し、最正覺を成ぜり。此法とは、四念處 *The four earnest meditations*、四意斷 *The fourfold Great struggle against sin*、四神足 *The four roads to sainthood*、(或はこゝに四禪を加ふるもあり) 五根 *The five moral powers*、五力 *The five organs of spiritual sense*、七覺意、又は七覺支とも、七菩提分とも *Samskara*、The seven kinds of wisdom、及び賢聖八道、又は八聖道といふ) *The noble eightfold path* をす。汝等宜しく此法中に於て和同敬順して、諍訟を生ずるなかれ。同一師受、同一水乳として、我法中に於て、勤めて受學し、共に光明とし、共に娛樂すべし。比丘等よ、我れ此法に於て、自ら證を作し、十二部經を布現せり。十二部經とは、貫經 *Sūtra*、祇夜經 *Geyā*、受記經 *Vyākaraṇa*、偈經 *Gāthā*、法句經 *Udāna*、相應經 *Nidāna*、證喻經 *Avadāna*、本緣經 *Ityuktaka*、天本經 *Jātaka*、廣經 *Vaiṣṭya*、未曾有經 *Abhūta-dharma*、大教經 *Upadeśa* を謂ふ。汝等宜しく

之を受持し、稱量し、分別し、事に隨て修行すべし、その故如何、如來久しからずして三月の後般涅槃に入るべしと、此說法は極めて注意すべきもの、或は之を以て、佛陀が最後に一代の教説を概括せるものとも見るを得べければ、佛教の教理上、甚だ重要な位置に立つものなり。

佛陀これより末羅種族の路によりて波婆城に至り、工師の子淳陀なる者の園に止り、最後の供養を受け、其利益の大なるを説き、去りて一樹下に、拘尸城の人にして、阿藍伽藍の弟子たりし弗迦婆種姓の稱ならん、の爲に說法し、三歸五戒を授け、更に前んで拘孫河に深浴し、進んで拘尸城外の沙羅雙樹の間に至りて、阿難をして牀座を敷き、頭北面西ならしめ、以て佛法の北方に流布すべきを豫言す。時に雙樹神の篤く佛陀を信ずる者あり、非時の華を以て地に散布し、以て佛陀を供養す。佛阿難に告ぐ、「非時の華はこれ如來を供養する所以に非ず、能く法を受け、能く法を行ずる者のみ、眞に如來を供養すと爲す、斯くて後、佛前にありて佛を扇ぎつゝありし比丘優波摩那を去らしめて、般涅槃せんとす、阿難此の如き鄙陋の小城荒毀の地に於て、滅度を取るなかるべきを乞ひ、他に王舍城、舍衛城、毗舍離城、瞻波城、婆羅捺城、拘賤彌城、阿踰

陀城、德叉尸羅城等の如き、大都あるを以て、白す、佛陀之に對して、往古の大善見王の因縁を説きて後、いふ、今にして過去幾萬歳の古に遡りて、追想憶念するに、我曾て此地に於て轉輪聖王となりしと六度、常に骨を此地に置く、今我れ無上正覺を成じて、復性命を此地に捨て、身をこゝに置き、今より以後、永く生死を絶ち、此後更に吾身を置く所なし、此身は是最後のものにして、此後更に有を受けず。

是に於て、佛陀阿難に命じて、城中に入り、諸の末羅に對して、如來の夜半入滅すべきを告げ、疑あるものをして、最後の教誨を受けて、後悔を残すなからしむ、末羅等、阿難の告を得て、家族を將て、各々白氈を持ち來りて供養し、說法の座に列す。夜に至り、梵志あり、須跋と名く、年一百二十にして、耆舊多智なり、深疑を抱き、來りて阿難に面し、佛を見んを請ふ、阿難佛身の疾極めて篤きを告げ、其最後を勞擾するなからしめんとす、須跋再三之を強ふ、佛兩人の對話を聞き、乃ち引き見る、須跋曰く、世に六師あり、各々自ら一切智と稱して、以て餘の學者を邪見と爲し、其所行を解脱道と爲して、以て他行を生死の因と爲し、互に相是非す、如何ぞ其虚實を知るを得ん、何の師か、果して沙門の稱を得、何の説か解脱の因たるべきぞ、佛告く、我法中に八聖道あり、四沙

門果あり、外道異衆には沙果門あることなし、既に沙門なくんば、亦解脱なし、既に解脱なくんば、一切種智にあらざり、我王宮にありて、未だ出家せざる時や、一切世間は、皆六師の迷醉する所となれり、我年二十有九にして出家學道し、三十有六にして菩提樹下に於て、入聖道の究竟源底を思ひ、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、一切種智を得、即ち婆羅捺國鹿野苑中、憍人住處に往き、阿若憍陳如等五人の爲に四諦の法輪を轉じ、彼等をして道跡を得せしめたり、爾の時、始めて沙門の稱あり、須跋よ、我法獨り能く解脱を得、如來は實に一切種智なるを知るべし、爾の時、須跋更に入聖道の義を問ひ、佛の之を分別するを聞き、又廣く四諦を説くを聞き、即ち其夜に於て、出家受戒して、淨く梵行を修し、現世の中に於て、自身に證を作し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、如實智を得て、更に後有を受けず、時夜未だ久しからずして、便はち佛前に於て、佛に先ちて滅度せり、之を佛陀の最後の弟子と爲す。

時に阿難、長く佛恩を蒙り、學地に在りて、所業未だ成らず、今や佛陀の滅度に入らんとするに遇ひ、悲泣自ら勝へざりければ、佛之に向て、長く佛に侍して、身語意の三行に慈あり、奉侍供養の功の大なるを以て慰め、唯精進ならば、久しからずして成道す

べきを以て勵ませり、爾の時阿難が佛の世に在るや、四方の沙門來りて佛を省すれども、佛滅度の後には、彼等復來らざらん、之を如何すべきぞと問へるに對し、滅度の後と雖も、佛の生處と、初得道處と、轉法輪處と、般涅槃處とは、苟くも信念あるもの、憶念して忘れず、必ず是等の處に遊行して、塔寺を禮敬すべければ、憂ふべからざるを以て告げ、又佛滅の後、釋種又は異學梵志の來りて出家を求むるあらば、直に之を許すべく、彼等に異論あるを以て、少しく稽留せば、則ち本見を生ずべきを告げ、次て虜扈自ら用ふる鬪怒比丘を、佛滅の後如何がすべきと問へるに對し、彼若し、教誡を受けずんば、諸比丘之に對して、與に語らず、與に往返せざるべきを以て告げ、又未だ誨を受けざる女人に對する處置を問へるに對し、相見るなかるべく、若し見なば、之と語るなかるべく、之と語るあらば、自ら我心を檢すべきを以て告げ、又阿難が非法を問へるに對して、轉輪聖王の如くすべきを以てし、且つ塔を起し、香華伎樂を以て供養すべきもの、世に四種あり、如來と辟支佛と聲聞と、轉輪王とは是なりといひ、次て曰く、阿難よ、我が般涅槃に入るを見て、正法こゝに永く絶ゆべしと思ふなかれ、我昔し諸比丘の爲に、戒を制し、又法を説けり、戒と法とは、是汝等が大師にして、此二者ある

は我の世に在るに異なるなし。又阿難よ、我般涅槃の後、諸比丘等各々次第によりて大相敬ひ、姓を呼ばず、名字を喚んで、互に伺察せよ。大衆中に大戒を犯すものあらしむる勿れ。他の細過を窺ひ求むべからず。是に於て、更に諸比丘に對して、疑あらば速に諮問すべきを以て告げ、彼等が默然たるを見て、最後に血涙を以て訓諭していふ。汝等當に知るべし、如來の出世の難きは優曇華の如し。今汝等の如來に値遇するは、如何ぞ徒事ならん。是を以て、汝等放逸なるなかれ。我が正覺を致せるは、唯不放逸により、無量の衆善も亦不放逸によりて得らる。一切萬物常に存するものなく、生死の中極めて畏るべしと爲す。汝等精進に勤行して、以て生死の外に出てよ。これは是如來最後の所説なり。彼遺教經なるものは、此説法を敷衍せるものなり。

説くべき所のものは、既に説き終り、作すべき所のものは、既に作し終り、斯くて佛陀は安庠として初禪定に入り、初禪より起ちて、第二禪に入り、尋て、第三禪、第四禪以上四禪定より、空處定、識處定、不用定、有想無想定、以上四空定を経て、滅想定に入る。時に阿難、阿菟樓陀に問ふに、世尊の已に般涅槃せるやを以てす。阿菟樓陀いふ、未だし。世尊は今滅想定にあり。般涅槃は滅想定よりするものにあらずして、第四禪よりする

ものぞとは、佛の嘗て我に語りし所なり。時に世尊、滅想定より起ちて、還た有想無想定に入り、乃至第一禪に入り、已りて後、更に又進んで、第一禪より、第二禪、第三禪を経て、第四禪に入り、第四禪より起ちて、般涅槃に入り終り。以上の四禪、四空定は、當時の外道の究竟とせる禪定を概括せるものにして、有想無想定は、尤も進歩せる數論が涅槃を此中に求めたるもの。最後の滅想定は、佛敎が當時の一切の外道の上に、一步を進めたるものなり。而して是等禪定の階級が、後に三界説と關聯せらるゝに至りて、四禪定は色界天に、四空定は無色界天に配當せられて、是等禪定の階位に相當する實有の存するが如くに考へられたり。

諸比丘中、未離欲のものは、大に佛滅を悲しみて、如來の滅度何ぞそれ駛きや。世尊の滅度何ぞそれ疾きや。大法の淪翳何ぞそれ速なるや。群生長へに衰へ、世間の眼滅すといへりしかば、阿菟樓陀之を慰めて、有爲のものをして不變ならしめんとするも能はず。生るゝものに死あり、合ふものに離るゝあり。世に常存のものなきは、佛の既に説ける所なりといひ、乃はち阿難をして、拘尸城に入りて、諸の末羅に佛滅を告げしむ。末羅等大に悲泣しつゝ、來りて香華伎樂を以て佛身を供養し、七日の日暮に於

て、佛身を奉ぜる輦を擧げて、幡蓋、香華、伎樂の列を作し、東門より入りて、諸の街巷を經山し、北門を出て、天冠寺に至り、阿難の語に従ひ、佛の遺教に基つき、轉輪聖王の葬法によりて、設備し已りて、炬火を佛薪に加ふ、火燃えず、時に阿菟樓陀いふ、是天意なる間、佛身を見んと欲す、天其意を知るが故に、燃えざらしむるなり、此時大迦葉、道に一尼毘子の手に文陀羅花を執れるに遇ひ、之に問ひて、佛滅以來已に七日を經、この天華は彼處より得たりといふを聞き、大衆悵然たり、一比丘いふ、憂ふるなかれ、世尊の滅度によりて、我等自在を得るにあらずや、彼老常に是を行はずべし、是を行ずべからずといへり、彼老今や則ち亡し、この後は我が所爲のまゝなり、此比丘を、或は須跋陀羅と作し、或は跋難陀釋子と作し、或は摩訶羅と作し、或は又須跋陀羅摩訶羅と作し、且つ此語を聞けるは、大迦葉一人のみにて、他の諸比丘は之を聞かずとも作す、よし、當時早く既に教團中に、或は異議を挿むものあり、或は教團の累を爲すものありしとするも、佛滅を喜べるものありといふ傳説は、後世の作なるべし、大迦葉之を聞きて悦ばず、大衆を督して、天冠寺に至り、重櫛に向て、佛足を禮し、香薪を繞ると

三匝し、偈を以て佛を讚ず、香薪自ら燃え、燃え已りて後、天雨至りて火を滅しぬ、時に波婆國の末羅民衆、之を聞きて、起塔供養せんが爲に、四兵を嚴にして來り、舍利の分配を乞ふ、拘尸國人これを拒絶す、時に遮羅頗國の諸跋離民衆及び羅摩迦國の拘利民衆、毗留提國の婆羅門衆、迦維羅衛國の釋種民衆、毗舍離國の離車民衆、摩竭王阿闍世も、亦各々四兵を嚴にして、來りて、骨分を求む、諸末羅皆之を斥ぞく、諸國王即ち力をして之を取らんとし、拘尸國人亦力を以て之に抗せんとす、時に香姓婆羅門なるあり、衆に説きていふ、諸賢よ、久しく佛の教を受け、口に法言を誦し、心仁化に服して、一切衆生の常に安からんを欲す、何ぞ、佛舍利を諍て、殘害すべきぞ、如來の遺形は以て廣く世に益あらしむべきのみ、舍利こゝにあり、唯分ち取るべし、衆皆善と稱し、香姓をして、之を分ちて八分と爲さしむ、香姓徐ろに進んで、一瓶を以て一石許の舍利を受け、之を八分して諸國の王民に捧げて後、衆に向て其瓶を請ふ、時に畢鉢村人來りて、茶毘處に残れる焦炭を請ふ、各々本國に持ち歸りて、塔を起し、供養せり、斯くて如來の舍利に八塔あり、之に加ふるに瓶塔炭塔を以てし、猶之に加ふるに髮塔ありて、世に十一塔ありきとぞ、舍利八分の傳説は、甚だ有名なり、傳によりて地名

族名に少しく異同あり其詳細を研究せんとする士は、長阿含經四、摩訶摩耶經、大涅槃經後分、十誦律六十、有部雜事三十九、觀虛空藏經、般泥洹經下、南傳大般涅槃經等を對照すべし。

第十九節 說法年譜

南 = Sp. Hardy, A Manual of Buddhism (南方所傳)

緬 = Bigandet, The Life of Gandama (緬甸所傳)

略符 西 = Rookhill, The Life of the Buddha (西藏所傳)

巴 = Rhys Davids, Buddhism (巴利所傳)

○佛陀成道の後、七日間、菩提樹下に入定、七日の後、夢蜜を供養せる二商主に對して、說法ありきと傳へらる。提謂波利經是なり。此經今日に傳はらず。其後七日間、池邊に入定し、還りて七日間、樹下に入定す。此間十二緣起を觀ず。華嚴經は三七日の入定中、菩提道場及び天界の說法なりと傳へらる。

○三七日の後、婆羅捺城鹿野苑に於て、五比丘に對して說法す。轉法輪經是なり。五比

丘弟子となる。是に於て、佛を合せて世に六阿羅漢あり。佛法僧の三寶具足す。

○長者の子耶舎出家す。其父母妻皆三寶に歸して、優婆塞、優婆夷となる。是俗士歸依の初なり。耶舎の朋友四人出家し、次て五十人出家す。

○成道第九月に、楞伽島に遊化し、猶第五年に再びし、第八年に三たびし、前後三回此島に遊化せりとの傳説あり。南、楞伽經は、其說法に擬せらる。

○婆羅捺城に第一雨期を送り、弟子を訓練す。

第一夏後

○耶舎を婆羅捺城に止め、其他の弟子を四方に派遣して傳道せしめ、佛陀自ら摩伽陀國の苦行林に向ひ、三月間滞在し、緬、三迦葉を度して弟子と爲す。三迦葉の弟子千人も、亦皆弟子となる。

○是等の弟子を率ゐて、象頭山に上り、火に關する說法あり。大乘伽耶山頂經は此時の說法に擬せらる。

○三迦葉及び其弟子千人を率ゐて、王舍城に至り、頻婆沙羅王に對して說法す。王即ち歸依す。是國王歸依の初なり。王竹園精舍を建立布施す。是伽藍の初なり。

○滞在二ヶ月の間(緬)に、舍利弗、目連弟子となる其弟子二百五十人も、亦同時に弟子となる。是に於て佛弟子の數、千二百五十餘人となる。○或は舍利弗、目連の出家を、第三年、第四年又は第五年と爲す説もあり。

○歸佛出家する者甚だ多く、王城之が爲に寂寥を現ず、人民の中に、之を喜ばざる者ありき(緬)。

○舍利弗、目連に對する佛陀の信用甚だ厚し、舊弟子の中に平ならざるものあり、佛陀之に對して七佛通誠の偈を説く(巴)。

○舍利弗の叔父拘絺羅、長瓜梵志出家す、阿私陀仙人の甥、那羅陀(迦旃延)も出家す(西)。大迦葉の出家も亦此頃なり。

○父王使を遣はして佛の歸國を請ふ、佛即ち迦毘羅城に還り、父王及び同族に對して説法す、第二日の後、難陀出家し、第七日の後、羅睺羅出家す(緬)○或は佛の歸國を、波斯匿王歸佛の後と爲す(西)。

○摩伽陀國に還るの途、阿菴林下(緬は末羅王の國アヌーピヤ村と爲す)に於て、釋種、拘利種の王族、追ひ到りて出家するもの多し、就中、阿難、提婆、阿那律、優波離の四人は、

後世に名を止むる事大なり(巴)。

○第二の雨期を、王舍城竹園精舎に送り、新弟子を訓練す、

第二夏後

○此年注目すべき事件起らざりしが如し、(緬)は此下に、阿難の誘惑に遇へる事、花賣り須摩那の歸佛せると、及び吠舍離國に於て、ユツギダツタを濟度せるとを述ぶ。されど此の年に起れるものなるや否や、詳ならず。

○第三の雨期を、同じく竹園精舎に送る。

○大乘流轉諸有經は、此年頃の説法に擬せらる。

第三夏後

○舍衛城の須達長者、祇園精舎を建立して、佛及び衆僧に布施し、之を招待す。○或は之を第六夏後と爲す。

○祇園精舎の建立によりて、祇陀太子大に喜び、深く佛陀に歸依す(西)。父の波斯匿王之を聞き、佛陀の稱號の理由を問ひ、その説法に遇ひ、歸佛す(西)○或は此時、王之を淨飯王に報じ、太子の成佛を喜ぶべきを告ぐ、父王之が爲に、使を送りて佛の歸國を請

へりと爲す(西)。

○王舎城の外道、佛法の繁昌を嫉み、之を王に訴へ、法力を摘して優劣を判ぜんとす。舍利弗之と摘力、以て赤眼なるものを服して、出家せしむ。外道等舍利弗を殺さんとす。して成らず、却りて度せらる(西)。

○第四の雨期を竹園精舎に送れるが如し。

第四夏後

○網渡りのウツガセーナなるものを度す。法句經の第三百四十八偈は、此時の説法なりといふ(巴)。

○此年、佛陀の居處詳ならず(西)○第二、三、四の三年間、靈鷲山頂にあり(僧伽羅刹經)。

○菩薩道樹經は、此年の説法に擬せらる。

○吠舍離城大林精舎にありし時、迦毘羅、拘利二城の間に水争あり、佛陀之を調停せんが爲に、空を翔りて之に趣き、還りて大林精舎に第五の雨期を送る(巴)。

第五夏後

○大林精舎に雨期を送りつゝありし時、父王の病を聞き、復た迦毘羅城に還る。父王

七十九或は九十七歳にして崩ず。佛同族と共に之を荼毘して後、大林精舎に還る。父王につぎて、跋提立つ。

○波闍波提及び耶輸陀羅、其他の釋種の貴女等、出家を請ふ。佛許さず。阿難切に之を請ふに至りて、初めて許す。これ比丘尼の初なり(巴)。

○吠舍離城に於て、初めて邪淫戒を制す。是制戒の初なり。但し、制戒の年次に異説多し。或は第一年、第四年、第八年、又は第十二年、第二十年等と爲す。

○拘跋彌の摩拘羅山に退きて、第六雨期を送る羅刹經(緬)○但し(西)は此年祇園にありと爲す。

第六夏後

○摩拘羅山を去りて、王舎城に還り、頻王の第一夫人クシエマーを度す(緬)。

○或は祇園精舎の建立を、此年と爲す説もあり。又(西)は此年祇園より迦毘羅城に還ると爲す。

○王舎城の長者善賢の子、樹提伽なるもの、栴檀の鉢を高く竿上に懸け、神通を以て取るものに與ふべしと聲言す。外道等之を得んとして能はず。佛弟子中に、神通によ

りて之を得たるものあり、佛大に其非法を責め、之を粉碎し、爾後通力を現はすを禁ず、外道等之に乗じて誹謗す、頻王之を佛に訴ふ、佛之が爲に、四月の後、舍衛國に於て、自ら神通を現はすべきを約し、日を刻して外道を破り、種々の神通を現はして後に上天す、(巴)〇但し(西)には、之を第十六年と爲す。

〇拘睺彌城の優填王、長く佛を見ざるの故を以て、病む、群臣之を憂ひ、佛像を刻して見す、波斯匿王之を聞き、亦佛像を刻す、(增一阿含經二十八)。

〇切利天上に滞在する三月、母后の爲に阿毘曇を説き、第七雨期を送る、下界にては、目連佛に代りて説法し、須達長者衆僧を供養す、舍利弗舍衛國に於て阿毘曇を説く、是阿毘曇の初なり、後去りて僧伽舍に雨期を送る(緬)。

〇造像功像經、佛昇切利天經、摩訶摩耶經、地藏菩薩本願經等は、上天に關する説法に擬せらる。

〇或は佛の歸國して父子初て相見せるも、難陀、羅睺羅及び其他の諸釋の出家せるも、此年なりとなす(西)。

〇此の年王舍城に於て盜戒を制し、吠舍離城に於て殺戒を制し、婆求河邊に於て妄

第七夏後

〇切利天上より舍利弗のある僧伽舍に下り、人民の請によりて祇園に還る、外道大に嫉む(緬)。

〇外道等、姪女チンチーを用て、佛の名聲を墜さんとするを謀る(巴)、德護長者の火坑毒飯によりて佛を害せんとせるも、此頃ならん(西域記)。

〇拘邪尼國に於て婆陀和菩薩等八人の爲に、般舟經を説く(十二遊經)。

〇迦毘羅城に近きサンスマール岩に於て、第八の雨期を送る(巴)。

第八夏後

〇夏坐より起ちて遊化し、ナクラの父母、マーガンヂャーの父母、緬にはガルリト國のマガリア夫婦を度し、請によりて拘睺彌に至る(巴)。

〇拘睺彌の地外道多くして佛に歸するものなく、誹謗の聲四方に起る、國王の第一夫人、前に佛陀に嫁せんとして失敗せしを憤り、竊に厚く外道に布施す、阿難他に移らんを乞ふ、佛忍辱すべきを説き、第九の雨期を此地に送る(緬)。

〇此年の遊化の狀況甚だ不明なりしと見え、十二遊經には、柳山に於て純真陀羅王

の爲に説法せりと爲し、僧伽羅刹經には、鬼神界ありしと爲す、屯真陀羅は賢愚經二に據れば、越祇國王なり。

第九夏後

○拘跋彌にて夏坐の時、瑣細なる因縁によりて和合僧破れ、兩黨共に佛陀の訓戒を用ゐず、唯釋種三人のみ聖訓を奉ず、佛陀彼等をして自省以て正に歸らしめんとし、獨り去りて、パトリレーヤカ林に趣き、第十の雨期を送る。林は三釋の住せる所なり（緬、此時の不和合は、マーガンヂャーが佛に對して不平を抱けるに基つく（巴、中阿舍經、七十四分律の拘跋彌健度、南傳律大集第十章、參照）
○此年の遊化も不明なるものあり、十二遊經には、穢澤に於て陀掘摩の爲に説法せりと爲す。

第十夏後

○衆悔い、佛處に來り懺悔す。
○須達長者阿難によりて佛の歸園を請ふ、佛諸弟子を伴ひ、舍衛に還り、久しからずして、又摩伽陀に往く（緬）。

○王舍城附近のダクシナギーリ村に於て耕作下種の譬喩によりて、頗羅墮婆羅門を度し、第十一の雨期をこゝに送る（緬及び南）。

○羅刹經には、佛此時枝提山中にありしと爲す。

○耆闍彌山及び竹園精舍に、説戒堂を建てたるは、此年頃なるべし、又王舍城に於て、十七群童子の因縁によりて、年二十に満たざれば大戒を授けずとの制を立てたるも、此頃なるべし、彌山の説法たる大方等如來藏經は、此年のものに擬せらる。

第十一夏後

○雨期を過ぎて後、舍衛に還り、サチアピア城に止る（巴）。

○サチアピアに近きゾーランヂャー城に、第十二の雨期を送る（巴）。

○此年の遊化も、亦不明なり、羅刹經には復た鬼神界にありと爲し、十二遊經には恐懼樹下に、彌勒の爲に本起經を説けりと爲す。

第十二夏後

○雨期を過ぎて後、大遊化を試む、マンタラ（巴は南の方マヘーシヴラブラと爲す）に至り、轉じてガヤガチ（巴は婆羅捺と爲す）吠舍離諸城を巡化して、舍衛城に還る（緬）。

○十八歳の羅睺羅に對して、大羅睺羅經を説く(緬)。

○舍衛城に近きチャリヤに至りて第十三の雨期を送る(緬)。

○此年の遊化にも、甚しき相違あり。羅刹經は摩伽陀國閑靜處にありしと爲し、十二遊經は、此年再び迦毘羅城に還りて、父王の爲に説法し、釋種八萬四千人を度せりと爲す。中本起經には、佛母摩訶波闍提大愛道の出家を、此年と爲す。

第十三夏後

○雨期の後、舍衛國に歸る。祇園に第十四の雨期を送る(羅刹經及び緬)。

○羅刹經には、此年も復た鬼神界にありきと爲す。佛祖統記には、毘耶離城菴羅樹園に於て、維摩經を説けるは、此年なりきと爲す。

第十四夏後

○舍利弗、五百の僧衆を率ゐて、佛邊を辭して別林に住す。佛、年二十歳に滿ちし羅睺羅を度し、羅睺羅經を説く(緬)。

○迦毘羅城に還り、尼拘律陀林に、第十五の雨期を送る(羅刹經、緬及び巴)。

○佛祖統記には、竹園の説法たる思益梵天所問經を、此年の説法に擬す。

第十五夏後

○雨期を過ぎて後、釋種の長者摩訶那摩の四間に應じて、説法する所ありき(巴)。

○拘利城の善覺長者、佛が耶輸陀羅を捨てたるのみならず、提婆を出家せしめたるを怒り、甚しく佛を誹謗し、生きながら地中に陥没す(緬)。

○祇園精舍に還り、一天神の四間に應じて、法施の財施に勝れたるを説く(緬)。

○上足の弟子に對し、供養を受けて説法するを許す(緬)、之を各地に派遣して、大傳道を爲さしむ(緬)、説法の規定頗る嚴なり(四分律二十一)。

○舍衛國を去りて、アいらギーに於て、問答によりて、小兒を食ふ夜叉を伏し、第十六の雨期をこゝに送る(緬)。

○佛祖統記には、祇園の説法たる勝曼經、頹山の説法たる楞嚴三昧經、甚深境界鷲峰の説法たる金光明經、南海の濱楞伽山頂の説法たる楞伽經を以て、此年のものに擬す。

第十六夏後

○アいらギーにあり(緬)、此年の遊化は不明なり、羅刹經には、迦毘羅城に還れりと爲す。

す。又佛祖統記には、此の年より第二十年に至るまでの間に於て、祇園の説法たる首楞嚴經、摩竭國界普勝講堂の説法たる瓔珞經、嶺山より欲色二界の中間の大寶階に上りての説法たる大集經を挿入す。

○アラーギを去りて、第十七の雨期を、王舍城竹園精舎に送り、此時、耆婆の姉妹にして、頗る歸佛供養せし美女シリマーチの死に關して説法ありき(編)。

第十七夏後

○雨期の後、至る所に説法して舍衛に歸り、久しからずして後、アラーギに還り、脱せる牛を追ひ、飢と疲とに迫られつゝ、猶法座に列せんとて至れる賤民を遇する甚だ厚く、食を進めて後に説法す(編)。

○舍衛城に近きチャリリヤに於て、第十八の雨期を送る(編)。

第十八夏後

○チャリリヤの夏坐中、歸佛の念篤かりし我女を、誤りて殺せる織匠の爲に、慰藉の説法あり(編)。

○王舍城竹園に還りて、第十九の雨期を送る。

第十九夏後

○雨期の後、至る所に説法しつゝ、摩伽陀國を巡化し、一時、係蹄にかゝれる鹿を見て、惑んで之を放ち、其近傍の樹下に入定し、大に之を怒りて、佛陀に向て箭を放たんとせる獵師に對して、説法し、彼及び其家族を悉く歸佛せしめたり(編)。

○羅刹經には第十七、第十八の兩年王舍城にあり、第十九年柘梨山中にありと爲し、南方所傳は、前述の如く、恰も之と反對に、第十七、十八の兩年はチャリリヤ山中にあり、第十九年摩伽陀國にありとなす、いづれにか誤りあるべし。

○舍衛城に第二十の雨期を送る(編)。羅刹經には、王舍城に夏坐せりと爲す。

第二十夏後

○此年阿難を以て常隨の弟子と爲す。時に佛の齡正に五十五歳なり。西には、阿難の常隨の弟子たりしを、佛陀五十歳の時と爲す。

○第二十一の雨期を、チャリリヤに近き林に送り、此間、鴛堀摩羅なる大盜を度す。彼久しからずして入滅せり。

第二十一夏後

○此後第四十四夏の後に至るまで、南方所傳にては殆んど不明なり。要するに、阿難が常隨の弟子となりしより、最後の年に至るまで、主として祇園と竹園との間に遊化し、極めて平穩無事なりしが如し。

○僧伽羅刹經には、第二十一年以後、四夏坐を連ねて、柘梨山中にあり、鬼神界に於て止住し、餘處を經歷せず、第二十五夏より十九年間、餘處を經歷せずして、舍衛國に夏坐せりと爲し、分別功德論には、舍衛に在ると廿五年と爲す。

○外道等が、佛教の隆盛なるを嫉み、孫陀利女を用て苦肉の計を爲せるは、第二十年頃なりしが如く、毗舍伽女が、祇園の東に於て東寺を建立布施せるは、第二十五年頃なりしが如し。又須達長者の女が、郁伽長者の男に嫁し、女の篤信によりて郁伽の家族を悉く歸佛せしめたるも、佛陀が祇園にありし間なり。

○佛祖統記には、第三十夏後の十二年間に於て、鷲峯に大品、天王問、光讚の諸般若經を、祇園に金剛般若經を説けりと爲す。

第三十七夏後

○佛陀七十二歳の高齡を以て、王舍城竹園にありし時、提婆不平あり、別に一派を開

く、阿闍世太子の供養を得て、大に榮え、太子に勸めて、父王を廢して自立せしむ。父王獄中に餓死す。拘薩羅夫人も亦憂死す。夫人は波斯匿王の妹なり(巴)提婆初め拘膜彌にありし時、民衆が他に供養して、我のみを度外視するを怒り、去りて王舍城に還り、太子よりヤウシサ山寺の建立布施を得、後に分派して、井ツチ國の五百羅漢を引率してガヤシサ寺に住し、阿難を我黨に引入せんとして成らず。舍利弗、謀を以て五百人を歸正せしめたり(緬)。

○韋提希夫人、其子阿闍世王の惡逆を悲み、之を佛に訴へ、慰藉を求む。佛爲に極樂往生の道を説く(觀無量壽經)。

○拘薩羅國の波斯匿王大に怒り、阿闍世王との間に戰爭あり。最後の大勝によりて、波王、闍王を生擒して、祇園に至り、佛前に於て之を解放し、其女を以て之に娶はす。此戰爭の源因は、闍王が拘薩羅領たる迦奢國を私せるに坐す(緬及び巴)。

○羅刹經には、此年祇園精舍にありしと爲す。

○提婆の死は、此年なりしが如し。

第三十八夏後

○阿闍世王後悔の念に堪へず、六師外道に就て道を問ひ、後に耆婆の勸によりて歸佛す(長阿含沙門果經、大般涅槃經梵行品)闍王歸佛の年月詳ならず、假に此年と爲す。或は佛滅の年なるが如くに見ゆ(阿闍世受決經)佛陀闍王が惡逆を犯せるを以て、羅漢位に入るべからざるを説く。

第四十夏後

○拘薩羅國の毘琉璃王子、其父波斯匿王が釋種村中にあるに乘じ、自立す。父王摩伽陀國に遁れ、阿闍世王に依らんとして病死す。琉璃王の自立を(西)は父王八十歳の時と爲し(中阿含經、有部律)にも之を立證する材料あり(緬)は闍王自立の後三年と爲す、今後方に從ふ。

○此年佛の所在不明なり。羅刹經には祇園にありしと爲せども、蓋し一所に止住せるにあらざるべし。概していへば、舍衛城附近なりしが如し。

第四十二夏後

○琉璃王、其宿怨を報ぜんが爲に、迦毘羅城を攻め、三たび其志を得ざりしが、此年遂に之を滅す。釋種の長者摩訶那摩、同族の命に代りて池中に入りて死す。琉璃王甚だ

慚愧す。迦毘羅城滅亡の年、不明なり(巴)が佛滅三年前なりといふに從ふ(琉璃王經)此戰爭の時、僅に身を以て免れたる釋種あり。

○琉璃王歸城して、兄祇陀を殺し、七日の後非業の死を遂ぐ(西域記及び西)。

○羅刹經には、此年も佛祇園にありしと爲す。

○法華經は、此年の說法と傳へらる。

第四十三夏後

○佛陀第四十三の雨期を祇園精舍に送りて後、摩伽陀國靈鷲山にあり(巴)。

○此年闍王、拘薩羅國、釋種の國を一統す(緬)。

○闍王猶跋耆を亡ぼさんとし、禹舍大臣を遣はして佛の意見を問ふ。佛答ふるに、跋耆に亡ぶべからざる七個の理由あるを以てす(長阿含遊行經)闍王佛滅三年の後、遂に其目的を達して、跋耆を亡ぼせり(緬)。

○此時、王舍城附近に十八寺院あり、僧侶の數甚だ多し。佛是等を集めて、和合の必要を説く(緬)其後東して巴連弗邑を経て、恒河を渡り、吠舍離に至り、捺女の園に止住して說法す。捺女佛を請して供養せんとす。吠舍離城の離車族、捺女の請ありしが爲に、

其意を果さず(遊行經、佛般泥洹經、此時離車族、甚だ華美を盡し、其風態天人の如し、佛其破滅の遠からざるべきを知り、悵然として、弟子に對して浮世の榮華を捨つべきを諭す(緬)。

○此年を(緬)も(巴)も、第四十四夏の後と爲せども、今は羅刹經が、四十四夏を最後と爲すに從ひ、之を四十三夏後と爲す。

第四十四夏後

○佛陀吠舍離國の竹林村に最後の雨期を送り、佛身疾あり(遊行經、羅刹經に、第四十四年、最後の夏坐を跋祇境界毘將村中に於てせりといふもの、是なり)。

○往路を経て舍衛に還り、祇園に住す、此時、舍利弗、第七日後に入滅すべきを知り、佛陀に訣別し、其生處那羅陀村に還りて、生母を歸佛せしめ、その後入滅す、衆皆集りて茶毘し、均頭沙彌遺骨を持して祇園に到り、阿難を介して佛前に其狀を報ず(緬)。

○佛大に彼を讚嘆して後、王舍城の竹園に至る、此時イシギリ山の黒岩窟に止住せる目連、盜賊の爲に殺されたり、(緬)は之を以て裸形外道の教唆せるものと爲し、(西)は提婆の徒の教唆せるものと爲す。

○佛命じて、兩大弟子のために塔を建てしめ、王舍城より恒河に沿ひて東し、河を渡りて吠舍離に向ひ、遮婆羅塔に至りて、却後三月涅槃に入るべきを念ふ(遊行經)。

○大林精舍に於て、衆を集めて三十七法の奉行すべきを説く(遊行經、及び緬)觀音賢行法經は此時の説法に擬せらる。

○佛母大愛道、佛の入滅を見るに忍びず、佛に先ちて入滅す(增一阿含經、及び佛母泥洹經)。

○尼乾親子死す、久しからずして、其徒二分して、互に他派を非難す、民衆大に之を厭ふ、佛滅の後直に經律の結集ありしは、之に鑑むる所多かりしが如し。

○佛陀吠舍離城が遠からずして覆滅すべきを知り、之を顧みつゝ、去りて波婆城に至り、工師の子周那の供養を受け、其疾益々甚し、去りて拘孫河に沐浴し、波婆城より二十五回休息の後(緬)非常の忍耐を以て、遂に拘尸城外に至り、沙羅雙樹下に於て、懇到なる遺訓を垂れて後、頭北面西にして涅槃に入らんとす、此時百二十歳の老婆羅門須跋なるもの、來りて疑義を質し、佛に先ちて入滅す、之を最後の弟子と爲す、次て寂然として大般涅槃に入る(緬及遊行經)。

○阿難、阿那律等の諸弟子等、拘尸城の天冠寺に於て荼毘せんとす、火滅して燃えず、大迦葉、佛の入滅を聞き、遠く來り會す、香薪即ち燃ゆ、遊行經。

○佛陀の遺骨を得んとするもの、各集り來りて争ひ、戰端を開かんとす、和解するものあり、平和の間に、之を八分す(遊行經)。

第八章 餘佛傳論

一、佛傳に對する地方的影響

佛骨の崇拜が、遊行經成立の時代に於て既に盛なりしとは、經の記事に徴して明白なり、其時代は不明なりと雖も、種々の遺教ある中、遂に結集の時に言及せざるより見れば、必ずや阿育王以前に成立せるものなるべし、さて、當時大に崇拜せられし佛骨が、如何なる地方に存在せしかは、南北兩傳の一致する如く、八ヶ所に外ならず、是等の八ヶ所は、頗る早き時代より、佛骨の一部分を起塔供養せるものなり、是等八ヶ所に佛骨の存せしとは、疑ふの餘地なしと雖、其以外の者は、甚だ疑はしきものならずんば、例せば、錫蘭島に佛牙の崇拜あるが如き是なり、何時代より起れるも

のなるかを詳にせざれども、其正確なるを保證せんとの主趣より、佛傳に一變形を來すに至れり、曰くクシエーマ羅漢が、茶毘の灰中に殘されたるを發見せるものは、是なりと、緬甸にも亦佛牙の崇拜あり、是は香姓婆羅門が、舍利分配の際に盜み隠せるものなりと傳ふ。

遊行經には、香姓婆羅門を以て阿闍世の使はせるものと爲し、分配に先をて、一牙を取りて之を阿闍世王に送れりと爲す、幾分か緬甸所傳に類する所あり、錫蘭島の佛徒は、亦分配の際に、サラブフ長老なるものが、佛の頭骨を得たりとも傳ふ、是等は、いづれも、最古にして最も信すべく、且つ詳細に記されたる佛滅の記事中になき所にして、後世の附加なると明なり、本邦の名山古刹にも、往々にして佛舍利なるものあり、其緣起には、いづれも適當の理由を具す、唐朝に佛骨の争ありしは、甚だ有名なるものなれども、此佛骨が如何して得られしかを究むる時は、是亦必ずや、幾分か佛傳を變形せしむることゝなるべし。

佛陀の傳道區域は、中印度に限られしも、他方世界又は天上界に關する種々の傳説ある中、尤も世人を惑はし來りしものは、錫蘭島に至りしといふものは、是なり、既に法

顯三藏の佛國記にも、二回の渡島を記し、スベンス、ハーデー氏は、三回の渡島を傳ふ、如何なる錯誤にか、此島を以て佛生地とさへ信ずるものありき。是佛傳が地方的影響を受けし甚しきものなるべし。

二、本生譚と佛傳との混同

我邦の佛徒は、古來釋尊の修行地を以て檀特山と爲すを、殆んど確固不動のものと思惟し來れり。然るに、檀特山は、中印度の境にあらずして、西北印度韃駝羅國にあり、是釋尊の足跡を印せざりし地なるや、勿論なり。如何して此山が修行地として廣く信ぜられしかを尋るに、是蓋し、本生譚が佛傳中に混同し來れるものに外ならず。檀特山は、釋尊の前生に於て善牙太子と稱せし時、布施の行を修せし地として甚だ有名なり。善牙蘇達拏が、國を捨て、財を捨て、車馬を捨て、後には兩兒をも、妃をも、一切捨て去りて、此山に修行せし博愛の精神は、甚だ古代の佛徒を感嘆せしめたる所に於て、之を資料とせる藝術、甚だ印度に多かりき。此有名なる善牙太子に關係ある檀特山は、直に現實の釋尊に關聯せしめられ、初は之を王舍城附近の山名とせしが如くなれども、後には雪山の最高峰と考ふるに至りしなり。

之と同様の徑路を取りしものは、雪山童子の因縁又は身肉を割きて鳩の命を救へる因縁の如き、是なり。是等も皆現實の釋尊の上に存せしにあらず、前生の修行中の事蹟即ち本生譚なれども、釋迦八相倭文庫以來、皆之を釋尊の六年苦行中の出來事と信ずるに至りしなり。

三、耶蘇教會中の佛陀

尤も不思議にして、奇中の奇と稱すべきは、佛陀がセント、ヨサファットの名を以て、天主教會中に、十月二十七日の聖人として禮拜せらるゝと、是なり。これはダマスコの聖約翰なるものゝ希臘語にて作れるパトラーム及びヨアサフなる物語より出て、中世紀の聖徒崇拜の潮流に乗じて、一時に廣く行はれたるものなりといふ。作者約翰は、シリアのバグダッドの教王アルマンスールの朝廷に事へたる大臣セルギウスなるものゝ子にして、西曆八世紀の頃に生れ、出家の後文學によりて教法を宣布せる人なり。

ヨアサフが釋尊なることを示す前に、此物語の梗概を記さん。曰く、印度のアヴェニール王、長く子を有せず、甚だしく渴望せしが、遂に一人の王子を擧げたり。天文學者を

して兒の將來を觀せしめしに、其答に甚だ有名なる人となるべく、且つ基督教を信ずるに至るべしといへり。然るに此王は甚だ基督教を好まざりしかば、王子の之を信ずるを欲せず、乃ち王子を宮中深く潜ましめ、十分に之を守護し、侍者に命じて、決して王子に苦痛死病等の語を教へざらしめたり。年を経るに従ひ、王子は禁錮の生活を厭ひ、外遊を乞ひしかば、父王は外遊の途上に、王子の心を悲ましむるものなからべきを命じ、十分の準備を盡して後に、之を許可せり。斯の如くなりしにも關はず、王子一日は癩病人と盲人とに遇ひ、又一日は歩行に堪へざる老人を見、是凡ての人に免れざる運命なるべきかを從者に問ひ、免るべからざるを知るに至りて、此時以後頗る悲觀を抱くに至れり。時にシナイ原の隱者バーラームなるもの、天の告によりて、王子の意中を洞見して、之を度すべき時到来りと爲し、商估に扮して、眞珠を王子に示さんとて、謁見を請ひ、遂に王子をして世の無常なるとと、基督教の他に勝れたるとを信ぜしめ、洗禮を施して、再び曠野に還れり。王之を聞き、大に驚き、種々の方便を盡して、其信仰を棄てしめんとせしが、更に効を奏せず、學者を召して討論せしめしに、反りて王子の言に服して、基督教に従ふ者多かりき。王已むを得ず、國の

半を割きて王子に與ふ。王子之を基督教によりて治めて、大に効績を現はし、遂に父王をも其信仰に入らしむるに至れり。晩年王子は王位を去りて、曠野に隠れて、バーラームに邂逅し、彼の最後を弔ひ、自らも亦聖人として其生を終へたりとぞ。

この物語りを見ん人は、直に佛傳を少しく變更せるものに外ならざるを知るべし。ヨサフアットの語を、希臘語にはヨアザフといふ。これヨダサフより轉訛せるものなり。而してヨダサフはアラビヤ語のユダサトフより來れるものにして、ユダサトフはブダサトフより轉訛し來れるものなり。ブダサトフの語は、中古の波斯語を通して其本源に遡る時は、ポーヂサット即ちポージサット（菩薩）より來れるものなるを知る。されば菩薩の語が、波斯、亞刺比亞を経て、歐洲に入り、幾變遷の後、ヨサフアットとなれる者なりといふ。此事はクイン氏がヨサフアット及びバーラームと題せる論文にて、十分に論ぜりとぞ。

聖約翰の作れる此物語は、西洋語にて成れる最初の宗教小説にして、それが羅甸、佛、伊、西、獨、英、瑞、蘭等の各國語に譯せられあるを見れば、甚だ廣く愛讀せられたるものにて、其中に含まるゝ徳訓が、實に能く中世紀の人心に投ずる者ありしなり。此小説は

西曆第十三紀の初に於て、アイスランド語に譯せられ、フキリツピン島に於て出版せらるゝまでに至りしとぞ。以て此小説が如何に廣く基督教者の間に行はれしかの一般を知るべし。

さて基督教會にては、甚だ古き時代より、聖式に於て、殉教者及び聖徒の名を讀み上ぐるを常とし、各地の教會には、各々聖徒名簿を調製して之を備へ、時には之が像を圖し、堂塔を築くもありき。各地に於て、次第に新名を加へ來りしが、西曆一一七〇頃、法王歴山第三世は、自由に新名を加ふるを禁じ、之が加減の權を法王の手に歸せしめたり。時の進むに従ひ、次第に新名を加ふるを不可と爲すの風大に起り、最後に一五八五—九〇の法王シクスマス第五世に至つて、一定の聖徒名簿を調製して、之を西教會に通用せしめたり。此中に、十月二十七日の條下に於て、印度の聖徒として、二人の名を記すを見る。二人の名が、いづこにて、いつ、如何にして、聖徒たるに至れるかを決定し難しと雖も、伊國エクイリウムの僧正ベトルス、デ、ナタリブス(一三七〇—四〇〇)の著はせる名簿中に、二人の名と其小傳とを記すを見る。現時に知らるゝ殉教者傳中に於て、二人の名を列するは、之を最古と爲す。シクスマス法王の時に

調製せる殉教名簿は、此中より二人の名を取り來れるものならんといふ。

東教會にて現に用ふる名簿中には、八月二十六日の條下に、印度のアベニール王の子聖ヨザフなる名を列し、パーラームの名を記さず。パーラームは、東教會に於て、聖徒と認められざりしと覺し、此下には何の小傳をも附せざるを以て、之を列する根底の那邊に存するを知らざれども、ヨサファットが東教會中にも崇拜せらるゝことは明白なり。之に關する凡ての疑問は、シリアの古記録を調査せる上ならては、決し難しと考へらる。

之に關する研究は、リスダビッド氏の本生經英譯序文中に委しく論ぜられあり。以上は之に據れるものなり。

第九章 佛傳後語

一、印度民族の理想の權化

佛陀の一生は、宛かも是れ印度人の理想を、遺憾なく實行せるものなり。後世崇拜の餘、出來得る限りの光彩を以て其傳記を修飾するに及んでや、佛陀は遂に地上の人

間たらず、宛然印度人の理想を歌へるもの、如く、理想の實現といふよりも、理想を人化せるの觀なきにあらず。西人嘗て佛陀の歴史的人物なりや否やに疑を挿み、畢竟是れ太陽神話の變形に外ならずとまで考へたるものありき。其説にいふ、佛教なる一大宗教の存する以上は、佛陀の存在なかるべからざるは、論理上至當の結論なりと雖も、人間としての釋迦牟尼なるものは、此世に存せるにあらざるべし。淨飯なる國王を父とし、摩耶なる夫人を母とし、而も其の母は唯一人の太子を生めるのみにして、産後僅に一週日にして世を去り、其後は叔母摩訶波提なる夫人によりて養育せられて、名を薩婆悉達多と稱し、二十九歳にして出家し、三十五歳に降魔成道して、印度人の理想とする所の再生の生活に入り、四十五年の間法輪を轉じて、天の大導師たる力用感應を現はし、八十歳にして大般涅槃に入りし、其一生の歴史は、人間ありて以來他に比類なき程の光彩陸離たるものあり、且つや摩耶は迷妄又は闇黒の義なり、波闍波提は衆生主の義を有する神の名なり、薩婆悉達多は一切義成就の義なり、是れ太陽神話の變形ならずんば、あらず。摩耶の所生なりきといふは、太陽が長夜の闇黒より出て、東天より輝き初めしをいふにあらずや、生後一七日

にして摩耶の世を去りきといふは、日一たび出て、忽ちに闇黒の去りしを表示せるものにあらずや、菩提樹下の降魔は、日光一たび過ぐる所、百鬼雷電の悉く潛伏するを表示せるものなるべく、四十五年の轉法輪は、日正に天に沖し、滿空に火車を驅りて下界に光明を傳ふるを表示せしなり、故國迦毘羅衛の滅亡せるは、日の西山に沒せんとする時、東方の天地の黑暗に包まるゝを表示し、入滅は正しく日沒なり、茶毘は、日没の後、西空の金色に照り輝くをいひ、天雨至りて餘燼を滅すといふは、印度の常として、日没後驟雨の沛然として至るをいふなり、釋迦牟尼の一生は、斯の如く印度民族の理想とする所を、太陽神話の形式によりて、歌ひ出せるものに外ならざるなりと。

佛のセナール、蘭のケルン等、嘗て相唱和して此説を唱へ、泰西の東洋學者の間には、一時釋尊を以て詩的聖人の名とするの説、甚だ勢力ありき、これ北方所傳の普曜、法華の如き、神話的分子多き梵文大乘經典研究の結果に出でたるなり、獨のオルデンベルヒ頗る此説に服せず、眼を轉じて、南方所傳の巴利語佛典を研究し、遂に能く釋尊の歴史的な人物たりしを證明し、太陽神話説を根底より破壊せり。

斯くて千古の大聖たる釋尊は、依然歴史上の一大人格たるに疑なきに至れりと雖も、其一生の光彩は之が爲に毫も減殺せられず、よし神話的分子を悉く抹殺し去るも、其偉大なる點は毫も輕減する所なきのみならず、歴史的研究の進むに従ひ、また批評的研究の進むに従ひ、益々其光彩を發揮し、彌々其偉大を加へ來るものあり。一般の研究者より見て既に然りとせば、佛教徒の讚嘆渴仰して措かざるは素より其所なり。當時親しく此偉大なる人格に接し、日夕親炙して其悲智に浴せる四衆の歸依渴仰は、想望に餘ありといふべし。

二、大般涅槃と法身常住

此歸依渴仰して措かざる恩師釋迦牟尼は、既に大般涅槃に入りたまへり。其一生を終始せる慈忍によりて、痛切なる極苦を抑制し、最後の呼吸に至るまで、諄々として哀愍の情に溢るゝ慈訓を垂れ、説くべき法を説き終り、爲すべき事を爲し終り、平安寂靜の間に、火の滅するが如くに大般涅槃に入りたまへり。斯の如き最後は、豈大涅槃にあらずや。他に比類稀なる寂靜の最後にあらずや。此時に於ける遺弟の戀慕涕泣は、世の尋常にあらずりしなり。彼等は等しくいへり、如來の滅度何ぞそれ駛きや、

世尊の滅度何ぞそれ疾きや、大法の淪翳何ぞそれ速なるや、群生長へに衰へ、世間の眼滅すと、既に恩師に後れて、之を追想すれば、愛慕の情極めて切なり。彼等遺弟は恩師の入滅に對して、如何の感想をか抱ける。佛陀はこゝに灰身滅智して、遂に空無に歸せりと思惟せるか。然らず。若し然らば、斷見に墮せるなり。彼等曷んぞ斯の如き冷枯の感想を抱くの理あらん。彼等既に一般の涅槃に區別して、佛陀の最後を特に大般涅槃といへり。大般涅槃の語の中には、平安寂靜の意なくんばあらず。大樂無爲の意なくんばあるべからず。佛陀既に平安寂靜の境に入り、大樂無爲の域に歸りたまへり。これ豈涅槃經の所謂寂滅爲樂の福音の、よりて立つ根底にあらずや。既に寂滅爲樂の境に入りたまへり。こゝに豈法身常住の思想生ぜざらんや。肉身既に滅せりと雖も、法身に至りては、實に常住なり。不滅なりと觀じ來るは、自然の順序ならざるべからず。慣常無常の此世を去りて、安樂無爲の域に入り、有限相對の肉身を離れて、無限絕對の法身に還り、父母所生の身を脱却して、本來法爾の身に歸入せりと觀じ去り觀じ來るは、至當の順序を経て、至當の結論に達せるものならざるべからず。既に常住の法身に入りたまへり。斯の如き法身は、大般涅槃によりて始めて得られ

しにあらざ、既に常住といふ、無終なると同時に無始ならざるべからず、後際に向へる眼を一轉して、之を前際に馳すれば、釋尊を以て、云々の年に迦毘羅城に誕生せる人なりと思へるは、誠に短見にてありけり。無終無始の法身を有する佛陀が、權りに淨飯王を父とし、摩耶夫人を母として、釋迦種の太子の身を取りしに外ならず、何が爲に人身を取りしぞ、他なし、一切衆生濟度の爲のみ、若し夫れ釋尊の上につきて、之を言へば、人生の無常に打たれ、之を解脱せんが爲に修行成道し、修行成道の後に至りて、自己の經驗より溢れし同情の念より、慈悲の說法に出でたるものなれども、吾人教徒の上より之を見れば、佛陀の佛陀たるは慈悲の說法にあり、慈悲の說法ありしは修行成道に基づく、修行成道は實に其誕生ありしに因る。然らば、其誕生も、修行成道も、全く吾人濟度の爲より出でしものとならざるを得ず、斯くて其誕生には、甚深の意義を生じ來るを見る。嗚呼釋尊は吾人と同等の人間にはあらざりけり、吾人を濟度せんが爲の權化なりき、換言すれば、利他方便の爲に人身を取り、以て出家修行の跡を示せるに外ならざりけり。

三、菩薩と佛陀

法身觀と密接不離の關係あるものは、菩薩の思想なり。此思想の起原や、頗る古く、幾多の變遷を経て、高遠幽玄の發達を遂げたり。其起原は、蓋し佛陀を他の一切に區別せんとせしに基くが如し、吾人も亦是縦目横鼻を有し、四肢身體を具する點に於て、釋尊と何の選ぶ所なし、而も自己の修行を省み來れば、如何に努力奮進するも、到底釋尊と同日にして語るを得ず、自己の甲斐なきに比して、釋尊を嚮仰すれば、愈々堅く益々高し、是に於てか、彼が如き大覺果滿の極位は、六年苦行の能くし得べき所にあらず、必ずやよりて來る所、深く且つ遠しとの思想、自ら涌き來らざるを得ず。此思想に應じて、先づ現はれたるものは、佛敎文學の臂頭に立つ本生譚なりとす、本生譚とは、釋尊の前生に於て、或は國王となり、或は大臣となり、或は禽獸となり、幾回となき生死を経て、勇猛精進に、或は布施を行じ、或は忍辱を行じ、以て最後の成佛に向て奮闘努力せる狀況を描き出せるものをいふ。此中に於ける釋尊は、毎に菩薩の名稱を以て呼ばる、されば菩薩とは、成道以前の釋尊を呼ぶの語たり、佛陀とは菩薩の修行成滿せるを呼ぶの語たり、菩薩は因にして佛陀は果なり、同一常住の法身なれども、未來の佛陀たるときに菩薩の稱を附し、已成の菩薩たるときに佛陀の稱を

附せるに過ぎず。後に至りて、菩薩も佛陀も、共に普通名詞となり、幾多の菩薩、幾多の佛陀を憧憬するに至れりと雖も、其原始に遡る時は、等しく是釋尊を指すの語に外ならざりしなり。

蓋し菩薩の思想は、教徒の佛陀觀に變遷ありし結果の産物にして、之が成立は佛滅少くも一世紀以後のことなりけらし。佛陀觀の變遷とは何ぞ。自利的より利他的に遷れるをいふ。原始佛教に遡りて之を觀るに、佛陀その初めは阿羅漢と呼ばれたりき。阿羅漢とは應供の義なり。當時師弟子の間に稱號の區別なく、共に同一應供の名によりて呼ばれしなり。佛滅の後、師の阿羅漢を弟子のそれに區別せんが爲に、阿羅漢の外に辟支佛の思想起れり。辟支佛とは獨覺の義なり。此は佛説を聞きて聖位に入れるに反し、彼は無師にして獨悟せり。よし、其結果は同一なりとするも、之に達する上に於て、輕重の區別なくんばあらず。これ師を獨覺と名けて、之を弟子に區別せる所以なり。是に至りて、阿羅漢は弟子のみの稱となり、且つ聲聞と同一視せられたり。聲聞とは佛説の聲を聞きて悟るの義なり。斯くて阿羅漢、辟支佛の二思想の意義明白なるに至り、佛陀觀に一進歩を見たりと雖も、獨覺は猶是れ自利的の意味のみ

をあらはすの稱たるに於て、阿羅漢に異らず、常住の法身が、衆生濟度の爲に、權りに人身を取れりといふ、利他的の意味を兼有する稱に非ず。是に於てか、阿羅漢、辟支佛の上に、更に佛陀を加へて、佛陀の語義中に自利々他の二方面を具足せしめたり。畢竟、佛陀觀の變遷の跡を示す所の是等の三者を三乗といふ。既にして佛陀觀の進歩其極に達するや、佛陀を以て他の一切と同類の者とせず、到底吾人の現生に希求し得べからざる自利々他圓滿の極位と爲し、是に至りて、之を自己の涅槃のみを目的とする聲聞、辟支佛と同列に置くを欲せず、之に代ふるに菩薩の稱を以てしたり。されば菩薩とは、特に佛陀の因位のみ名くるもの、換言すれば未來佛をいふなり。聲聞、辟支佛、菩薩の三者を、爾來普通に三乗と呼ぶ。今佛陀觀の變遷を圖せば、次の如し、

(一) 佛陀 || 阿羅漢

(二) 佛陀 || 辟支佛 || 獨覺 又は 緣覺

(三) 佛陀(果) || 菩薩(因) —— 大乘(六度)

阿羅漢 || 聲聞

緣覺
聲聞 — 二乘 — 小乘 — 十二因緣 — 三乘
四諦

阿羅漢 Arhat, worthy; 辟支佛 Pratyeka Buddha, isolated Buddha, 聲聞 Śrāvaka, hearer, pupil; 菩薩 菩薩 菩提薩埵 Bodhisattva, he who has strong character in seeking enlightenment. されば、勇猛精進に菩提を求むる大士の語義を有する菩薩の稱は、その初は釋尊一人の修行成道を、他の一切に區別せんとの企圖に基づくものにして、而して之を一世の修行と見ずして、過去幾萬歳の古より、他に比類なき大願に應ずる大行ありきと見るに至りて、頗る其意義を深くせり、而も其修行が、自己の解脱の爲にあらずして、利他の爲よりせるものと觀ぜらるゝに至りて、更に其意義を深くせり、最後に法身の思想と相關聯して、其利他修行も、畢竟方便化現のものに過ぎずと觀ぜらるゝに至りて、正に其窮極に達せるものといふべし。

是に至りて菩薩なるものは、利他の爲に生死海中に方便遊化する人格を呼ぶの稱となり、吾人々類と密接の關係あるの點に於て、渴仰讚嘆せらるゝ所、尋常にあらずりき、語語以て之をいへば、權現としての釋尊に對する教徒の歸依、佛滅を去るに従ひ、彌々勃興し來れるなり、今や生死を畏れ、煩惱を厭ふの一邊に偈々たる聲聞も、緣覺も、迷界に惑溺する吾人々類に取りては、何等の交渉なし、自利々他圓滿の極位に

到達せる佛陀は、吾人々類との懸隔餘りに甚し、獨り菩薩は、自ら好んで涅槃大樂の位置を去り、一切衆生と共に此極位に到らんとの大願を抱きつゝ、生死海中に方便遊化するものなり、吾人と佛陀との橋梁は、唯獨り菩薩に於て、之を見るのみ、豈渴仰讚嘆せざるを得んや、誰かまた此の如き菩薩を以て修道の理想とせざらんや、斯くて菩薩なる思想は、大乘佛教の中心たるに至れり、此思想の成熟に従て、大乘佛教は一時に開發せるものなり。

四、菩薩と大乘經典

菩薩の思想は、斯の如くにして佛教に一轉機を與へたり、百花爛熳たるが如き諸大乘經典を、若し畫龍に比すれば、菩薩は實に點睛の如き觀を呈す、是に至りて聲聞緣覺は、小乗の名の下に甚しく蔑視せられて、之を口にするをも快とするものなきに至らんとし、獨り菩薩のみ、佛道修行者の理想たるに至れり、その菩薩は如何なる目的大願を有し、如何なる活動應化を爲し、又人生生死に對して如何なる關係を有するぞ、請ふ、大乘經典、それ自身をして、之に對する解答を爲さしめよ。

四十華嚴經卷の八に、菩薩の大願を説きて曰く、菩薩は一衆生を教化調伏せん

が爲のみの故に、菩提心を發さず。——一如來を親近供養せんが爲のみの故に、菩提心を發さず。——一如來の教を受持せんが爲のみの故に、菩提心を發さず。——一佛刹に往かんが爲のみの故に、菩提心を發さず。——○一切衆生を教化調伏して、悉く餘なからしめんと欲するが爲の故に、菩提心を發し、一切の諸佛に親近供養して、悉く餘なからしめんが爲の故に、菩提心を發し、一切諸佛のあらゆる刹土を嚴淨して、悉く餘なからしめんと欲するが爲の故に、菩提心を發し、一切の佛教を守護して、悉く餘なからしめんと欲するが爲の故に、菩提心を發す。——○この故に、一切世界を嚴淨し盡さば、その願すなはち盡きん。悉く十方一切世界の劫次第を知り盡さば、その願すなはち盡きん。悉く十方一切諸佛の功德海を得盡せば、その願すなはち盡きん。——○當に知るべし、菩薩の菩提心を發して修する所の行願、あらゆる志樂は、廣大にして法界の如く、究竟虚空のごとく、虚空は究竟して窮盡なきが故に、その願もまた究竟盡くるあるなく、法界は廣大にして邊際なきが故に、その願の廣大もまた邊際なく、諸衆生界は究竟して盡くるな

きが故に、その願もまた盡くるあるなきを。

豈廣大無邊なる目的にあらずや、有史以來、いづれの地にか、如何なる文書にか、能く斯の如き廣大無邊なる抱負を發表せるものあらんや、此大抱負は何の爲ぞ、畢竟は一切衆生を濟度して、共に涅槃の大樂を享受せんが爲に外ならず、是に於てか、其活動の狀況は、吾人々類の意表に出るものあり。

自在王菩薩經に、其應化說法の狀況を説きて曰く、若し衆生あり、慢心自ら大とせば、菩薩は如意足自在力を以て、すなはち執金剛神となり、火焰と金剛杵とを執りて、以てこれに示し、恐畏を生じてその慢心を除き、自歸敬禮せしむ。若し轉輪聖王の形を樂むものあれば、王身を以て說法し、若し釋提桓因の形を樂むものあれば、桓因の身を以て說法し、若し梵天王の形を樂むものあれば、天王の形を以て說法し、若し魔王の形を樂むものあれば、魔王の身を以て說法し、若し佛身を見るを樂むものあれば、すなはち佛身を現じて說法し、——或は自らその身を現じて說法し、その聲梵天に至り、或はその身を現ぜず、たゞ音聲を以て說法し、或は乾闥婆の身を現じ、衆の音樂を以て說法し、或は龍王の身を現じ、雲雷

震を起し、大電光を放ち、大雨を濺ぎて説法す。

菩薩の擧手投足、悉く是衆生濟度の爲の説法ならざるなく、而して如何なる方便を以てしても、衆生を濟度せずんば己まざるは、實に菩薩の大悲なり。是に於てか、聲聞及び緣覺が、生死を怖畏して、一に之を解脱せんとし、甚しく生死と涅槃との間に區別を附するに反し、菩薩は生死の人世に處するを樂む、生死にあるは、やがて是衆生化益の必須條件なればなり。

勝天王般若經に、菩薩の生死觀を遺憾なく道破して曰く、菩薩は生死中に處り、これを以て樂と爲し、涅槃を以て樂と爲さざるなり。何を以ての故に、菩薩は衆生を利益することを以て樂と爲し、かれの樂む所に隨ひ、すなはち方便を用ひ、種々の法を説き、安樂を得しむ、もし漏盡羅漢を證れば、一切衆生を利益する能はず。故に菩薩は、生死を觀察し、大悲心を起し、衆生を捨てずして、本願を成就す。——○菩薩もし生死を觀じて驚怖を起せば、すなはち非道に墮して、一切衆生を利益し、如來の甚深の境界に通達する能はず。いかに、非道なるいはゆる聲聞、辟支佛地を貪樂し、諸の衆生に於て大悲心なきなり。何を以ての故に、聲聞、辟

支佛道は、すなはち菩薩の道にあらず。聲聞、緣覺は、生死を怖畏し、速に出離を求め、功德、智慧、具足せず。この義を以ての故に、菩薩道にあらざるなり。

以上は僅に三例を擧げたるに過ぎざれども、般若を始め、維摩、華嚴、法華等の諸大乘經、悉く菩薩を中心とせるものにあらざるなし。斯の如くにして、菩薩の思想は、幾多の長年月に亘りて、大に鼓吹せられたり。隨て其内容に幾多の變遷ありしが、發達の最後に至りて、次の定義に究竟せり。曰く、

智を以て上は菩提を求め、悲を以て下は衆生を化するが故に、菩薩といふ。

是れ菩薩(菩提薩埵の略)の語を分解して、菩提(智)と薩埵(衆生)との二と爲し、而して智慧と慈悲との二徳を以て、巧みに自利々他の二行を、其中に寓せしめたるなり。前來説明し來れる菩薩の意義は、此簡單なる定義中に包括せられて漏るゝ所なきなり。斯の如き菩薩の意義は、果して那邊より發源せるぞ。予は既に菩薩の思想は、佛陀觀の變遷より起れりといへり。既に然らば、以上述べ來れる所は、悉く是釋尊の性格精神より流出せしものといふべし。釋尊の深遠なる智慧と、廣大なる慈悲とは、年月の休徴に影響せられ、歴史の色彩に修飾せられて、凝りては諸大乘經典となり、發して

は彼微妙絶偉の活理想となり、以て古來三國の佛教徒をして、或は不惜身命の擧に出でしめ、或は爲法不爲身の動に出でしめしものたるや疑なし、之を證せんには、多言を要せず、釋迦牟尼の語義の解釋中に、之を看取するを得べし。支那の佛徒、釋迦牟尼を翻譯して、能仁寂默と爲し、之を解釋して曰く、

能仁(釋迦)の慈悲あるが故に、涅槃に住せず、寂默(牟尼)の智慧あるが故に、生死に住せず。

是れ正しく菩薩の思想にあらずや、初に未來佛たりし菩薩が、今や方便權化たるに至り、宛も能仁寂默の意味を以て見られしこと、既に上に引用せる勝天王般若經の文面に於て、十分に之を看取するを得べし。是に於てか、古來佛道修行者の理想たりし菩薩は、教祖釋尊の性格精神より流出せるもの、一步を進めていへば、一代佛教廣しと雖も、皆此性格精神を敷衍せるものなるを知るべし。之を舒ぶれば、八萬四千の法門たれども、之を卷けば、終に釋尊の人格中に歸入せらるべきなり。

五、菩薩と處生

斯の如き偉大なる教祖釋迦牟尼を有する吾人大乘佛徒の日常處生の方法、如何、華

嚴經の淨行品は、能くあらゆる場合に對する吾人教徒の指箴を説きて、甚だ詳細を極めたり。吾人豈之が實行を期すといはんや、唯實行せんとの希望を有するども、或は日々之を捧讀默想するども、猶甚だ其効多かるべし。徒に秃筆によりて、蛇足を添へんより、直に其本文を掲げんかな、頗る長しと雖、予は之を中略するに忍びざるなり。

菩薩家にありては、衆生と共に、家の性空を知り、その逼迫を免かれんを願ふべし。○父母に孝養しては、衆生と共に、善く佛に事へて、一切を護養せんを願ふべし。○妻子集會しては、衆生と共に、怨親平等にして、永く貪著を離れんを願ふべし。○もし、宮室にありては、衆生と共に、聖地に入りて、永く穢欲を除かんを願ふべし。○瓔珞を著くる時は、衆生と共に、諸の僞飾を捨て、眞實の處に到らんを願ふべし。○もし、厄難にありては、衆生と共に、隨意自在にして、所行礙りなからんを願ふべし。○自ら佛に歸しては、衆生と共に、佛種を紹隆して無上意を發さん。○自ら法に歸しては、衆生と共に、深く經藏に入りて、智慧海のごとくならんを願ふべし。○自ら僧に歸しては、衆生と共に、大衆を統理して、一切

無礙ならんを願ふべし。○もし、堂宇に入らば、衆生と共に、無上堂に昇りて、安住不動ならんを願ふべし。○正身端坐しては、衆生と共に、菩提座に坐して、心に著なからんを願ふべし。○結跏趺坐しては、衆生と共に、善根堅固にて、不動地を得んを願ふべし。○定を修行しては、衆生と共に、定を以て心を伏し、究竟餘なからんを願ふべし。○もし、觀を修せば、衆生と共に、如實の理を見て、永く乖諍なからんを願ふべし。○舍より出る時は、衆生と共に、深く佛智に入りて、永く三界を出入らんを願ふべし。○もし、道に在らば、衆生と共に、能く佛道を行じて、無餘の法に向はんを願ふべし。○路を涉りて去らば、衆生と共に、淨法界を履みて、心に障礙なからんを願ふべし。○高きに昇る路を見ては、衆生と共に、永く三界を出て、心に怯弱なからんを願ふべし。○下に趣むく路を見ては、衆生と共に、その心謙下にして、佛の善根を長ぜんを願ふべし。○斜に曲れる路を見ては、衆生と共に、不正の道を捨て、永く惡見を除かんを願ふべし。○もし、直路を見ては、衆生と共に、その心正直にして、諂なく、誑なからんを願ふべし。○路に塵多きを見て

は、衆生と共に、塵盆を遠離して、清淨法を獲んを願ふべし。○路に塵なきを見ては、衆生と共に、常に大悲を行じて、その心の潤澤ならんを願ふべし。○もし、險道を見ては、衆生と共に、正法界に住して、諸の罪難を離れんを願ふべし。○もし、高山を見ては、衆生と共に、善根超出して、能く至るものなき頂に至らんを願ふべし。○棘刺ある樹を見ては、衆生と共に、疾く三毒の刺を剪除するを得んを願ふべし。○樹葉の茂るを見ては、衆生と共に、定解脱を以て、自らの蔭映と爲らんを願ふべし。○もし、華の開くを見ては、衆生と共に、衆相華のごとく、三十二を具へんを願ふべし。○もし、果實を見ては、衆生と共に、最勝の法を得て、菩提の道を證せんを願ふべし。○もし、大河を見れば、衆生と共に、正法の流を得て、佛智海に入らんを願ふべし。○もし、陂澤を見れば、衆生と共に、疾く諸佛一味の法を悟らんを願ふべし。○もし、池沼を見れば、衆生と共に、語業満足して、巧に能く演說せんを願ふべし。○もし、橋道を見れば、衆生と共に、廣く一切を度して、なほ橋梁のごとくならんを願ふべし。○歡樂の人を見ては、衆生と共に、常に安樂を得て、樂んで佛を供養せんを願ふべし。○苦惱の人を見ては、衆生と共に、根本智を得て、衆苦を滅除

せんを願ふべし。○無病の人を見ては、衆生と共に、眞實の慧に入りて、永く病惱なからんを願ふべし。○疾病の人を見ては、衆生と共に、身の空寂を知りて、乖淨の法を離れんを願ふべし。○端正の人を見ては、衆生と共に、佛菩薩に於て、常に淨信を生ぜんを願ふべし。○醜陋の人を見ては、衆生と共に、不善の事に於て、樂着を生ぜざらんを願ふべし。○報恩の人を得ては、衆生と共に、佛菩薩に於て、能く恩徳を知らんを願ふべし。○背恩の人を見ては、衆生と共に、惡ある人に於て、その報を加へざらんを願ふべし。○甲冑を著くる人を見ては、衆生と共に、常に善の鎧を服して、無師法に趣かんを願ふべし。○鎧仗なき人を見ては、衆生と共に、永く一切不善の業を離れんを願ふべし。○もし、王を見れば、衆生と共に、法王と爲るを得て、恒に正法を轉ぜんを願ふべし。○もし、王子を見れば、衆生と共に、法より化生して、佛子と爲らんを願ふべし。○もし、大臣を見れば、衆生と共に、恒に正念を守りて、衆善を習ひ行ぜんを願ふべし。○もし、長者を見れば、衆生と共に、善く明に斷じて、惡法を行ぜざらんを願ふべし。○もし、美食を得ば、衆生と共に、その願を満足して、心に羨欲なからんを願ふべし。○不美食を得ば、衆生と共に、諸三昧

の味を獲得せざるなからんを願ふべし。○柔軟の食を得ば、衆生と共に、大悲の熏ずる所、心意柔軟ならんを願ふべし。○麁澀の食を得ば、衆生と共に、心に染着なく、世に貪愛を絶たんを願ふべし。○もし、飲食する時は、衆生と共に、禪悦を食と爲し、法喜充滿せんを願ふべし。○もし、味を受る時は、衆生と共に、佛の上味を得て、甘露に満足せんを願ふべし。○飲食已に訖らば、衆生と共に、所作皆辦し、十種の力を成ぜんを願ふべし。○盛暑炎毒には、衆生と共に、衆惱を捨離して、一切皆盡きんを願ふべし。○暑退き涼初まらば、衆生と共に、無上の法を證して、究竟清凉ならんを願ふべし。○楊枝を嚼む時は、衆生と共に、その心調淨にして、諸の煩惱を噬まんを願ふべし。○大小便する時は、衆生と共に、貪瞋癡を棄て、罪法を蠲除せんを願ふべし。○事訖りて水に就かば、衆生と共に、出世法の中を、速かに疾く往かんを願ふべし。○もし、水に入る時は、衆生と共に、一切智に入りて、等しく三世を知らんを願ふべし。○身體を洗浴せば、衆生と共に、身心無垢にして、内外光潔ならんを願ふべし。○形の穢れを洗滌せば、衆生と共に、清淨調柔にして、畢竟無垢ならんを願ふべし。○水を以て掌を盥がば、衆生と共に、清淨の手を

得て佛法を受持せんを願ふべし。○水を以て面を洗はゞ、衆生と共に、淨き法門を得て、永く垢染なからんを願ふべし。○もし、足を洗ふ時は、衆生と共に、神足力を具して、行く所礙なからんを願ふべし。○時を以て寢息せば、衆生と共に、身安穩なるを得て、心に動亂なからんを願ふべし。○睡眠始めて寤めなば、衆生と共に、一切知覺して、十方を周ねく願みんを願ふべし。

吾人若し此充實せる志操に住せんか、いづれの處にか煩悶を起すの空隙あらん、此健全なる地盤に立たんか、何ぞ醒眠として成功に走るの徒勞を事とせん、大願は、大行を生ずる源泉なり、吾人、大行を欲するもの、先づ大願なかるべからず、斯る願行を鼓吹するを以て、徒に自力と爲すなかれ、如何に他力門なればとて、豈入信後の經營なかるべけんや、若し經營の基礎を、他力の信仰に置き、以て此大願を起し、之に伴ふ大行を以てせば、極めて能く佛意に添ふものあらん、若しこの淨行の一品、長きに過ぐといふものあらば、こゝに極めて簡にして、しかも能く一切の大願を包括するものあり、四弘誓願これなり、こゝは六波羅密の行と共に、一切の菩薩に必須なるものとせらるゝ所にして、古來佛徒を策勵して、大乘的志操を懷抱せしめたる鞭撻たりし

ものなり、七言四句にして、其語の中に一種の諧調あり、緩かに之を唱ひ出づれば、吾人の精神を驅りて、翻々羽化するの思あらしむ、今これを記して、以て、佛傳後語の跋と爲す。

- 衆生無邊誓願度
- 煩惱無數誓願斷
- 法門無盡誓願知
- 佛道無上誓願成

釋迦牟尼傳 大尾

1. 關於本會之宗旨
2. 關於本會之組織
3. 關於本會之經費
4. 關於本會之業務
5. 關於本會之紀律

民國二十一年

釋迦牟尼傳索引 (p.=pāli)

ア行

- アベニール Abenēr... 177,181.
 阿毘曇 Abhidharma; Abhid-
 hamma (p.) 160.
 アグニダッタ Agnidatta... 7.
 阿闍世 Ajātaśatru; Ajātasattu
 (p.) 4,7以下,13,100,114以下,120以下,
 130,136,138,153,169,175.
 阿夷陀翅舍欽婆羅 Ajita Ke-
 sakambali (p.) ... 126.
 阿迦膩吒天 Akanisṭhas ... 47.
 アーラブー Ālavī ... 165,166.
 アルマンスール Almansūr 177.
 阿難 Ānanda
 9, 16以下, 24,72,96,97,101,110, 111以
 下,114,144以下,147以下,156,159,161,
 162,167,169,172,174.
 阿菴林 Anūpiya (p.)... 96,156.
 鸯伽 Aṅga 4,23,120.
 阿菴樓陀, 阿尼盧豆, 阿那律
 Anuruddha or Aniruddha..
 16以下, 87, 96,110, 114, 150以下, 156,
 174.
 阿藍伽藍, 阿羅々 Āraḍa Kālā-
 ma; Ālāra Kālāma (p.) ...
 36,58,70,85,146.
 阿順 Arjuna 38,39.
 阿私多 Asita 30,38,92,156.
 阿育 Aśoka 2,9,174.
 阿濕婆特 Aśvajit; Assaji (p.) 86.
 阿槃提 Avanti 3以下,6以下,9以下.
 阿踰陀 Ayodhyā or Sāketa 146.
 阿那律=阿菴樓陀
 懿摩 毘盧擇迦 Iksvāku (virū-
 dhaka) 14,19.
 イシギリ Isigiri 172.
 尉禪 Ujjaini; Ujjeni (p.).. 4,9.
 因明派 Nyāya 57.
 韋提希夫人 Vaidehī Devī...
 7,8,120以下,127,169.
 優陀夷 Udāyi or Udayibhadra
 42.
 鬱陀羅 Udraka Rāmaputra;
 Uddaka Rāmaputta (p.)...
 58,70,85.
 優填 Udyāna or Udayana;
 Udena (p.).....
 4,9以下,11以下,105,160.
 烏菴 Udyāna 132.
 ウツガセーナ Uggasena.. 158.
 ウルムバ Ulumpa or Ulumba
 (p.)..... 2,130.
 優波離 Upāli 93,97,156.
 ウパニシャッド Upaniṣad...
 12,52,57,77.

- 優婆塞及優婆夷 Upāsaka and
Upāsikā... 78以下, 88, 127, 142, 155.
- 優波底沙 Upatīśya; Upatissa
(p.)... 91.
- 優波摩那 Upavaṇa (p.)... 146.
- 優爲迦葉 Uruvilvā-kāśyapa;
Uruvela-Kassapa (p.)... 89, 90.
- 慧=摩耶
- エギダッタ Eggidatta (p.) 157.
- 閻浮樹 Jambu-druma... 37, 92, 96.
- 鶯軻摩羅 Aṅglimāla... 167.
- オルデンベルヒ Oldenberg 183.
- 王舍城 Rājagṛha; Rājagaha (p.)
1以下, 8, 51, 53, 55, 73, 75, 90, 94, 97, 98,
103, 114, 120以下, 126, 130, 137, 146,
155, 158, 159, 163, 166, 171, 176.
- 越祇=跋耆
- カ行
- 甘露味女 Amṛtā... 17.
- 甘露飯 Amṛtodana... 17.
- 甘蔗王=懿摩
- 迦留陀夷 Kālodāyin... 94.
- 迦毘羅衛城 Kapilavastu; Ka-
pilavatthu (p.) 1以下, 6, 15, 24, 30, 36,
55, 73, 75, 94, 100, 114, 118, 128以下, 13
1以下, 137, 156, 158, 161, 164, 170, 183.
- 迦奢或迦尸 Kāśī or Kāśā...
4, 7, 23, 109, 124, 169.
- 迦旃延子 Kātyāyānīputra...
92, 156.
- 伽羅羅 Garurit (p.)... 161.
- ガヤガチ Gayagati (p.)... 163.
- 伽耶迦葉 Gayā-Kāśyapa;
Gayā-Kassapa (p.)... 89.
- 伽耶山 Gayāśirṣa; Gayāsisa
(p.)... 60, 90, 115, 155.
- 給孤獨 Anāthapiṇḍika or An-
āthapiṇḍada... 98以下.
- 牛主 Gavāṃpati... 88.
- 祇陀 Jeta... 98以下, 135, 157, 171.
- 祇園精舍 Jetavana-vihāra...
75, 84, 94, 98以下, 104, 110, 114, 119, 125,
130, 135, 157, 161, 164, 165.
- 耆婆 Jivaka... 11, 126, 166, 170.
- 憍陳如 Kaundinya; Koṇḍañña
(p.)... 31, 85, 86, 148.
- 金毘羅 Kimbila... 96, 110, 114.
- 行雨夫人 Varṣikā Devī... 130.
- 瞿曇 Gautama; Gotama (p.)
1, 19, 24.
- 峴山=耆闍崛山 Gṛdhrakūṭa;
Gijjhakūṭa (p.)... 74, 124, 138, 158, 163.
- 拘跋彌城(拘苦彌) Kauśambī;
Kosambī (p.)... 4, 10, 73, 75, 105,
108以下, 114, 149, 159, 160, 116, 169.
- 拘絺羅 Kauṣṭhila... 92, 156.
- 拘律陀 Kolita... 91.

- 拘利族(羅摩迦國) Koliyas (of
Rāmāgrāma)... 2, 17, 55, 134, 156, 158, 165.
- 拘薩羅 Kosala 3以下, 6以下, 23,
98以下, 109, 120, 128, 131, 136.
- 拘薩羅夫人 Kosalā Devī
6, 120, 121, 124, 169.
- クシマ Kṣema; Khema (p.)
175.
- クシマ Kṣemā; Khemā
(p.)... 159.
- クム Kūm... 177.
- 拘孫河(跋提河) Kukūṣṭa (=
Hiraṇyavati)... 146.
- 拘留 Kuru... 23.
- 拘尸那竭羅城 Kuśinagara;
Kusināra (p.) 145, 151以下, 153, 173.
- 月護王 Candragupta-rāja... 6.
- 鞞陀羅 Gandhāra... 72, 176.
- 鞞陟 Kaṇṭhaka... 53.
- ケルン Heinrich Kern. 20, 183.
- 斛飯王 Dhotaḍana-rāja... 17.
- 香姓婆羅門 Droṇa the Brāh-
man... 153, 175.
- 恒河 Gaṅgā... 142, 171.
- Allakappa (p.)... 153.
- 車匿(=闍怒) Channa (p.)...
53, 149.
- 遮婆羅 Cāṇāla (p.)... 145, 173.
- 淳陀(=周那) Cunda... 146, 173.
- 十力迦葉 Daśabala-Kāśyapa
86, 103.
- 執杖 Daṇḍapāṇi... 40.
- 闍那迦王 Janaka-rāja... 12.
- 樹提伽 Jyotiska... 103, 159.
- 沙迦羅 Sakala... 120.
- 釋迦牟尼 Śākyamuni...
155, 182, 196.
- 沙羅 Śāla... 29, 31, 146.
- 沙然 Sṛñjaya; Sañjaya (p.)...
91.
- 散若毗羅梨子 Sañjaya Bela-
ṭhaputta (p.)... 126.
- サンスマラ Saṅsumāra 161.
- サラブフ Sarabhu... 175.
- サチアピア Satiābia... 163.
- 三十三天=忉利天
- 舍利弗 Śāriputra; Śāriputta
(p.) 9, 21, 24, 91以下, 96, 97, 99, 104以下,
111, 114, 119, 156, 158, 160, 161.
- 悉達多(悉達) Siddhārtha...
1, 16以下, 31, 56以下, 182.
- 獅子頰 Siṅhahanu... 16.
- シリマチ Sirimati... 166.

サ行

- 森書 Āraṇyaka... 90.
- 遮羅頗國諸跋離民衆 Bulis of

舍衛城 Śrāvastī; Sāvattī (p.)
 1以下, 73, 75, 76, 88, 104, 114, 128以下,
 131, 137, 146, 157, 160, 162以下.
 シリーサドラ Śrīthadrā 120.
 淨飯王 Śuddhodana-rāja; Su-
 ddhodana (p.)
 . 3, 16以下, 24, 32, 86, 94, 95, 96, 157, 182.
 淨居天 Śuddhāvāsadeva
 44, 46, 48.
 商梨富婆 Tapussa (p.) . . . 97以下.
 數論 Sāṃkhya 52, 57.
 須跋 Subhadra . . . 103, 147, 159, 173.
 須菩提 Subhūti 105.
 須達 Sudatta
 . . . 98以下, 104, 110, 135, 157, 160, 162, 168.
 柘梨 Cāliya 75, 167, 168.
 瞻波 Campā 146.
 孺提提婆 Kṣāntideva . . . 34.
 刹帝利 Kṣatriya
 . . . 1, 32, 35, 52, 114, 130.
 赤眼婆羅門 Raktākṣa . . . 106, 158.
 閃婆 Sampaka 133.
 セナル Senart 183.
 セルギウス Sergius 177.
 セント, ジョン St. John of
 Damascus 177.
 セント, ジョサファット St.
 Josaphat 177以下.
 善博 Subāhu 88.

善賢=須跋陀羅
 善覺 Suprabuddha 17, 40.
 僧伽舍 Sankissa or Sainkassa
 (p.) 106, 160, 161.
 蘇達拏 Sudāna 176.
 象頭山=伽耶山

タ行

ダクシナーギリ Dakṣiṇāgiri
 Dakkhiṇāgiri (p.) 163.
 檀特山 Dantalokagiri . . . 176.
 ダボット Rhys Davids 131, 154, 181.
 提婆達多 Devadatta . . . 8, 16以下,
 40, 96, 114以下, 122, 156, 165, 168, 172.
 大慧=大愛道=摩訶波闍波提
 大迦葉 Mahākāśyapa; Mahā-
 kassapa (p.)
 . . . 91, 97, 113, 152以下, 156, 174.
 大名=摩訶那摩
 大善見 Mahāsudarśana . . . 147.
 大林精舍重講閣堂 Kūṭāgāra
 vihāra of Mahāvana
 . . . 101, 145, 158, 173.
 帝釋 Devānām Indra Śakra
 38, 48, 81, 83, 105.
 竹林村 Beḷu-gāmaka (p.) 143, 172.
 チャーリヤ Cāliya (p.) 164, 166, 167.
 チンチー Cincī . . . 107, 161.
 長壽王 Dirghāyu; Dīghāvu (p.)

..... 109.
 長爪梵志 Dirghanaka-pariv-
 rajaka 92, 156.
 底沙 Tīśya; Tissa (p.) . . . 17.
 竹園 Venuvana; Veḷuvana (p.)
 91, 113, 121, 157, 163, 164, 166.
 天冠寺 Makṭabandhana (p.)
 152, 174.
 轉法輪經 Dhamma-Cakka-
 ppavattana Sutta (p.) . . . 87, 154.
 轉輪王 Cakra Vartti Rāja . . .
 38, 42, 147.
 デーヴタハ (天臂) Devadaha
 2, 17, 111.
 德護 Śrīgupta 107, 161.
 德叉尸羅城 Takṣaśilā; Tak-
 kasilā (p.) 7, 147.
 仞利天 Trāyastriṃśa; Tāvā-
 tiṃsa (p.)
 . . . 11, 29, 31, 73, 74, 84, 103以下, 160, 161.
 兜率 Tuṣita; Tusita (p.)
 26, 27, 84.

ナ行

捺女 Āmrāpālī; Ambapālī (p.)
 142以下, 171.
 那提迦葉 Nadi-Kāśyapa . . . 89.
 ナクラ Nakula 161.
 難陀 Nanda . . . 16以下, 95, 101, 156.

難提迦, 難提 Nandika
 16以下, 96, 110.
 尼連禪河 Nairājanā; Nerañ-
 jarā (p.) 60, 64.
 尼波羅 Nepaul 134.
 尼軋子 Nirgrantha; Niggantha
 (p.) 126, 173.
 涅槃 Nirvāṇa; Nibbāna (p.) . . .
 . . . 53, 66, 117, 141以下, 173, 184以下.
 二十億耳 Śrutavimśatikotī . . . 63.

ハ行

バグダッド Bagdad of Syria 177.
 バールーム及ジョサファット
 Barlaam and Josaphat 177以下.
 跋梨迦 Bhallika (p.) . . . 79以下.
 婆提喇迦, 跋提 Bhadrīka;
 Bhaddiya (p.)
 . . . 16以下, 86, 96, 114, 159.
 跋迦 Bhaga or Bhagava . . . 58, 70.
 婆羅門, 婆羅門書 Brāhmaṇa
 . . . 34以下, 46, 52, 57, 77, 83, 89, 143.
 ハーデー Spence Hardy . . .
 154, 176.
 ハンター Sir William Hunter 五
 20.
 波婆國末羅民衆 Mallas of
 Pāvā 146, 152, 153, 173.
 波浮陀迦旃延 Pakudha Kac-

- cāyana (p.) 126.
 波羅叉樹 Palāśa 29.
 般遮羅 Pañcāla 23.
 般那曼閣 Pārileyyaka (p.) 110, 162.
 巴連弗村 Pāṭaliputra; Pāṭaliputta (p.) 8, 171.
 波閣波提=摩訶波閣波提
 波羅殊提 Prajota; Pajjota (p.) 8以下.
 波斯匿 Prasenajit; Pasenadi (p.) 3以下, 6以下, 94, 100, 105, 120, 124, 128以下, 135, 156, 157, 160, 169.
 婆具茶 Vaku (p.) 133.
 婆羅捺城 Vārāṇasī; Bārāṇasī (p.) 64, 74, 85, 89, 146, 148, 154, 155, 163.
 婆沙毘 Vāsavī 120.
 婆私吒 Vasiṣṭha; Vasettha (p.) 34, 40.
 婆沙波 Vāspa; Vappa (p.) 86.
 跋蹉 Vatsa or Vanisa or Vadsala 3以下, 6以下, 105.
 跋耆(越祇) Vrjji; Vajji (p.) 3以下, 8, 12以下, 20, 76, 101, 114, 142, 162, 171.
 六 跋提=婆提喇迦
 馬勝=阿濕婆特
 ビール Samuel Beal 20.
 比丘 Bhikṣu; Bhikku (p.) 101以下,
 比丘尼 Bhikṣuṇī; Bhikkunī (p.) 101以下, 159.
 ビガンデット Bigandet 154.
 頻婆娑羅 Bimbisāra 4, 6以下, 55, 72, 90, 104, 120以下, 155, 159.
 畢鉢村人 Moriyas of Pipphalivana (p.) 153.
 賓頭盧 Piṇḍola (Bhāradvāja) 11, 103.
 ビブラーヴ Piprāva 134.
 白飯 Śuklodana 17.
 毗留提國婆羅門衆 Veṭhadipaka the Brāhman (p.) 153.
 毗提訶城 Videha .. 5, 8, 12, 23, 120.
 毗琉璃 Virūdhaka; Viḍūḍabha (p.) 3, 7, 128以下, 131以下, 135以下, 170.
 毗奢密多 Viśvamitra; Vessāmitta (p.) 34以下.
 富貴 Pukkusa 146.
 富蘭那迦葉 Pūraṇa Kāśyapa; Pūraṇa Kassapa (p.) 106, 126.
 富婁那 Pūrṇa (Maitrāyaṇīputra) 88, 124.
 弗迦沙 72.
 ベツベ Claxton Peppé 134.
 吠舍離城 Vaiśālī; Vesālī (p.) 1以下, 12, 73, 74, 101, 120, 142, 146, 157, 159, 163, 171, 173.

- 吠舍種 Vaiśya 88.
 吠陀 Veda 31, 36, 77, 83, 90.
 吠檀多 Vedānta 58.
 菩提樹 Bodhi-druma .. 64, 154.
 菩薩 Bodhisattva 24以下, 85, 179, 187以下, 195.
 梵天 Brahmā ... 38, 81以下, 105.
 梵施 Brahmadatta 109.
 褒多那城 Potala 14, 19.

マ行

- 摩伽陀 Magadha 3以下, 6以下, 10以下, 23, 53, 74, 75, 89, 91, 98, 115, 142, 155, 162, 164, 167.
 マーガンヂヤー Māgandiyā (p.) 161, 162.
 マグリア Magoulia (p.) ... 161.
 摩訶那摩, 摩訶男 Mahānāman 16以下, 86, 128, 132, 165, 170.
 摩訶波閣波提 Mahāprajāpati; Mahāpajāpati (p.) .. 17, 48, 159, 164, 173, 182.
 マヘーシヴラブラ Maheśvarapura 163.
 摩拘羅 Makula .. 73, 74, 106, 159.
 末伽梨拘舍梨 Makkhali Gosāla (p.) 126.
 末羅(力士) Malla 13, 20, 146, 147以下.
 末利 Mallikā 129, 135.
 曼陀羅華 Māndārava 152.
 マンタラ Mantala 163.
 摩菴 Manu 35.
 魔 Māra 83.
 摩訶摩耶夫人(大化) Mahāmāyā Devī .. 11, 17, 24, 27, 32, 103, 182.
 彌勒 Maitreya; Metteyya (p.) 25, 26, 163.
 彌緝羅城 Mithilā 5, 8, 12.
 無憂樹 Aśoka-druma 29.
 メツルヂ Metsurudi 130.
 目連 Maudgalyāyana; Moggallāna (p.) 20, 24, 91以下, 97, 103, 104, 111, 114, 119, 124, 156, 160, 174.

ヤ行

- 耶舍, 耶輸陀, 耶輸伽 Yaśa or Yaśoda; Yasu (p.) 78以下, 88, 89, 155.
 耶輸陀羅女 Yaśodharā 17, 22, 40, 46, 101, 159, 165.
 ヤウシサ Yauthitha 169.
 維摩詰 Vimalakīrtti ... 13, 164.
 由旬 Yojana 1, 2.

ラ行

- 藍毘尼 Lumbinī 2, 29, 32.
 羅摩 Rāma 38, 39.

羅睺羅 Rāhula
 22, 24, 41, 45, 49, 68, 95, 101, 112, 156, 164.
 楞伽島 Lankā 155, 165.
 離車 Licchavi
 3, 12, 20, 23, 142以下, 153, 171.
 離垢 Vimala 88.
 力士族=末羅
 靈鷲山=頻山
 蓮華色 Utpalavaṇā 105.
 鹿野苑 Mṛgadāva . . 86, 87, 148, 154.
 ロックヒル Rockhill 154.
 ロヒニ= Rohiṇī 13.

ワ行

ワジラー女 Vajirā 125.
 ワーサブハクハツチヤー女
 Vāsabha-Khattiyā (p.) . . 121.
 ワースラダッター女 Vāsula-
 dattā 10.
 ワルソン Horace Hayman
 - Wilson 20.
 ワッチ Vitzi 169.
 ワーランジャー Veranjā . . 163.
 ワーベル Albrecht Weber 20.

明治四十一年十月十一日印刷
明治四十一年十月十五日發行

（定價金七拾錢）



著者 常盤大定

高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者 佐久間衡治

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發行所

東京市小石川區原町六番地
振替貯金口座一五六八六番

丙午出版社

文學士 渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢 郵稅金拾貳錢

本書は新學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論(論)明瞭にして内容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老練の大著なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなるべし。

東洋大學講師 釋清潭先生著

◎寒山詩新釋

定價金五十錢 郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として披けざること著者精深雄大の學と才とを以て一筆勿斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩神を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

清水故默爾先生遺稿

◎紫風全集

定價金貳圓 郵稅金拾貳錢

清水君は教界の元勳島地默雷師の第二子にして其高學能文既に世に定評あり往年大志を懷きて印度に留學し佛敎梵典の研究に從ひ又大谷光瑞氏が佛蹟大探險の壯舉に加はりて功績頗る大なる者ありしが不幸にして未だ大に其所得を世に施くに至らずして異境に病歿す知友之を哀しみ其生前遺作せるところを集めて茲に之を公にす論文あり俳句あり漫筆あり書簡あり悉くこれ金玉の名文君が天才的詞藻の傑として輝けるを認め得べし。

文學博士 村上專精先生著

◎女性訓

定價金四拾錢 郵稅金六錢

本書の内容は、天職、中庸、實業、謙讓、節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を擧み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす。

文學博士 村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢 郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるるも誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

文學博士 村上專精先生著

◎自信錄

定價金五十錢 郵稅金八錢

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を人生の目的に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛敎學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし。

黒岩周六先生講演 丙午出版編輯

◎人生問題

定價金五十五錢 郵稅金八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を説き碩學之を論じて、而して懷疑の雲益々密に、苦悶の人心愈々多からむとす、然るに現代思想界の泰斗黒岩先生、自ら人生問題に達着して、疑問の源泉を探り、大に其深趣を得て、茲に此書あり、叙る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天籟の妙音なり、世の問ある人、疑ある人、速に來つて此福音に接せよ、庶幾くは平穩と満足と活力とを得て、温く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

新公論社編 ○附録學生銷夏法

◎男女學生氣質

定價金二十錢 郵稅金二錢

此書は坪内雄藏、柳橋鴻子、幸田露伴、村上專精、三輪田眞佐子、佐治實然、山縣三郎、中村五郎、堀山春子、本多庸一、南條文雄、小杉天外、山縣三郎、前田謙吉、井上圓了、島田三郎、松村介石、磯邊彌一郎、戸川燐花、鈴木泰太郎、石黒忠憲、遠藤龍水、中川謙次郎、南川流泉、田中治六、加藤唯堂、境野黃洋、中島徳藏、加納久宜、古家、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

文學博士 松本文三郎先生著

◎宗教と哲學

定價金四十五錢 郵稅金八錢

本書全篇十有餘章まで筆を宗教と哲學との根本問題に起し宗教と哲學とを並列して論じて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的根據にある事を闡明す蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得むなり。

文學博士 村上專精先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢 郵稅金八錢

博士の學殖富瞻に博士の見識卓越に博士の文章超凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを傾倒してこの著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては浩渺きさる大河となり、散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激瀾か蓋し近代稀有の快著なり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎阿彌陀佛

定價金卅五錢 郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや、是れ佛敎の根本問題也ケイラス博士その影響を採り殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たるや弊社讀に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして地和譯を得たり豈嘗に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢 郵稅金八錢

博士の學殖富瞻に博士の見識卓越に博士の文章超凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを傾倒してこの著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては浩渺きさる大河となり、散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激瀾か蓋し近代稀有の快著なり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎改訂強肺術

定價金四十錢 郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり。第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。第三、場所を要せざること。第四、努力を要せざること。第五、言文一致なること。第六、總ふり假名付なること。故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

醫學博士 ボール、ケイラス先生著 鈴木大拙居士譯

◎阿彌陀佛

定價金卅五錢 郵稅金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや、是れ佛敎の根本問題也ケイラス博士その影響を採り殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たるや弊社讀に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして地和譯を得たり豈嘗に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢 郵稅金八錢

博士の學殖富瞻に博士の見識卓越に博士の文章超凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを傾倒してこの著を作す政治を論じ宗教を説き文學を語り人物を評すその筆の向ふところ流れては浩渺きさる大河となり、散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡か激瀾か蓋し近代稀有の快著なり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

◎改訂強肺術

定價金四十錢 郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり。第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。第三、場所を要せざること。第四、努力を要せざること。第五、言文一致なること。第六、總ふり假名付なること。故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

澤利彦、森近連平兩先生共著

◎社會主義綱要

定價金四十錢 郵税金八錢

近時社會主義の理論及運動は頗る世人の注意を惹くに足るものありと雖も未だ其學說の概略をも窺ふことなくして徒らに附和雷同する者、或は輕々之を攻撃するもの頗る多く、殊に多少の教育ある人士にして社會主義に對して評論を試むる者の如き其無知實に驚くべきものあり。然るに此等人士の一讀すべき邦文の書冊極めて少くなく偶々之あるは二三の翻譯と時事に對する社會主義者の評論に過ぎず。科學的社會主義の原理各問題の解釋其史的發展及現今の諸潮流に就いて系統的に叙述するものに至つては絶えて之あることなし。著者此缺陥を補はんと欲して筆を執り平易簡明の文を以て深遠なる學理難解なる問題を解釋したる者即ち此書也。特に反對論に對する辯駁と社會主義運動の現状との二章は斯主義に對して毫も興味を有せざる人と雖も見落すべからざる處なり。今や燈下靜思の好季、社會各階級の人士に向つて此書を薦む。

橋 惠勝 先生著

◎淨土教發達史論

定價金六拾錢 郵税金六錢

精確なる史料により、明透なる識見を以て、前人の等閑に附したる印度に於ける淨土教の淵源を究尋して、東漸以來二、三千歳の間誤傳せし歴史の謬見を破し、佛敎歴史の真相を顯彰し、大乘非佛敎問題に鐵案を下したる、空前の研究なり。佛敎これによりて粉碎せられ、眞佛敎これによりて躍如たるん。眞佛敎これによりて假面を剥がれ、新佛敎これによりて光輝を放たむ。請ふ精讀を賜へ。

文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之先生著

◎迷想的宇宙觀

定價金七十五錢 郵税金八錢

昨年八月『吾國體と基督教』を刊行せし以來其批評續々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試み且つ簡單なる二大問題を擧げて讀者にその解答を乞へり基督教が迷信なりや否や又吾國體に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを得べしと信ず大方の君子實れて批評せらるゝこともあらば幸甚。

明治四十一年七月

著者 加藤弘之敬白

ワイナー、フアイト氏原著

東洋大學講師 中島德藏先生述

◎解說倫理學原論

定價金五十五錢 郵税金八錢

ワイナー、フアイト氏の『倫理學原論』は快樂論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓抜の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を提へてこれに明快なる解答を與へし一新著なりこれを以て吾國にても大島學士の翻譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを遺憾としこれが解説を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各章の順を追つて殆ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を窺はしめむと力め且つ譯過筆録の弊卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり。

明治四十一年七月

講述者 中島德藏敬白

文學博士 井上圓了先生新著

◎西航日録

定價金卅錢 郵税金四錢

是れ、井上博士の洋行土産なり。歐米に於ける、教育、宗教、文學、政治、經濟等の現況は、博士が周到なる觀察と、輕妙なる文辭とによりて、此に躍動す。征露の戰爭に於て、武名を世界に輝したる日本の國民は、また世界の大事に通ぜざるべからず、請ふ一本を購へ。

楚人冠 杉村廣太郎先生著

◎七花八裂

定價金六十錢 郵税金八錢

著者曰く、此書は、著者が、名に畏れず、戀に泣かず、半錢の債を負はず、半個の籠に庇はれず、天上天下、一點半畫も、他の擧財感壓を受ることなくして、縱に我が見得底を披露せる者、過去十三年間の悪文惡詩、收めて此の一巻の中に在り。著者の如く貧乏し、著者の如く墮落せんと欲する者は、請ふ此書を讀め。

文學博士 村上專精先生編

◎科原人論

定價金十二錢 郵税金二錢

右の二書は共に筆記書入れ等に便せんがため、本文の上下に空白を存し置きたれば、學校の教科書、學會の讀本として、最も適宜なり。

◎註大乗起信論

定價金十六錢 郵税金二錢

慈覺尊者眞著 高橋順次郎氏序 阿滿得壽先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金壹圓 郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり。特に悉曇と冠せしは新體梵字に簡げんが爲めなり。梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚註には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐桑二譯を掲げたり。學者此の書に依れば、悉曇學の一端を窺ふに易からん。

子爵 渡邊國武先生著 (印刷中)

◎無邊禪話

定價金 錢 郵税金 錢

これ一代の爲政家、渡邊子爵の活禪話なり。天を説き、世を説き、人を説く。即ち宗教論あり、處世論あり、修養談ありて、無邊俟禪の眞面目實にこゝに躍動す。強ひてこれを賣らむことを求めず、たゞこの書を讀める人の人格が、如何に光を増さむかを想つて、これを慶せむとするの念禁ずる能はざるなり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

◎達磨と陽明

定價金七十五錢 郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精微を發揮すると同時に王學の眼目を奮開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞に是れ精神世界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり。

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價 金七十錢
郵稅 金八錢

佛傳の大部を占むるものは神祕なる傳説なり、世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も、これ等の傳説が、古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見れば、その裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし。此著は、主として、是等の傳説の起原を尋ね、意義を究め、南北兩傳、大小兩系の相違を比較對照し、以てこの千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り。著者常盤大定先生夙に寫學能文を以て聞え、殊に佛傳の研究に従ふものこゝに年あり、此著の價值、蓋し推知し得むか。

ア、エフ、ステンツラー氏原著、フイ、萩原雲來氏譯補
エル、ヒツシエル氏 増訂、ロソフイエー

◎梵語入門

定價 金壹圓
郵稅 金八錢

歐亞言語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし、宗教の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし、東亞文明の根據を探らんとする人も梵語を學ぶべし。我邦一部人士の梵語を學ぶものあるも、彼等は或は成語の梵字典を使用す、されど歐語梵字典を用ゐんば、第一歐語を學ばざる可からざる不便あり、第二價格低廉ならず、今以上二種の缺點を補ひ梵字典に指を染むるの初歩たらしめむがために、創めて本書を公に出、自今以後、苟も英字母二十六を讀み得る人は、僅少なる代價を拂つて、悉く梵語を學ぶを得べく、梵本を讀むを得べし。

前文部次官澤柳政太郎先生序
スタンフ、オールド、大學總長ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ、中村平先生譯

◎人物の修養

定價 金五十錢
郵稅 金八錢

日蓮宗大學講師 島地大等先生著

◎佛教研究法

定價 金
郵稅 金

文學士 融道玄先生著

◎宗教學大意

定價 金
郵稅 金

ドクトル 渡邊海旭先生著

◎梵文理趣分

定價 金
郵稅 金

加藤咄堂居士著

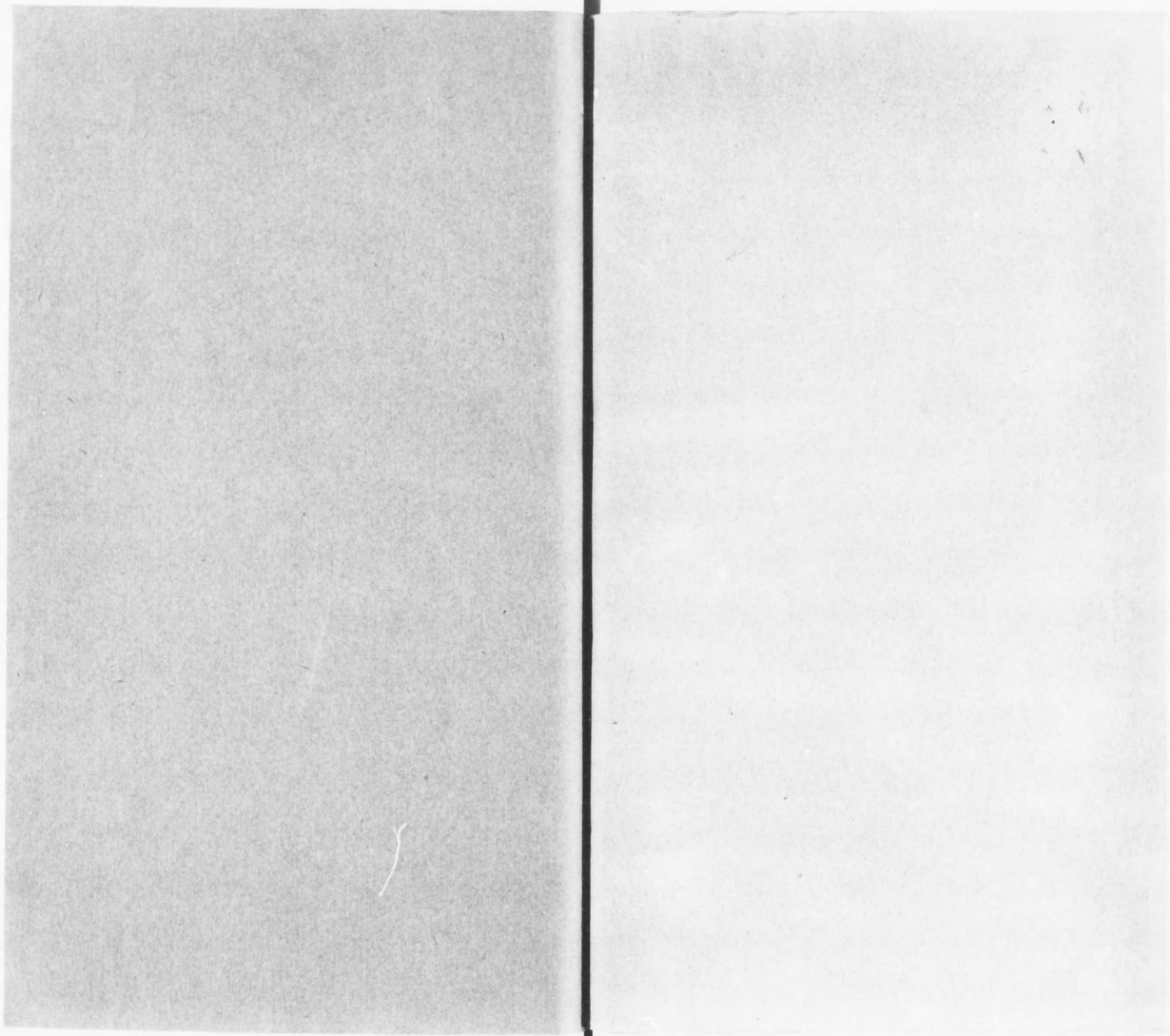
◎梵並音賢行願贊

定價 金
郵稅 金

◎觀音經講話

定價 金
郵稅 金

發行所 丙午出版社
東京市小石川區原町六番地
振替口座一五六八六



終